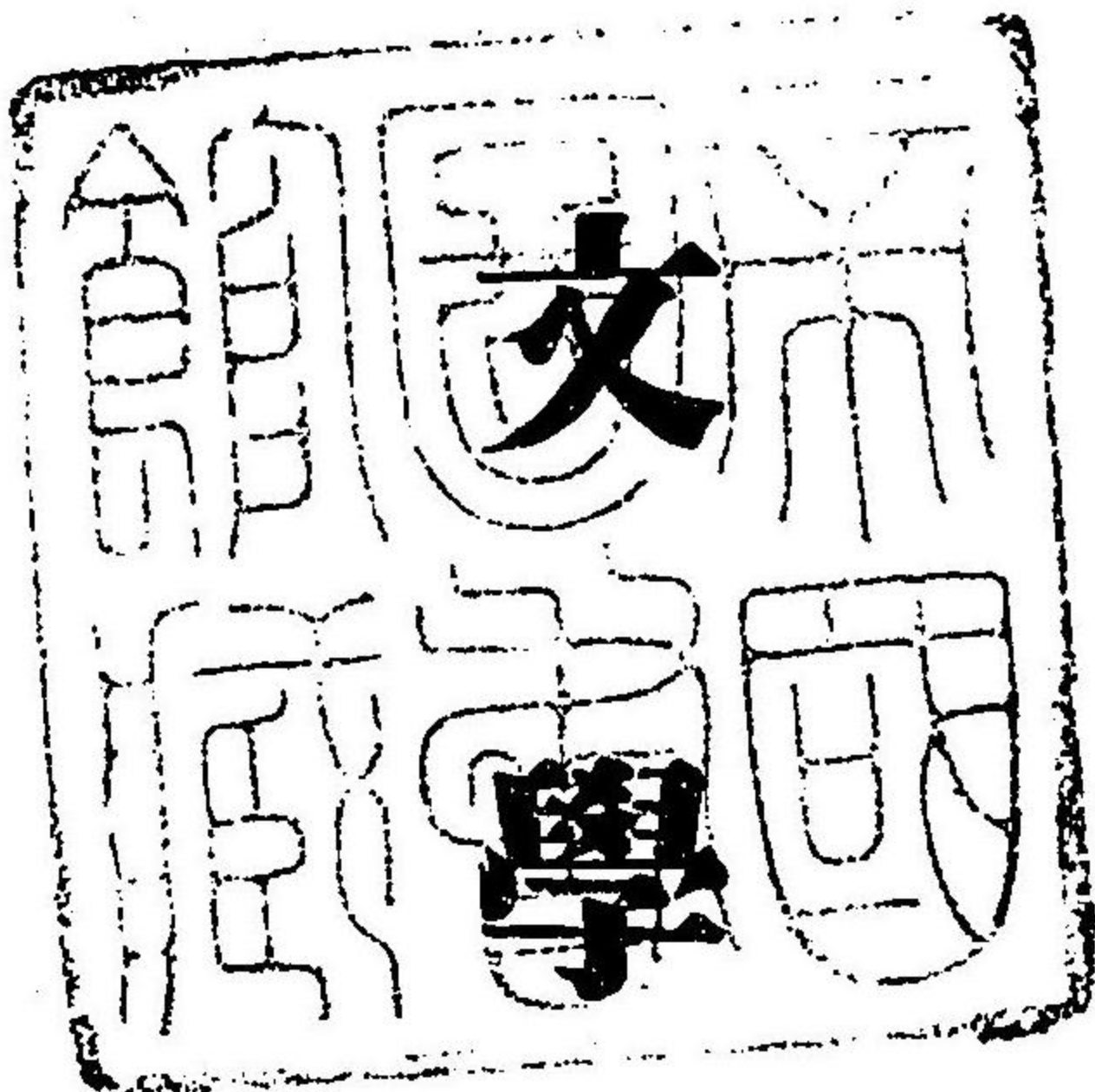


講師後藤寅之助述



綱要

完



東京專門學校藏版

文學綱要

緒言并びに凡例

一凡そ學問はもし出來得べくんば之れを系統的システムチックに攻究するをもて最良とす、即ち先づ一般普通の原理を確立し、さてのち個々局部の條理を一括して其の下に屬せしめ、恰も傘の幾多の骨が中心にある一本の軸に聚まりて開閉自在なるが如く、本末呼應、結構の整備せるをもて尤も佳しとす。吾人が文學を講ずるに方たりても亦願くば系統的に之れを述べ、讀者をして文學に對する秩然として鞏固なる智識を得しめんと欲す。然れども奈何せん、英米諸國に於ても未だ斯學を充分に系統的組織を立て、講述したる著書殆どなきの狀態なれば、吾人が今かるくしく之れに系統を立つるが如きは、大膽に過ぐるのみならず、其の効も亦多からざるべし。吾人が文學に對する稍系統的智識を得るの書として、先づトマス・アノーロドが『英文學提要』及びボスネットが『比較文學』シエールが『詩の諸相』エゾレットが『詩、喜劇及び義務』など云へるものに據らざるを得ざ

二
れど此等の書とても決して嚴格に所謂系統システムを立て、論述したるものにあらず。蓋し泰西諸國に於ても斯學を科學的に攻究して充分の成就を見たるもの未だ殆どあらざるの狀態なり。從來泰西に於ても文學は一面、美學の立脚地より、それが美と相渉る根本的理論は比較的に精緻なる研究にのぼり一面、美辭學の立脚地より、それが辭と相係るの邊に於いて稍見るべき攻厥に遇へり、故にこゝかしこに斷片としての文學研究は成立てりきと雖も文學みづからを中心とし自家の立點より、それが全部を統括的に講述したるものあるは吾人殆ど之れを聞かず。我が邦にては文學の文字こそは古へより口にしたら一科の學問としての所謂文學なるものゝ世人に知られたるは極めて近頃のことなれば隨うて之れに關する著書の如きも亦頗ぶる寥々たり。曩に内田不知庵氏が著せる『文學一斑』こそは此の類の書の嚆矢にして而かも稍々整備したるものなるべけれ。この他には坪内逍遙氏が『早稻田文學』に續載せる『美辭論稿』など或方面より文學の大體を知る捷徑として唯一の著なるべし。此等を措きては時々新聞雜誌に見ゆるきれゝの論說の外文學を論ずる著書殆ど絶無なり。矧んや文學の

全體を概括して系統的に論述せるものゝ如きは斯くも斯學の幼稚なる今日に於て到底望んで得べからず吾人が本講義に系統的攻究を捨てたるもの蓋し此の勢ひに鑑みればなり。

一前に述べたるが如き理由に依り吾人は系統的論述を姑く捨て、他の方法に頼りて本篇を講ぜざるべからず。思ふに其の學問の基礎未だ確立せず周到精緻なる審査も亦成らざるの時にあたり輕卒に系統を立てんとするは其の勞は多くして其の結果たるや、往々牽強附會に流れ或は忽ち破綻をあらはし僥倖にして破綻をあらはさざるも人をあやまるの虞なき能はず是れ學問に忠ならざるものなり。吾人が文學の系統的論述をなすの機運未だ熟せずとして暫く時期を待ち推究年をかさねて、それが蔗境に入るの曉までは他の方法を撰む所以のものに存するなり。さて其の代用する方法は奈何と云ふに文學上尤も顯者に於て且重大なる問題を逐次掲げ來たり序を追ひて論述せんとするにあり故に成るべく問題掲出の順序にも注意すべしと雖も或は前に論ずるが尤も便宜なるを後に出だし後に説く方一層可なるべきを先きにする如きことあらん。

されど吾人の期する所は各項毎に完結せる一篇の論文と見做し得るやうもの
せんとするにあれば決してさのみ不便なきを信ず。斯くして講述の全躰を讀
み去りたる結果文學の重なる諸問題を會得し髣髴の間に文學總躰の系統も
亦ちのづから讀者の心裏に映じ來らんを期す。

一前項に述べたる方針を以て講述すべければ専ら或一二部の書を限り其れに據
りて立論するが如きこと能はず其の問題によりて種々の書を参考せざるべか
らず故に豫め若干の書名を擧げて典據とするところを明かに志難し。されど
必要と思はるゝところは其の議論の出所及び引用書目及び著者の名を記入し
て讀者が他日更に深く斯學研究に従事する際の手引となすべし。

明治三十年十月

著者 識

文學綱要

後藤寅之助述

第一章 文學の定義

定義の必要 都て嚴格に或學問を攻究せんとするには先づそが定義を立つる
を以て發端とせざるべからず。定義とは其の學問の精髓的性質を正嚴簡潔に言
ひあらはしそが範圍と大躰の思想とを與ふるものにて之れを須要とする理由は
一三にして足らず。人間の研究すべき學問の主題は天地に充滿し森羅万象いづ
れも學者の替ふべき價値あらざるもの殆どなし故に學海は茫々として際涯を見
ず此の殆ど無限なる問題に對立して推究の企てをなすものは腦力有限にして眼
光甚だ薄弱なる吾人々間なり。こゝに於てか學問に種々の分科を生じ互に便宜
なる方向に就きて勞力を分かち以て或は上よりし、或は下よりし、或は直觀し、或は
剖析し、彼れは靈妙なる天地の實相を冥想に頼りて默會せんとし、是れは屹々とし
て雜多の機械に依り、あらゆる實驗に徴してそか妙相の一部を説明せんとす。而

二
して學問の深遠にして精緻明確ならんを期するの大勢と共にます。其の分科の數を増すは自然の傾向また各分科の區域を明かにするの必要起るも當然なり。言葉を換へて云はんか一科の學問を充分に精確明晰に考究せんとすれば其の學問の範圍を正當に且確かに定めざるべからず。何とならば他の學問との區域明かならざれば彼れ是れ其の問題とするところ紛ぎれ易す。件の學問の立地よりは審査の必要なきものまでを研究の領内に取りこみて無益に時間と勞力とを費すの虞なしとせず。つぶさに云へば吾人が或學問を充分に修めんとするには諸學者のそれに關する著述は勿論もし實際の見聞が補助をなし得べき種類の學問ならんか實地研究の爲に幾多の材料を蒐集せざるべからず、幾多の探檢をも經ざるべからず、又日常その主要なる未決の問題を孜孜として思索するの必要もあらん。然るに其の學問の範圍あきらかならば奈何なる種類の書を讀むべきか奈何なる材料を蒐集すべきか奈何なる方面に探檢を試むべきか實に迷はざるを得ざるべし。隨うて自然たゞ手の觸るゝに任せて之れを翻譯するが如き弊をも生ずるに至る。東洋にて學術の進歩遅々たりし原因の一として確かに此の學問

の範圍を定めて攻究の途に上らざるの風を數へ得べし是れ豫め定義を立つるの緊要なる理由の第一なり。

本來より云へば精確に所謂學問の定義を下さんには其の學問の完成の期を待たざるべからず。定義は其の學問の精髓を摘抉し來たるべきものなれば未だ幾多の疑問に過ぎられ研究の途上に彷徨する際に當たりては到底間然するところなき定義は成立し難し。されども其の學問に對する研究の結果を統括し組織的知識と做すの場合において正鵠をあやまたざらしめんには好し圓滿ならずとも定義をあらかじめ立て、以て其の大體の方針をさし示すを要す。この方針を示すこと、前段の範圍をきめること、は密接に關係して殆ど相分ち難きところあり。明確に學問の範圍をきめんには必ずや他との相違の點を擧げて彼此の境界を明にするのみならず其の固有の特質を發揮して他に比類なき所以を示し以て其の範圍の區劃するところを體かめざるべからず。されば範圍を明確にきむる中にはあつから其の特質を明にし本領を知らしむる邊を含めり隨うて大體の方針の如きは之れに伴うて見ゆるわけなるべし。さもあらばあれ觀察點を變ふる時

には一は範圍を定むるの方面より定義を要求し他は大體の方針を明にするの方面より定義の要求を做せりと見て可ならん。吾人は研究の結果を組織的知識と做すに方たり正鵠をあやまたざらしむる爲めといふ事を定義の必要なる理由の第二とす。

なべて或學問を充分に瞭解せんとするには或程度まで準備の學問を要するは人の皆な認むるところなり。此れと稍同じ理由にて或學問を明確に且つ容易に瞭解せんとするには先づそが大體の思想を豫め會得するの必要あり。蓋し研究の途にのぼるに方たり漠然ながらもそが大體の思想を有すると否とは用意の志かたに著き相違あり隨うて成功と否とに大關係あるや疑ひなけん。されば先づ大體の思想を與へて研究の途に上らしむるの點を以て吾人は定義を立つるの必要なる理由の第三とす。

これを要するになべて學問を嚴格に講せんとするに方たり先づ定義を以て始むる所以のものは(一)その學問の範圍を明にし研究の領分を定め材料の選擇に便にし成るべく徒勞を省かしめ(二)そが大體の方針をさし示して正當に研究の結果を

統括せしめ(三)そが大體の思想を與へて瞭解に便せんとするに外ならず。復言すれば研究の材料を蒐集摺撫する上より定義の必要を認めたるは第一の場合にしてそが既定の材料を組織する上より定義を要求する者は第二の場合なり而してそが既成の組織的知識を會得する上より定義を求むるは是れ第三の場合なり。』吾人は上の三つの理由にて文學を論ずるの劈頭まづそが定義を立てんと試むるものなり。特に文學の意義は甚だ漠然にして幾様にも解せられ或は哲學神學の類ひをも包括したるものと目せらるゝ趣もあり或は纔かに詩と同範圍を出でざるやうに解せらるゝこともあり。かゝる極めて大體の區域だに確定せざる學問を其のままに論究せんとするも勞は多くして其の成功は渺々しからざるの虞なき能はず。されば吾人は出來得るだけ其の範圍を確定しそが方針を明にし合せて其の大體の思想をも豫め知るを得しめんため定義を立つるに力めざるべからず。

定義の障礙 なべて精確に學問を攻究するには定義の缺くべからざる由はすでに纒陳したるが如し特に文學に於て其の然るを感ずることの深き理由も亦前に

一言したるが如し。かく定義の必要なるに拘らず之れを立つることの困難なるは亦尋常にあらず今吾人は其等の困難の種類及び性質をつらねあけて多小の説明を加へんとす。蓋し其の困難は竟に越ゆべからざるものか若し越え得べしとすれば奈何にして其の障碍を排除して吾人の目的を遂くべきか文學の定義は竟に立つべからざるものか若し立つべきものとすれば奈何の基礎の上に立たざるべからざるか此等の問題を解くは決して無用のことにあらず。思ふに定義を立つるの困難を仔細に警査するは直にこれ其の困難を解くの最も大切なる道の一つにして充分困難を研究し出來得るだけ之れを排除し去りてさて後立て得たる定義は比較的堅固なるものたらざるべからず。

案ずるに定義なるものは或學問が稍嚴格に研究せられたる場合即ち少くとも一箇の科學たらしめん、の企てある際にあらざれば必要感ぜられず隨うて學問界に科學的研究の風潮起こらざる國には定義と云ふが如きものは殆どあらざるを常とす。されば文學の定義の如きも此の學を他の諸學科に對立せしめ嚴格に攻究する程には文運の進歩せざる我が邦に於て未だ之れを見ざるは毫も怪むに足ら

ず。吾人がこゝに論ずる所謂文學は英語にて *Literature* と稱するものを指すに外ならざれば比較的、に斯學の研究我れよりは進歩したる彼の國に於て斯學の定義の確立し難かりし事情を述べなば直に移して我が國のをも説明するに難からじ。文學すなはち *Literature* の義いかんと今エプストルが大字典を案ずるに索と此の語は羅典語の *Literatura* または *Literatura* より出で原義は學問書けるもの、文典などなりき。ボスネットが『比較文學』にも文學の語は羅馬人の間に於ても其の意味一定せず *Literatura* *Green* の句を希臘文字の象形といふ義に用ひク *リアン* は文典を *Literatura* と唱へ而してシセロは之れを學問または學識などの通例の意味に用ひたりとあり。現今の歐洲文學の淵源とも云ふべき古文學復興期の學者等は漫然 *リテネチユア* の文字を羅典の原義のまゝ借り用ひても頗る彼の時とは相違せる當代の思想を此の言葉にてあらはし別に適當なる解釋を定むるが如きことをなさざりき、况んや此の語に依りて他の學問に對する斯學の區域を劃する標的となさんなどの考へは毫もあらざりき。思ふに一面より云へば當時は偏へに希臘羅馬の古文學研究に忙しく語義の詮鑿の如きは顧みるの餘地な

かりしなるべく、又一面より云へば他の諸學問も未だ今日の如く井然と區劃定まりて相對壘するの勢ひも熾んならざりしなるべく隨うて其の境界を明にするの必要も、さまで感ぜられざりしならん。かゝる状態なれば久しき間「リテレチユア」の義は單に「都て記録せられたる人間の思想」又は「たゞ文字の集まりたるもの若しは「文字の知識」などの意味に用ひられ決して一科の學問を代表するに足る確定の解これに伴はずりき。勿論羅典の古義のまゝに漫然「リテレチユア」の語を用ひたりと雖も這は舊慣になづみて徒らに襲踏し來たりたるものなれば既に古文學復興期の所謂文學その者の精確なる意義かゝる意義を問ふの必要もなかりしならんがど此の文字とは頗る折合はざりし所ありしや疑ひなし。潛遷默移して變化かざりなき人間の思想に對して比較的枯死不動の性ある文字は到底それと共に競ひ進むこと難し、されば其の思想その事物はいたく昔時のとは異りながらも尙在來の文字言語にて假りにそをあらはすの例は古今東西ともに枚舉に違わらず。かく假りに舊語にて新義をあらはす場合にて若し明に意識してゑかするに方たりては用語の釋を附して後の誤解を防ぎ得べし、されど意識して斯くする

はいと稀れにして寧ろ知らずくの間に行はれある者多分を占む故に其の弊や深くして抜くべからざるものあり文學の語の如き其の一例なり。かく「リテレチユア」の語源すでに漠然として久しき間そのまゝ用ひ來たりしものなれば此の語にて代表せられるは果して何程の意味なるかの間に答ふるは頗る困難なり復言すればそが語源の茫漠模糊たるは文學の定義を立つる障礙の第一なり。

我が國に於ても文學の文字は古くよりありながら或は之れを文武と對し用ひて文學を都ての學問の總稱とし或は通俗に之れを文章の學ならんと考ふるさへあり蓋し此等も語源より來たりたる弊なるべし。歐陽修が「藝文志論」に

夫王迹熄而詩亡。離騷作而文辭之士興。歷代盛衰文章與時高下。然其變態百出不可窮極何其多也。

又「文體明辨」に

魏文帝曰。文章經國之大業。不朽之盛事。年壽有時而盡。采樂止於其身。二者必至之常。未若文章之無究。

これ等の例にては文章と文學とは説明するまでもなく殆ど同義なり。然るに輓

近文章と通俗に云ふ時には單に修辭のわざとやうに解せられ文章の義至て狭くなれり而かも尙截然として文章とは修辭のわざに限られたるにあらず動もすれば文章と文學と混同するも強ち理由なきにあらず。

さて「リテレチユア」の義は元來前に云へる如く殆ど一般の書きたる物又は學問を包括し來たれり今日に於ては何人も科學と文學とを混同するものあらざれども以前は科學をさへ合めて文學と云へるの例少なからず。ハラムは其の著『歐洲文學』の緒言に於いて「リテレチユア」の語を書籍に依りて與へらるゝもろくの知識と云ふ程の尤も廣き意味に用ひ此の語をもて論理、天文學、戲曲、哲學、經濟學、法律醫學及び神學などを統括したる名目に當て籍めたり但し氏は特にうるはしき言葉にて綴れるかはた哲學の精神をもてものせるものを除きては歴史を文學の範圍に入れざりき。かゝる有様なればポステットが文學の語は恰もいろくの場合にさまざまの物を無闇に填めこみし爲に破れたる古き囊の如しと云へるも當たらざるの評にあらず。されども漸次諸科學の研究進歩して各獨立の地位を占め嚴然あひ對壘するやうになりては自然曖昧なる文學なる名稱の領分を離るゝや

勢ひの然らしむるところなり。近世諸種の科學大に起こりて追々文學の包括する區域せまくなりゆくと共に殆ど科學と對してのみ用ひらるゝが如き言葉とされる趣あり。別言すれば文學に包括せられ居しあらゆる學問中にて進歩するものは追々科學の部に入り文學より分離し去りて獨立し幾かにあとに残れるものゝみが今の所謂文學と呼ばるゝの有様なきにあらず。かるが故に精確に一箇の科學と云ひ得ざるものは殆どみな文學の範圍に雜然と混入しあるの氣味あり是れ文學の定義の容易に立ち難き理由の第二なり。

文學がその國の風土、氣候、人情、慣習などに依りて其の形を定むる由は近世の學者これを詳論して殆ど餘蘊なし。されば社會の狀態の變遷につれて文學も亦異動するは自然のことわりなり。カール・オトフリード・ムラーア (Karl Otfried Müller) は希臘の詩の三大別を檢して此の國に於ける文明の三大階段を模索し得と云へり。即ち敘事詩は當代の人心が古へより云ひつぎ語り傳へたる昔譚に富み、また之れを聽きていたく鼓舞せられたる帝政時代に屬し、悲調を帯びたる抒情詩は世態やうやく複雑にして波瀾も隨うておほかりし共和政治の下に起こり、又劇詩は雅典

の權力頂巔に達し人民その自由を謳歌したる際にあらはれたり云へり。これは時代の變遷と文學の推移とは離るべからざる所以を説明するに足る一例たるに過ぎず。いづれの國、奈何なる場合の文學にてもそを仔細に考究すれば必ずや其の社會の狀態と密接に關係するを發見するは難からじ。我が邦に於ても和文は中古以來もに深窓に人となれる婦女子の手に守り育てられたるがため、適勁の氣に乏しくして優婉をもて勝されるが如き、元祿の放縱華美の時には又それによさはしき近松西鶴などが文壇に馳騁したるなど、是れも亦一例として見るを得べし。兎も角文學は其の時、其の處に特殊なる思想、感情、動作、言語の反映なるは論なし。かく時により處によりて千態万狀なるが故に一をもて到底全軀を律し難きものなるに、概括的にして而かも意味明確ならざる「文學」の語をもて全般を蔽ひたるが爲にちのづから時と場所とを超越したる絶對の一致を認めんとする傾向あり、されば此の文學なる語は吾人をして文學の發達性を拒否して時と場所との奈何を問はず常に一定不動なるやうに思はしむる趣見ゆ而して此の文學を靜止不變なるやうに思ふの僻見たるや、幾度か文學の種類を比較對照したる後ならでは

脱し難きものなり。かく文學をもて殆ど枯死不動の一頑塊の如きものと見做し且文學の模範は希臘の黄金時代と聞えたるペリクルス及びオーガスタスの時世にあらはれたる作物に限されりとの信仰が一時非常に歐洲に勢力ありき。是れ正しく希臘羅馬の古文學を熱心に研究せる當時の流行あづかりて力ありしや疑ひなし。文學の模範は普遍一如なり而して雅典及び羅馬より出でたる傑作を本尊とし之れを只管模倣するをもて文學の能事終れりと信じたるは間接又は直接に中世の神學及び哲學の傾向に由來せるは明白なり。されども文學は決して美の一定普通の形及び想を切り拵めたるものにはあらで創作も批評も凡そ文學の範圍に屬する限りは必ずや社會の發達と齟齬して離れざるの理を今事實の上にて證するの一段には多少容易ならざる事情あり。隨うて文學なる語にて現されたるもろくの概念はそが變遷を辿りて溯りゆくにつれ一歩々々に減却し去るの事實を明かにするにも少しく困難あり。別言すれば吾人が現今立て置ける文學上のさまざまなる差別例へば叙事詩、抒情詩、戯曲などいへるものは其の古へに溯りゆけば竟に蠻族の謠に歸し其の間の區劃沒して一軀に融和するところの事

實を今表明せんとするには多少の障礙あるを免れず。蓋し既に國民と云はるべき國籍になれるものは其の祖先を誇らんための負けじ魂などより兎角未だ勢力なかりし時代の事實を回顧するを好まず我が邦は云々の蠻族の子孫なりなどいふことを思ひ返すは何れの國民も餘り好まざるものなり。又よしや其の草昧未開の事實を探らんとするも到底材料乏しくして及ばざるの事情あり。未だ國民的團結を成さざる種族にありては他の進歩したる社會の有様を模倣するが爲に其の天真を蔽ひ去らるゝの弊もあり。此等の事情は共に本來差別を含める文學の觀念を一變して時と處とに依りてあつから生ずる社會的及び個人的特質の考へを除かしめ混淆無差別のものとならしむ。この渾沌雜糅の裏に明に文學の發達したる自然の段階の跡を辿るを得しむるものは獨り史の科學的推究に外ならず。されども文學の領分に史の科學的推究の應用せられたるは極めて近代のことなり。一千八百三十八年にハラムは佛蘭西には『佛國文學通史』と稱すべきもの一もあるなし又我が邦(英國)にては此の種類の極めて淺腐なる書だに著さんの計畫も未だ見るを得ずと云ひ又ドナルドソンがムーラー著『古希臘文學』の翻譯の

第一卷に掲げたる序文に此の書の刊行の以前には『希臘文學史』は一も英語にて公けにせられたることなしと云へるは一千八百四十年一月のことなり。此等の事實にて文學の史を科學的に推究することは今も尙甚だ幼稚なる境域を脱し得ざる所以を知り得べし。かるが故に常人は勢ひ古への所謂文學も今の所謂文學も皆な一樣なる概念の中に混じ去るの弊に陥るを免れず。又學識ある批評家も文學は社會の發達につれて變遷するの理を見落とすこと頗る多きは強ち無理と云ひ難し。何となれば吾人は詩人の手に成れる作物が何故に人を樂ましむるかの問題を解かんとするに方たりてや吾人々間に具はれる智情感覺の上にそか原因を求めずして其の作物を解剖し其の中に原因を探らんとするの傾あり。さればこそアリストートルの著なりと傳へる『詩論』(Poetics)を見ても劇詩の原則を雅典の諸作家の實例特にソポクルスが作より抽き出さんと力めたるならぬ。かく作をもて最終の問題と看做し毫も雅典の社會的生活が劇詩の發達と如何の關係を有せるかは考究せられざりき。詳言すれば上代の希臘に抒情敘事の詩専ら榮えて雅典極盛の世には劇詩文壇を獨占したるは何故なりしやを尋ね社會の發達

と文學の變遷とは決して離るべからざる因縁の存するを問ふもの甚だ罕なりき。社會の狀態が文學の上に影響の重大なるを不問に附したるの結果、希臘の批評家は竟に文學の本旨は過去の傑作を模倣するにあり、思想は不易にして進歩せず、又文學の性質は個人の特質、言語の種類及び時と場所との状況に賴りて變化するものにあらずとの死論を熾んらしむるに至れり。羅馬の美術家が模倣的作物に於いて稍成功したるが爲に上に述べたる希臘の死論も頗る勢力をあらはし羅馬人を経て現今の歐洲に傳はり到るところ文學の眞正の發達を多少妨げたり。然るに英吉利及び西班牙まづ劇詩に新機軸を出だし文學は決して模倣を事とすべきものにあらずる所以を天下に告白せり、獨逸及び佛蘭西に於てもゲーテ、ユーゴーの如き卓識の士また之れを唱道し、シニエ、クスピア及びカルデロンの技を推尊して希臘の舊模型に代らしめんと企てき。思ふに眞の文學上の技術と云はるべきものは原型の模倣に止まるべきものにあらずるや論なし、若し其の原型を生じたる當時の社會の狀態とはいたく形勢を異にしたる場合には其の原型は全く時とくれの廢物たらざるを得ず、隨うて文學のもろくの理想も社會に於け

る其の折々の現象に憑據するものたるや疑ひを容れず。

前段に續述したる如く文學は時と共に推移して變化限りなきものなれば、其の一定普通の點を捕ふることも頗る難し、能はずと云はず、すでに此の一定普通の性質を見出すことも容易ならざれば定義を立つることもあつからず、容易ならざる所以なり。而して吾人は無制限すなはち普通の標準を假に立て、文學を律せんとすれば殆ど其の性質に於て異なる希臘の劇と支那の劇とを同じ尺度にて測るが如きことなき能はず、勿論理は天下普通の尺度なれば如何に異種類のものにても同一標準にて批評すること決して出處得ずとは云ふべからず。されど殆ど類を異にしたるものを同一の標準にて測察せんとすれば先づその標準が絶対に正しきものか否かを吟味せざればその長短の正しき測定覺束なし。かるが故に異類を同一標準にて判断するは兎も角頗る困難なる事業なりとは疑ひなし。約言すれば一方に於いて文學は變遷して止まざるものなれば、それが普通不易の性質をたやすく知り難きと共に他方に於て一定の標準を立て、文學とは斯くの如きのなりと限ざらんとするも何れの國の奈何なる著作をもてそが本位とすべきや看定め難

きが爲め勢ひ迷はざるを得ず。かゝる一定の性質を捕へ難きもの即ち雜糅混淆の一團塊に附するに文學なる名を以てす其の意義の漠然たるは元より怪むに足らず是れ文學の定義の立ち難き理由の第三なり。

文學が社會の進運につれて變化するといふ根本の事實より文學の意義を晦ましそが定義を立つるの障礙となるもの二つあり。勿論この二者は根本は同一事實より生じたる結果にして頗る緊密なる關係を有し殆ど同一事に對して唯觀察點を變へて論ずるが如き趣なきにあらず。されど前段に説けるとはちのづから趣を異にすれば定義を立つるの困難なる理を講ずるには必ず述べざるべからず。すなはち文學の目的とするところ及びそが目的を達するの手段が社會の變遷につれて推移する是れ文學の意義を捕捉するに難からしめたる原因の一なり。ストップホルド、ブルーク (Stopford Brooke) 曰はく

文學とは聰明なる男女の思想感情を記録して讀者を樂ましむるやう排列したるものを云ふ(中略)散文は文致と特質とを具へ且精緻なる注意をもつものしたるものにあらずれば文學にあらず

と。吾人は氏が所謂散文の區域は何程の廣分に限されるかを今は問はじ、又散文の發達に關する問題もあれど違ふ亦今は云はじ而して氏が文學を科學に對照せしめ、そが目的は啓發教誨にあるにあらずして人を樂ましむるにありと云ふを假に是認せんか。文學が興ふるところの樂みちよび之れを興ふるの手段は社會の變遷につれて驚くべき相違あり。例へば吾人が現今の立脚地より見る時にはゼツン (Job) 云ふが如く

記録せられざれば文學にあらず何とならば文學は一定の形を具ふるものなり而して記憶は縱令大に用を爲すに足ると雖も單に記憶のみに依懸せる口頭の話柄は一定の形を持つるを保する能はず

との説の稍々正當に見ゆるは論を待たむ。されども吾人は希臘に於いてはそが文化の頂巔に達したる際すらも文學的愉快を興ふるに音樂及び舞踏(演劇とは云はず)が大にあづかりて力ありしは今日刊本を讀むに馴れたるものには殆ど怪訝に堪へざる程なりしことの事實を忘るべからず。文學の樂みなるものは當時の入間の普通の性情と共に變ずるのみならず又この樂みを興ふる手段も同様に推

移するを免れず。すなはち身ぶり、音楽、踊、謡などを粗末に結び合せて言葉は極めて緊要ならざりし時代の文學と今の印刷したる文字をもて必要の利器とする時代の文學とを比較し來たる時には思ひ半ばに過ぐるものあるべし。英のクレイの作に係る所謂ビन्दル風の短詩とビन्दル(希臘の詩人)みづからの短詩とを比較し見よ其の名こそは似たれ其の實は霄壤の差あり。而して重に後者をして活動せしめたるものは之れを朗詠し之れを舞踏するの點にありしも既に二千年前に此の短詩の血肉たる之れに伴へる歌舞は消滅し去りたれば今や機かにそが骸骨のみ吾人に讀まるゝなり。されば前者に於て吾人が見るか如く印刷せる文字によりて専ら目と耳とに訴ふる今日の世となりては詩の思想をして現代に適應せしむるの他にビन्दルが古詩の骸骨に肉するの道なきを覺るゝこと難からじ。我が國にて例を取らんか『萬葉集』時代の歌は今日の如く單に讀むものとして作られたるにあらで素と咨嗟咏歎の餘に成れるものなれば之れを朗吟するをもて主としたるものなるべし、されば單に讀みて其の思想を默解するのみにてはさのみ價值あるやうに覺えざるものもあるも怪むに足らず、畢竟するに是れ血肉すでに落

ちたる骸骨なればなるべし。

よき人のよしとよく見てよしと云ひし吉野よく見よよき人よく見つ

あられうつあられ松原すみのえのおとひをとめと見れどあかぬかも

などの類ひ例とすべし

今日にてもかの海士のうたふ舟歌と稱するものゝ如き櫓拍子おもしろく聲ながやかにうたへばこそ人を動かす力もあれ唯これを讀みては殆ど花なき枝を見る心地す。

船頭かあいやあんの瀬戸で一丈五尺の櫓がしわる

七里しちしま五里ごしま一里まわりが二十五島

などにて一斑を知るべしこの外長唄の「松づくし」江戸節の「鞠子」などもたゞ讀みものとしては殆ど興味索然たるも畢竟するに皆な同一理なり是れ文學的快味を興ふるにも其の時代その境遇の異ると共にその手段もあつから異なるの例として尤も卑近なるものゝ一なり。

前には文學はもし樂みを人に興ふるが目的なりと許すどせんこそが樂みを興ふ

る手段がその事情境遇と共に同じからざるを説明せしが文學上の作物が理想として立つるところの目的も亦社會の狀態即ち四圍の事情境遇と共に變するを免れず。現今一般の英米人が信ずるところに依れば科學が正當に目的とする所は啓發教導にあり然るに文學の目的は樂みにあり、詳言すれば當代の人民の最大多數に最大の樂みを與ふるを極致とす。パルグレイヴ氏の如きは此の輿論を代表せるものと見て可ならん。氏は其の著「沙翁が短詩歌」の中に

樂みは詩の目的なりそが最もよく其の職分をつくすは最大多數の人に最大の樂みを與ふるにあり

と云へり。是れ社會やうやく進歩して文學を賞翫するの範圍大に擴張せられ一般の精神平民主義に傾きていたく輿論概ね愚論たるを免れざるもの(を)重ずるの時に方たりてのみ尤も適當なる説なるべし。試みに希臘羅馬の昔にかへりて此の立論を適用し見よ學識ある人は頗る少數にして他は皆な文盲の奴隸なりき斯かる場合に最大多數に最大の樂みを與ふるが文學の目的なりとの説の當て筈まらざるや火を見るより明けし。又エムペドクルスが科學詩(The Science-poetry)及び

プラトローが「ダイアローグス」問答録の如く科學と文學と密接に組みあひて分ち難きもの文壇を占めたる際には科學と文學との區別はいづれのところにか應用せん。今日に在りては科學と文學との區別は自然にして毫も疑ふべきものなきやうなれど是れとても正しく社會の進歩にもなへる進化の道ゆきに於ける一段階たるに外ならず。文學の理想として立てたる目的か進化の理法に従ひ社會の發動につれて變遷するの理は各國の著述に徴していと明かなり。スベンサルが『仙女王』(Faerie Queen)の序文に「精神貴人をして高德温厚の美風に薫染せしめんが爲に之れをものすと云へる士爵主義の詩論と現今歐米に行はるゝ輿論主義の文學の觀念と決して相容れざるは怪むに足らず。支那の戯曲傳奇の如く道徳主義を嚴格に格守するものあれば希臘の如く喜劇は勿論悲劇にいたるまで殆ど教誨の目的を含みいるを見出だし難きものもありアリストパチス等の作よく之れを證す。吾人は今こゝに奈何なる理想を目的とする文學が高くまた奈何なるを低しとすなどの吟味はせざるべし。たゞ上にあげたる事實によりて文學の理想とするところも其の時と處の狀態にてさまざまに變遷あり中には全く相反對する

が如きものさへあるを示し斯かる柄整あひ容れざる雑多のものを共通の一定義の下に統括するは頗る困難なる所以決して能はずとは云はずを明にせんとするものなり是れ即ち文學の定義の立ち難き第四の理由なり。

吾人が或學問に定義を與へんとするや先づ其の學問が取扱ふ問題を起點とするが頗る簡便の法なり例へば植物學に於ける問題は植物の研究なるが故に之れを起點とし、天文學の問題は天體の研究なるが故に之れに發途點を求むるの便宜あり、文學に至りてはそれとこと變りそが問題とするところ甚だ茫漠として殆ど捕捉するに困む。モイレルがその著『英文學』の卷頭に「文學に精確なる定義を與ふること難し、蓋し其の問題が茫漠たればなり、されど人を主題とするものなりとは明言し得べし、文學は個人ならびに人間として之れを取扱ふ、思ふに人の人たる特點は言葉を用ふるの力にあり」と云へり。げにやモイレルが言の如し文學は人間を主題とするものなりと云は、當り障りなく又間違ひもなからん、されど斯く餘り漠然と云ひては究竟するところ其の主題の限界を全く示さざると殆ど撰むところなく、始めより何事をも言はざると等しかるべし。時代と場所とに依りて文學の

問題なりと見做さるゝものに相違あるは既に前にて云ひたり、而して同時同國にても現に文學の問題は奈何なる範圍に限ざらるゝかは其の大體だに定まらざるなり。或者は哲學、宗教、美術、歴史などに關する都ての事柄を文學上の問題なりと云ひ、或者は又單に詩歌小説の類ひのみが文學なりと云ひ、又或者は歴史は文學にあらずれども哲學と宗教と詩(廣義の)とは共に是れ文學なりなど、さまざまに考ふるにあらざや。詮ずるところ文學上の問題は奈何なる區域なるや未だ明かならず、隨うて定義の發途點とし又至要の據りどころと頼むべきものを缺くの憾みあり。是れ定義を文學に與ふるに容易ならざる第五の理由なり。

今假に文學の意義を狭く見て云はんか。文學を科學的に論究せんとする時には正當に文學の範圍にこめらるべき幾多の問題がいろ／＼の姿となりて多少文學論に縁あるものゝ中にかくれあるが如き趣あり。例へば文法學、修辭學、審美學など云へるものがいろ／＼の方面より文學を研究するが故に文學は恰も四肢はなればなれに切り放されたる人體の如し其の本來を全體として見ること頗る困難なり。かく八方に斷片となりて散りあるを掻き集め之れを融和し統合して脈絡

到徹せる一完膚となすは容易ならず。且断片なりとも既に吾人の知り易き形となりあるものは比較的にたやすく抜き出だし來たるの便あるべけれど未だ何等の研究にも上らずして潜みある部分も恐らくは尠少ならざるべし。是れ文學の定義の下だし易すからざる第六の理由とす。

吾人が上に縷述し來たれる要點を摘みて復言せんか。文學の定義を立つることの容易ならざる理由は下の如し。第一文學なる字義が語源に於て既に多義を含み居るのみならず久しき間極めて漠然と用ひられし爲めこの語に依りて直に文學の意義を確定し得ざること。第二精緻なる科學的攻究の節を渡過したるものは科學となり跡に残れる滓渣を指して文學といふの觀あり然るに此の滓渣たるや混淆雜糅の塊なれば之れを總括して一名目にて云ひ表はすこと頗る難きこと。第三變遷移動して暫くも靜止せざるところの人間の思想感情の發現が即ち之れ文學なれば時と處どに關係なく其の名はつねに同一なるに拘らず其の物はいたく異らざるを得ず故に一定普通の點を捕ふること極めて易すからざること。第四文學の目的とするところは勿論その目的を達するの手段も時と處どに依り推

移するが故に文學の本位を確立すること難く同一の準繩を用ひて異類を律するの弊に陥り易きこと。第五他の科學はその取扱ふべき主題は最初より概ね明に知られ居れども文學の主題は實に漠然にして研究の起點を見出すに迷はざるを得ざること。第六文學は多少過去に於ても研究せられたれども此等の多分は種々なる他の學問の中に潜在す而して之れを搜索し來たりて程よく綴り合はするは随分容易ならず且その搜し出だせる物たるや極めて幼稚なるか然らざれば不完全なるが多きこと是れなり。

右の六箇條の障妨に遭ひて吾人は文學の定義を立つるの頗る困難なるを知ると共に他方に於ては發明するところも亦一二にあらず。第一の障妨に依りて吾人は用語の意義を明確にせざれば學術の攻究にいたく不便なることを覺り文學はその語源に於て多義なりしと且久しく此の語が濫用の經歷を有するが爲に斯學の攻究に堪なからぬ妨害を興へたるを看いよ文學の定義の必要を認むるなり。第二の障妨に依りて吾人は文學と從來漠然唱へ來たれる混淆雜糅の團塊を精査し此の中には到底同一科の下に統合すべからざる異分子を含めるや否を

看果して斯かる異分子の混在するあらば之れを排除して文學の版圖を確定する準備を爲すの道を教へらる。第三の障礙は文學の定義は推移變遷つねに活動して止まざる古今人間の思想感情の表現の全軀を一括統合し得る性質のものたるべからざるといふ用意を吾人に告ぐるに足る。第四の障礙は文學の定義は時と場所とを超越する不易の根本的性質を捕へ來りてそが基礎と爲さるべからざるといふの理を明にす。第五の障礙は定義の據どころとなるべき斯學の主題を先づ發見し來らざるべからざる吾人に教ふ。第六の障礙は斯學の幼稚にして前途の遼遠なるを示すと共に一方には斯學研究の材料の決して得難からざること及び斯學を立つるの基礎全くなきにあらざることと吾人に知らしむ。以上の事柄に依りて吾人は文學の定義を立つるに當たり大體の方針を定め得べし即ち(一)主題を定め異分子を排除し(二)變遷を包容し(三)時と場所とを超越し得るものを確立せざるべからざる豫望を以て研究の途に就くを得べし。約言すれば文學の本領を明に定めてそが普遍不易の精髓を表はすの心得を以て定義に臨まざるべからざるの覺悟を得たるものなり。

文學の定義　吾人は自家の定義を立つるの前に先ち泰西諸學者が奈何なる定義を文學に與へたりしかを看順を追ひて此等のものを批評し去り竟に必然の結論として吾人の所見を立つることとすべし。さて吾人は此等諸學者の定義を紹介するにも先づ疎なるものを擧げて次第に密なるものに入らんとす、斯く秩序を立つるは無用なるやうなれども是れ批評上勞を省き且讀者にも瞭解に便なるべければなり。これより先き定義の障礙を論じたる際にも既にブルーク、セツプ等の極めて疎なる定義を掲げ置きたるが彼等よりは更に進みたる他のものを見ん。ゴッストル氏はその『大字典』に於いて曰はく

文學は其の尤も廣き意味に於ては、觀察、思想若くは想像の結果を保存する爲に筆記し又は印刷したるあらゆる著作を含むされど確實科學(positiv science)の諸著は通例これを除く。さはあれ時としては文學の區域の美文(Belle-lettres)即ち雅趣の作并に情感の作にのみ限ることあり例へば詩歌、能辯、史傳等是れなり抽象的議論および純粹なる學術の文はこれを除く

と氏は元より文學を科學的に見て定義を立てたるにあらざれば其の云ひさま頗

る不完全なり。廣義に云ふ文學とは數學などの確實科學の諸作を除きて跡に残れる都ての著述を指す(觀察、思想若くは想像の結果といふが故に)とやうに説きたればとて是れ決して文學とは何ぞやとの正當なる答とするには足らず、氏は消極的の説明を與へたれども未だ積極的に文學の特質を云ひ表はさざりき、是れ定義としては慊焉たらざるものにあらざや。狹義に所謂文學とは雅趣および感情の作といへるは稍、穩當なるに似たれども尙文學の重要なる特點を遺漏し居るにはあらざるなきかと思はる此等の疑はしき點は追々後の條にて論ずべし。

さて吾人はエプスタールの文學の解釋にて廣義と狹義との別を見たり先づ何よりも先きに吾人の此の篇に所謂文學は二者のいつれを指すかを決定せざるべからず。換言すれば前に文學の定義の障礙第二條および第五條に依りて教へられたるが如く文學と從來漠然と唱へ來れる混淆雜糅の團塊を精査し其の中に到底同一科の下に統合すべからざる異分子を含めるや否を看果して斯かる異分子の混在するあらば之れを排除して文學の版圖を確定せざるべからず、即ち主題を明にして先づ其の區域を定めざるべからず。假に廣義に所謂文學をもて吾人が現在

に論じある問題なりとせんか、全く乾燥無味なる人名簿、日記、目錄、年代紀は勿論律令文、規則書は云ふもさらなり、神學、哲學、政治、經濟、地理、歴史に至るまで一切これを含蓄するものなるへし。吾人はかゝる殆ど際涯もなき廣きものを取り來たりて論ずるは到底微力の能く企て及ぶ所にあらざるのみならず又吾人が本來の趣意にあらざ。吾人の私見を以て論ずる時には廣義に所謂文學なる名稱は殆ど何の用をも爲さざるものに似たり、否寧ろ學術上の區域を曖昧たらしむる媒となるの他に何の價值もなきものと思はる。本來學問の名稱は性質上あつから統一せられあるを一科と做し彼のもの此のものと相分ちて混同なからしむる爲にこそ有用なるものなるべけれ。然るに廣義に所謂文學は性質全く異なる詩歌小説の類と政治、法律、經濟とを同一の種類に屬するものと認めんとするなり。要するに鯨も水中に游泳するが爲に魚類に屬せしめたる昔の動物學者の如く文字にて誌せるが故に都て此等をおしなべて文學と看たるものゝ如し、文學の語源は文字の集まれるものと同義なりし由前に云へる如くなれば強ちこれも無理ならじ。さるにても怪むべきは數學、物理、化學、動植物學、天文學などをば流石に文學の範圍よ

り除くの趣あること是れなり。既に廣義の文學たるや何等の合理的根據ありて區域を劃せるにあらざれば此等の嚴格にいふ科學をも一網打盡して可なるべき筈なり。ざるを漠然ながらも多少範圍の定まりあるが如く見ゆるが故に却て吾人を迷はしめて頗る無益の考を費さしむるものあり。

かるが故に吾人は多く辨ずるまでもなく狹義に所謂文學をもて真正の文學と呼び此の意味の文學をもて此の篇講述の問題と定むべし。オルゾオルス並にアイク井ンシー等は著書の總體を二大別して智識の書と感動の書とに分ちボスチャトは殊なる科學的研究の著述と創作的想像の著述との二つに分てり。茲に感動の書といひ創作的想像の著述といふもの要するに吾人の所謂文學と殆ど同意義なり。さて斯く吾人が所謂文學の領分はおぼろげながら大體に於いて定まりたる上は直に之れに對する諸學者の定義を見るべし。博士モーレルは其の著『歐洲文學』の緒論に於て文學の定義を與へて曰はく

文學とは殊なる科學及び技術の専門的事柄に關係せざるあらゆる書の總體の名稱なり

と。此の定義はゴッストルの立言と等しく消極的の云ひ表はしなれば吾人は文學の特質の全體が簡潔に此の言の中に見えたりとは信ずる能はず。勿論右の定義の中にも殊なる科學および技術の専門的事柄に關するものは文學にあらざるとの立言および書とならざれば文學にあらざるの趣意とは殆ど動かすべからざるものゝ如し。されども少しく考ふる時には文學の精髓的意味を表はすに於て尙遺憾なるところあるを發見するに難からじ。何となれば前の定義を換言すれば普通性を有する書はみな文學なり即ち特別の修業を要せずして其の意義を解し其の趣味を會得し得る書は残らず文學なりと云ふことゝなるなり。果して然らば些の美想もなく趣味もなき年代記の如き日記の如き曆の如き或人は此等を専門的なれば文學にあらざると云ふかも知れざれど必ずしも未か解すべき理由なしといづれも文學なるべし。さはれ斯く解するは到底吾人の所謂文學の本義と契合せざるところあるを發見すべし吾人は更に他の定義を閱して前の缺點を補ふに足るものあるを見んと欲す。ボスチャットはそが『比較文學』に於いて文學の定義を立てて曰はく

文學とは律語と散文とを問はず、考察の作と云はんよりは寧ろ想像の作といふべきものなり、教化と實効とを期するよりは寧ろ最多數の國人を樂ませんを期するものなり、特別の智識に訴ふるよりは寧ろ普通の智識に訴ふるものなり。

ボスチットは此の定義を立つる前、先づ文學は變遷極まりなき人間の思想感情を内容とするが故に決して永久に堪ふべき不變の定義の立ち難き由を述べ、若し強いて之れを立てんとするか其の名は固定して動かざるも其の物推移して止まざれば隨うてその意義も趣味も竟に誤解を免れじ。されば吾人の定義は或有限の社會の狀態を據り所とするが故に其の狀態が一變する時には直に之れを放擲するの覺悟を要す云々と論じ用意いと周到なり。さは云へ吾人を以て之れを見ればそれは殆ど無益の言なるが如し、勿論人智は有限にして人間は待對の境界を離るゝこと難ければ恐らくは都て吾人の爲すところのものは永久不易に堪ふべきものなからん而かも或る學問の定義を立つるや常にそれが不變不動の形式を捕へて立言し時と場所とに伴ひて推移する内容の上に之れを立つるを爲さるるな

り隨うてその定義もまた少くとも希望に於て永久のものたらしめざるべからず。然るを氏は恰も内容を捕へて定義を下さんとするものゝ如く時と場所とに焦慮するもの多きは怪訝に堪へず。吾人の注文を云はしむれば氏が更に一步を進めて定義を立つるに方たり此の推移變遷する文學の特質を含めて云ひあらはし鬼に角希望の上のみにては定義を永久に堪ふるものたらしめざりしを憾む。さてボスチットが定義の中にて尤も注意すべきは文學とは(一)考究の作ならで寧ろ想像の作たること、(二)教化實効が目的たるよりも寧ろ最多數の人に樂みと與ふること、(三)特別の智識に訴へずして寧ろ普通の智識に訴ふること、の三要件を備へたるものと云ふ點にあり。之れを前のモーレルの定義に比するに第三は彼れと一致し第一と第二とは彼れになき所なり而して彼れに於て書といへる條件ありしに是れにはこれを缺きたり。されば文學は専門的ならずして普通の人心に訴ふべき性質のものたらざるべからずとの一點はいよゝ堅固になりしが如し。さて想像に傾ける作たるべきとは後に論定せんが今その最多數の人を樂ましむるが果して文學の本分なるか否かを吟味せん。吾人の考を以てすれば若し最多數の人

を樂ましむるが文學の期する所なりとせば探偵小説の如き尤も多數の人に喜ばるゝものが文學の上乗となるべく『萬葉源語』などは春水三馬等の作よりも非常に文學上劣等のもものと看做さるゝことになるべし。ミルトン、カーライル、エマソン等の傑作は少數の學識ある人々の間に於てのみ重に悦ばるゝが故に文學上の價值甚だ低きものと認められざるを得じ豈にかゝる道理あらんや。一般の好尚を只管に迎ふるが文學の目的なりとするは云ふまでもなく取るに足らざる考なりボスネットが定義は此の點に於いていたく誤まれり。トマス、アーノルドはその著『英文學提要』に於て文學の定義を與へて曰はく

文學とは下にいふが如き諸著述の總躰なり即ち特種の派を成せる人々にのみ訴ふるものにあらず且單に事物の符號としてのみ言語を用ひたるものにあらず普通の人心に興味ある題目を取りて思想の運搬器、象、表章として言語を用ひ全般の人情と普通の人情とに訴ふるものは是れなり

と。右の定義はボスネットが云ふところよりは更に精細なるものあり今その要點を摘めば文學とは(一)著述の形を具へたるものなること(二)人心に興味あるべき

題目を選ぶべきものたること(三)言語を單に符號として用ひず思想、發、表の具として使ふこと(四)特種の人々に示すものにあらずして一般人間の智と情とに訴ふるものなること是れなり。さて前に挙げたるモイレル及びボスネットが定義に比較するに第一はモイレルが書なるべしと云へるに一致し。第二はボスネットが云へる如く最大多數と云へる特別の條件こそなければ人を樂し、ましむるものたるべしと云ふの意と相契合せり。第三は前の二氏の未だ云はざる所なれども其の根本の思想に至りては或はボスネットが想像の作といへる趣意に相應するの邊なきにあらずとも思はる此の點は後に詳しく云ふべし。第四はモイレルにもボスネットにも一致す若し多數のいふ所のものが尤も信ずるに足るものとすれば文學は特種の派を成せる人に訴ふるものにあらず普通の人心に訴ふべきものなりとの論は尤も根づよき説たるに似たり。さてボスネットは普通の智識に訴ふと言ひアーノルドは全般の人情と普通の人情とに訴ふと唱へたれば前者は稍、狭く後者は稍、廣く云ひたるの相違あり。智と情とは常に相聯關の作用を成して全然孤立しては働き得ざるものなるは心理學者が既に定論として認むるところな

ればアーノルドの立言は前者よりも穩當なるべし特に文學を美文の意に解する時には單に之れを智に訴ふるものと云ふは甚だ事實と齟齬す寧ろ情に訴ふるものと云はゞ同じく偏頗ながらも稍實に近かるべし。さればアーノルドの云ふところは比較的に正しと思はる若し更に精確に云はゞ美文の中にも意に訴ふるものもの絶無といひ難ければ之れを總括して普通の人心に訴ふと云ふ方然るべし強ひて比較上そが多く傾ける所を取りて別を立てんとならば寧ろ前にも云へる如く情に訴ふとする方穩當なるべし。

アーノルドが定義の中にて「單に事物の符號としてのみ言語を用ひたるものにあらず」思想の運搬器兼表章として言語を用ふと云へるは文學の文學たる特質を剷切に云ひ表はしたる所あり。物理學、化學、動物學、植物學その他所謂確實科學に於ては文字を單に客觀の事物の組織又は性質若しくは筋道などを表はす符號として用ふ故に此の領分にては何人の筆に成るも其の符號たる職分を充分に盡し得る限りは殆ど差別なし。例へば數學上の説明の如きものに在ては縱令韓柳歐蘇をして筆を執らしむるも幾かに其の趣意を達するに足る拙文の人の手に成るも

其の立脚地より見ては殆ど徑庭なかるべし否文字を全く符號として見るが故に潤色ありて詞藻富贍なるは却てその目的の上よりは妨げとなるとなしと云ふべからず。換言すれば科學は客觀の事物の理路を指摘し現象を説明するが主意なれば重ざる所外にありて我れにあらず故に其の文字は記者の個人的臭味を脱却して萬人に通じて平等一如たるを極致とす科學にて所謂科語または専門語といへるものゝ熾んに用ひらるゝも其の原因こゝに存す。文學は然らず其の文字は客觀の事物の説明理路の指摘に止まらず記者自身の特有なる或る想像、思想、或感情を吐露するを趣意とす隨うて其の文字は直にその記者特有の心の聲なり心の姿なり決して全く同じきもの二あるべからず全く同じきこと二度あるべからず。別言すれば文學はその面と等しく各々異なる人の心の影なれば飽くまでも個人的なり隨うて一般に通じ得る限りは自家思ひの言葉を用ふるも勝手なり(蕪雜なる新造語を濫用するの意にあらず)文學に科語なきは此の故なり。博士ニユーマン曾て科學と文學とを對照して曰はく

科學は事物を相手とし文學は思想を相手とす。科學は普遍的にして文學は個人的な

り。科學は單に符號として言葉を不用ふ、されば往々符號を以て言葉に代用し得る場合あり。然るに文學はあらゆる方面より言葉を不用ふ即ち熟語、詠語、文辭、結構、節奏、能辭および都て其の他の屬性を總括して用ふるなり

云々吾人が前に掲げたるアーノルドが定義と大同小異にして極めて穩當なり特に文學が個人的の特質を有する一段を説く箇にして悉くせり。

吾人はエラストル、モーレル、ポスネット、アーノルド等が文學の定義を列擧し且彼れ此れ比較して多少評論は加へ來たれるが今此等諸大家の定義を概括して試みに其の要點を指摘せん。

- (一) 文學は思想を取扱ふが主にして事物を取扱ふが主にあらず。
- (二) 文學は個人的性質を有するものにして、普遍的性質を具ふるものにあらず。
- (三) 文學は思想の發表として言語を用ひ單に之れを事物の符合として用ふるものにあらず。

(四) 文學は考察の作たるよりは寧ろ想像の作なり。

(五) 文學は人心を樂ましむるが趣意にて教化實効を期するを主とせず。

(六) 文學は普通の人心に訴ふべきものにて、特種の派を成せる人に訴ふべきものにあらず。

(七) 文學は記録となれるものたらざるべからず。

右の七箇條を成るべく調和するやうに一括して定義らしきものを假に作らば左の如くなるべし。

文學とは思想を個人的に發表する爲に言語を用ひて成れる想像の分量に富める記録にして普通の人心を樂ましむるものなり。

吾人はこは果して満足すべき定義なるや否やを決せざるべからず而してその順序として前掲の七箇條を一々吟味しゆくべし。斯くの如くするの結果竟に結論として吾人が信ずる所に説着せん。

第一、文學は思想を取扱ふが主にして事物を取扱ふが主にあらずと云へるは既に前にも見えたる如くアーノルドが文學に於ては事物の符號としてののみ言語を用ふるものにあらず興味ある題目を取りて思想の運搬器兼表章として之れを用ふと云へるとニーマンが科學は事物を相手とし文學は思想を相手とすとの説

に據りたる立言なり。文學が思想を取扱ふとは別言すれば科學の如く事物の既明條理の指摘を客觀的(其の本來の儘に)に爲すものにあらず一旦殊なる人物の感想の壺中に投じ若干の施彩を経て變色し而して再現し來たる事物若しくは之れより反射せる雜多の思想雜多の想像が文學の中樞を成す也。されば其の重きを置くところ外界の事物に存せずして人心の所作にあり詳しく云へば特なる人物の心の働きにあり故に特に思想を以て文學の主なる内容とするなり。如斯く思想が主なる内容なれば隨ふて文學は主觀的にして創作的たりざるを得ず主觀的にして創作的なりとは他なし吾人々間が花晨月夕、景に對し、治亂興廢事に觸れ心に動き文に發する者其の人々の性癖に根ざし境遇に應じ百人は百人までいづれも全然同じきは一もなきものなり是れ主觀的といふ所以なり。等しく團々たり皓々たり月は客觀的には平等無差別なれども一度その光人の心に入りて主觀的のものとなれば心づくしの秋は來にけりとの哀觀ともなり、いたづらにねてあかすらん人さへぞうきの樂觀ともなるなり。然り而して此の哀樂の差別觀は我が心が特に造り出だしたるなれば此の主觀的なるをばやがて創作的とも云ふべし

れ。シェーレンプ氏はその「詩の諸相」に於て曰く

正當に文學と云はるべきものは純粹無色の抽象的概念を表はすものにあらず、或個人オプティミスムの心より看ゆるがまゝの思想と事物とを表はすものなり、されば此等の思想と事物とは其の心に特有なる見解聯想記憶および情感をもて施彩せられたるものなり

と畧し吾人の見るところと契合せり。文學が思想をその内容とし之れを相手として立つの意もし吾人が前に述べたるが如きものならばそれが文學の特質の重なる一部たるや論なからん。

第二、文學は個人的性質を有するものにして普遍的性質を具ふるものにあらずとはアーノルドが「思想の運搬器兼表章」云々といひ且その定義を立つるの前文學にありては科學とは異にして言葉は記者の人格を表はす機關なりとの意を述べたるどころ及びニューマンが「科學は普遍的にして文學は個人的なり」と云へるに據りての立言なり。

こゝに個人的なりと云ふところの者は第一の境合に文學の取扱ふところ(即ち内容)は事物にあらずして思想殊なる人間の思想なりと云へると極めて密接したる問題なり。蓋し前に述べたる如く殊なる人間の思想をもて主なる内容とするが

故に勢ひ主観的にして創作的たらざるを得じ。主観的にして創作的ならんか客観的の事實を機械的に説明するもの、如く萬人一致することは到底あるべからず必ずや一ありて二あるべからざるものあるべし。文學上の著述は單に差別の著きのみならず其の差別はよく著者の特質(少くとも作の上の)を表はし來たる且又此の點に於て文學の文學たる價値の存するもの尠少にあらざ文學は個人的性質を有して普通の性質を具へずとは此の意に外ならず。理化學の書の如き數學醫學の著述の如きも未決の問題などに關しては著者に依りて其の説くところ異なることもあるべけれど大體より云へば既に一般の定論となれる部分の如きは何人の手に成るも別に著き相違あるべき等なく隨うて著者の特質など現はれん餘地あるべきやうなし科學が普通のなりとは此の意に外ならず。文學は個人的なりかるがゆゑに遍昭は歌のさまはえたれども賦すくなく業平はその心餘りありて言葉足らず康秀は言葉たくみにて其のさま身にあらざ喜撰は言葉幽玄にして始め終りたしかならずなど品定めし或は杜少陵が詩は沈鬱李青蓮が詩は高遠韋柳は冲澹韓孟は佞屈など評するを得るもの偶然にあらざるなり。されば文學の

一特質として個人的といふとは首肯すべきものと思はる。終に注意し置くことあり前に文學は思想を取扱ふといへるは殊なる思想を文學の内容とすといふに外ならぬば第一の立言の中に此の個人的といへるとも自然合まるべしと云ふことは是れなり。復言すれば殊なる思想を文學の内容とする上はそれによつて附隨して個人的の性質伴ふ故にそれを二箇條に分ちて云ふに別に不都合あるにもあらざれど之れを合して一言にて云ひ表はす方却て便利なる場合もあるべし。吾人は今この二箇條を一言にてあらはす適當の語を見出だす能はされども強ひて求めなば創作的といはれ或はその意を髣髴するを得べきか。創作的なるものは必ずや客観的事物の機械的説明にあらざるや明けし即ち殊なる思想感情の表現したるものと云へる義よく見ゆ既に殊なる思想感情の表現といへる義よく見ゆる上はちのづから個人的なるの意は裏に附隨せるにあらざや。されば創作的の語を用ひて吾人は個人的といへることおよび思想を取扱ふといへることを蔽ひ得べしと信ず。

第三、文學は思想の發表をして言語を用ひ單に之れを事物の符合として用ふる

ものにあらざるとは、アールノルドが定義に、單に事物の符號としてのみ言語を用ひたるものにあらざり、思想の運搬器、象、表章として之れを用ふと云へるとニユーマンが「科學は單に符號として言葉を用ふ」然るに文學はあらゆる方面より言葉を用ふと説きたるとに據りて立言せり。この第三項にいふところは動もすれば第一項の意と殆ど同一事を云へるが如くにも見ゆれど決して然らず。第一は思想云々といふ文字が主眼にて第三項は言語を奈何なる目的にし使用するやの問題に答へたるものにて主眼とするところは思想の發表にあらざりて言語の二字にあり。この言語を符號としてのみ用ひず思想發表の具とするとは創作的著述の必然の性質を單に説明しあるに過ぎざるの趣あり。創作的の著述なる以上はあつから個人的なり主観的なり隨うて其の文字はその人の情想の聲にして其の急忽なるところ其の揚悠なるところ或は激越或は淡遠すべて其の作家の心の状態と離れず奈何んぞかゝる場合に言語を單に符號の働きを爲すものとし其の以外に價値を有し居らずなど云ふことを得んや。シェールプ曰はく

人はいろ／＼の方法にて己れ——我れの實狀——を表はす即ち或は容觀に依り或は音聲

に依り或は姿勢に依り又は其の密い／＼の文辭に依りてあらはす。綜合この最後
のものは他のものよりも一層意識的、熱慮的のものなりとは云へども人が正當に自家
を現はすに於て他の方法に譲らざ

ど。又曰はく

都て正當に文學と云はるべきものに於ては内容すなはち藝術をもて唯一のものとな
す文章はそれが平面を成す而して二者は分ち難きものなり

と。文學は果して創作的なるがゆゑに個人的にして又主観的なりと云ひ得とせ
ばそれが言語を用ふるに當たりて單に符號なり器械なり手段なりとして之れを役
せずして其れ自らに價値あり目的ありと見て取扱ふものたるや明なり。近く例
を取らんか

この人をまつ夕暮の秋風はいかにふけばかわびしがるらん。

この人を待つて居るゆふ方の秋風はどのやうに吹くこゝでこれほど悲いつらいこと
ぢやいら。

ほこしぎす死出のたなきと聞くからに我がつまにしも運ひやしつらん。

時鳥そらは冥土の鳥と聞くこちのおやぢに逢ひやまなんだ。

前後を對照するに其の意は二者毫も異ならず而かも其の情を人に傳ふるに於て

差あるは何ぞや詞みづからに意を離れて微妙の動きあるが故ならずや。是れに依りて之れを看れば文學に思想の發表として言語を用ひ單に之れを事物の符號として用ふるものにあらずとは争ふべからざる真理なるが如し。唯こゝに注意すべきは吾人が定義を與ふるの際には斯く特に説明的文字を用ひざるも創作的とだに云はれ自然その必然の性質として言語を單に符號的に用ふるものにあらざるを示して充分ならんと思はるゝと是れなり。

第四。文學は考察の作たるよりは寧ろ想像の作なりとはポステットが定義の中に云へるところなり。案ずるに此の立言は一面に取るべきところありて一面には又疑ふべきところあるが如し。ポステットが想像の作を主として文學と看做せるは詩歌小説の類ひが重に文學の領分を占むるが故に荒擲みにかく云ひたるものなるべし。されど文學は必ずしも詩歌小説を主とするにあらず考察の加はりたる教誨の文、漫録隨筆、史傳の類ひと雖も創作的(この語義は後に詳解すべし)にして普遍の興味ある作は文學の本領中の者ならずや是れ文學を想像の作とのみは云ひ難き所以なり。ポステットが言に疑ふべきところありとは之れを云ふ。

されども氏も亦注意を加へて考察の作よりは寧ろ想像の作と云ひて一概に文學は想斷の作に限ざれりとは斷言せず分量の比較上考察よりも想像の方に傾ける作なりとの意なるべければその語の本意を探りて斯く解する時は殆ど不都合を見ず。思ふに文學をもて創作的なり主觀的なりとの吾人の説を是なりとすれば此の想像の分量を多く含めりと云ふことも自ら附隨し來る必然の性質なり之れを特に二箇條とするは説明としては可なれども定義を立つるの場合には却て冗漫の弊に陥るの嫌ひあり。坪内逍遙氏がその著「美辭論稿」の中に

美文學といふ名目は情の文の名稱たるに稱へり前にも説けるが如く情の文は旨の情感より起りて旨の情感に照ふるものにて其の極致とするは宇宙の美なり即ち情の文は美を其の理想とする文章なり之れを美の文と呼ばんこゝに恰當なるべし

云々且氏は其の情の文を釋して

「旨の情感に多少想像を考察を加はりたるをさながら(ありのまゝ)に表白したるもの」之れを情の文といふ

と云へり。坪内氏の所謂美文學といひ又は名情の文といへるもの吾人の所謂文學と同義なり。げにや文學は情の文なりされば考察に比しては想像(これにも色

々の解あれど此所にては通俗の意味之の働き易き傾向なきにあらず美の文なり
 かるが故に考察は比較的によく働かざる趣あり。何となれば考察の極は分析解
 剖に陥り易く辨析解剖は智の領分に屬し美の成立を難せしむ。ポスチットが
 定義に於て云ふところのものは動もすれば其の想像の二字に重きを置くこと過
 きたるが故に誤解を招くの弊はありされども靜にその本意の存する所を叩けば
 云ひざまは不完全なれども首肯すべきものなり。

第五。文學は人心を樂ましむるが趣意にて教化實効を期するを主とせずとは重
 題目を取るべきものと云へる又此の立言に一致したるものと見るべし。文學を
 もし狹義に解して美文と同じもるとするが不條理ならずば其の目的は人心を樂
 ますることなりと云ひ得べし作する瞬間は兎に角靜に局外より考へ其の結果よ
 り見てしか云ふ美の美たる要素の至重なる一部は正しく快感にあるは現時の美
 學者の概ね許すところなり。されば文學はよし全躰とは若し云ひ得ずば主とす
 るところは人を樂ましむるにありと云うて可ならん。此の樂ましむるとは奈何

なる快感を興ふる意なるか先つこを問ふの要あり。多く云ふまでもなく既に前
 記も云へるが如く文學を美文と同義に解する上はそれに依りて與へらるゝ快感
 は美の快感たるべし美の快感たる特質を具ふるものたらざるべからず。美の快
 感とは何ぞや。(一)美の快感は無所依のものなり即ち直接の價值あるものにして
 其れ自らが最後の目的たるものなり。例へば吾人が紅楓瀟山の艶を愛し横雲孤
 月の淡をめで其の美を樂むに當たりてや別に他に目的ありて之れを愛し之れを
 樂むにあらず其の物を最終の目的として快感を起すなり。之れに反して吾人
 が金を得て感ずる樂しみの類は決してその者自らを最終の目的として快感を起
 こせるに非ず他に爲にする所ありて之れを得て快感を起すなり故に美の快感
 とは霄壤の差あり。(二)美の快感は純粹にして汚さるゝ所なし。他の快感には概
 ね幾分か苦痛の分子混入しあるなり若し苦痛といふが穩當たらざるは不快の分子
 幾分か常に混在するか例なり或は混在せざる時には繼發するが習ひなり。例へ
 ば痛飲の快の如き尤も其の著きものなり美の快感以外のものは歡樂極まりて哀
 情多からざるもの殆ど稀なるにあらずや。(三)美の快感は共有的なり即ち同じ時

に於て多人數に廣く快感を與へ得るものなり。勿論これは全く他の快感と種類異りて然りと云ふにあらざ其の多人數を樂ましむる程度、他の快感に比して著く共有的のところあるを云ふなり。思ふに美の快感以外のものは概ね人の肉體に接觸したる上ならでは快感を生せず飲食の快感の如き舌に觸れざれば覺へられざるが如き是れなり。繪畫音樂の美の如きも或距離以外には快感を與ふること能はざるが爲に他の肉體上の快感と此の點に於ては其の性質に異るところなれどその廣狹の度の上の相違著きなり。故に美の快感は比較的に共有的といふなり。(四)美の快感は普通のなり即ち或程度まで發達したる尋常の人間には何人をも樂ましむるを得べし勿論その間に美を樂むの淺深は人に依りて多少の差あらんされど他の快感の如く甚しき差別なきなり。例へば煙草酒などより生ずる快感は人に依りて全く之れを感じ得ざるのみならず却て之れが爲に苦痛を感じ之れに反して繪畫音樂詩歌その他自然の山川花月などの美の生ずる快感に決して人の種類に依りて苦痛と更らしむるが如きことなし。此の他にも尙美の快感に若干の特質あれども今は美論が趣意ならねば略す。尙ほをばりに一言し置か

んに快感とこゝに云へるは極めて廣き意味にて云へるなれば單に嬉し可笑し樂しなどの意のみならず雄渾壯大の感、悲哀可憐の感なども都て美の域外に逸せざる範圍に於て又實感に墮落せしめざる限りに於て之れを總括して快感と呼べるなり。坪内氏その『美辭論稿』の中に情の文(吾人の所謂文學)の目的を論じて曰はく

情の文の本性は智の文並びに意の文と異なりて、或殊なる目的ありて成れるものにあらず智の文は知らしめんを目的とし意の文は行はしめんを目的とす情の文に至りては殆ど判然たる目的無し。強ひて情の文の目的を求めばおのれが感得したるこゝろを表白して恰もおのれが感得したる如くさなかに他人の心に傳へんことを想ふこゝろに外ならざるべし。凡そ情の文は宇宙の旨を感得したるより生ずる必至の結果なり其の表白は止むを得ざるの自然の結果なり。譬へば肉體上の大苦痛大悅樂の人をしておのづから聲を發せしむるにひきし。激切の情感中に動いて手の舞ひ足の踏むを知らずそらに之れを言に發して歌となし詩となし文となすかくの如きのみ。其の本來をいへば殆ど無意無識なるべし神來といひ感得といふ皆此の無意識の境界を顯示するに過ぎざるなり。

さりながら以上いふ所は情の文の本性なるのみ。廣く理に情の文を稱するものに就きて觀れば越して情の文の裏面には多少の世間感纏結せり。特にやゝ長篇の詩文に至りては大に考察の加はるを免れがたきところなれば本來は無私無意無目的なりし情感も其の一思想となりて文章に表白せらるゝに及びては多少の識意と目的とを具ふるに至ること勿論なり。(下略)

氏の言に據れば情の文は宇宙の旨を感得したるより生ずる必然の結果なりといふ而して今此の旨の義奈何と問ふに氏は左の如く解せり。

こゝに旨の情感といへるは古來、美學者並びに心理學者が美の情感と命じたるものと大體に於てはほぼおなじものなれども其の解釋は未だ悉く同くものにあらず。予は美といふものをもて旨の極致の名とするを猶眞をもて理の極致の名とし善をもて道の極致の名とするがことし。(下略)

是れに依りて之を見れば文學(情の文)は己れが美(こゝ)にては旨を含めたる廣き意味の美なりと感じたるどころを他をして己れが感じたるが如く感ぜしめんとするより起れるものなり。此の意を換言すれば直に文學は人心を樂ましむるが趣意にて教化實効を期するを主とせずといふことゝなるべし。何となれば前に畧

ぼ説明したるが如く美の感は必然に快感をそが要素として具有すればなり。

上に述べたるところにて文學は人心を樂ましむるが趣意なることは畧ぼ説明せざるが何故に教化實効を期するを主とせざるかの問題尙殘れり。教化誘導して以て實効を期せんとする教育宗教政治などの演説講話説教の類ひの著述其他所謂人の意志に訴ふるもろくの著述と情感に訴へて人を樂ましめんとする文學とは混同す可らざる性質を具ふるものたることを是認しはた哲學科學などの推論辨析以て他を啓蒙開發せんとする諸著述所謂人の智力に訴ふるところのものが上の二者と區別するところあるを知らばちのづから文學がその本領として教化實効を期するものにあらざるや多言を要せざるべし。

更に一步を進めて詳述せんか。吾人の所謂文學は既に屢々云へるが如く美の感想を他に傳ふるを目的とするもの即ち美文に外ならざれば吾人がそを讀むに方たりてや必ず美的心識に訴ふるものたるべし。他の言葉をもて云へば美の感想を心に呼び起こすに足らざるものならんかそは眞に文學と稱するに足らざるものなり。さて此の美の感想の起りある心の状態即ち美的心識の性質より推し

て文學は人心を樂ましむるを主とするが故に一面教化實効を排して實際的意識と區別を明にし一面分析推論を擧げて理論的意識との境域を畫する所以をも知ることを得べし。こゝに實際的意識といへるものは坪内氏の所謂行はしめんを目的とする意の文が心に入りて起こせる主觀的狀態にして理論的意識といへるは其の知らしめんを目的とする智の文が心境に入れる状態に外ならず。近世の美學者の説に據れば美的意識はその消極的の性質即ち之れあるも美的意識を具足する能はずと雖も而かも是れなければ美的意識の成立を難せしむる條件二箇條ありといへり。第一は所動的にして且靜觀的なること第二は直覺的にして且具象的なること是れなり。第一の條件は吾人が美を感じる時の心の有様は靜に見どれあるを常とし決して進んで活動するが如きことなきを云へるなり若し此の受け身になりて靜に眺めある境界外に逸する際には美的意識は忽ち攪亂せられて他の心的状態に墮落せざるを得ず。此の條件に依りて美的意識と實際的意識とを區別するの標章を認むるを得べし隨うて主として美的意識に訴ふる文學が教化實効を期せざるを知り得べし教化實効は是れ實際的意識に訴へて始めて

望み得べきもの之れを美的意識の結果として求むるは荷を山上に覓ぬるの類のみ。

吾人が美を樂むの境界はその心狀須く所動的にして靜觀的ならざるべからず故に總じて人の慾望を排撥し實感を誘致し激情を惹起するが如きものゝ混入するを排斥せざるべからず。美的意識は恰も風き渡りて鏡を抜ける如き湖面に瓊瑤畫棟の映じたるに喩ふべし若し慾望の風之れを搖盪するか實感の瓦礫をこれに抗するかはた激情の波立ちさわぐが如きことあらば其のうるはしき影は忽ち消えて痕なかるべし美文學上の著作に勸懲の旨の露骨に見えたるを嫌ふもこの實際的意識に墮落せしめ易きを恐れてなり。近代に至り勸懲主義の詩歌小説を漸く排斥するの傾向あるも其の原因するところは此所に存す。第二の條件として美的意識には直覺的なることと具象的なることとを要求す此の條件に依りて美的意識と理論的意識との異なる點を明にす隨うて主として美的意識に訴ふる文學が推理分析を事とするものにあらざるをも知るに足るべし。吾人が前の立言にて單に文學は人心を樂ましむるものにして教化實効を期するを主とせずと云へ

りきこは意に訴ふる文に對してのみ區別を明言し智の文に對する他の一面を云ひ漏らせるが如き趣なきにあらず。されど嚴格にいふ時には教化實効を期せず推辨論析を事とせずと改むるを更に佳とす。さて美的意識の成立には直覺的といふことを要するとは他にあらず吾人が今花に對し月を眺めてあなうるはしと感ずる際には唯うち見たるさまをそのまゝに感ずるものにして決して分拆推究してさて後美を感ずるにはあらざるなり。此のうち見たるさまを其のまゝ感ずるが即ち直覺的といふ此の直覺的といふは感ずる人の方より云へるにて若し之れを感ぜしむる事物の方より云へば即ち具象的となるなり蓋し抽象的なるものは美たる能はざるを云ふなり。吾人が月花に對する際にも此の美的意識には永く止まり得べきものにあらずして忽ち理論的意識の境界に墮落し易きを常とす。始めの程こそはあはれくと歎美の境に恍惚たるべけれ久しく之れを覬視する間には月は遊星の一にして地球を廻轉すること猶地球が太陽を廻轉するが如しとか又は彼の世界には水蒸氣らしきもの見當らずとの説眞とすれば少くとも高等動物は生活し居らざるべしなど考ふるに至るべきか是れ理論的意識に墮落せるなり。花を見て瓣の効用蕊の作用を考ふるに至ればこれも亦理論的意識に降れるものなり。如斯の美的意識より理論的意識に移る唯一歩なれども而かも彼れと此れとの性質は甚だ同じからず。理論的意識は殊なる事物に對してその中に宇宙普遍の理を釋ね來るなり然るに美的意識の方は之れに反して月はたゞまどかなるまゝに花はたゞくれなるまゝに打ち見てそを自足圓滿の一個體として觀ざるなり之れをもて宇宙の通理と聯絡せしめて看るが如きことは決してなきなり。詩歌小説などいふ文學上の作に辨拆解剖を忌み勃率理窟を排して偏へに活現靈動をもて上乘となす所以のものその由來するところ讀者をして理論的意識に墮落せしめ美的幻象を心の上より驅り去るの弊あるが故ならずんばあらず。之れを要するに美的意識は第一の所動的にして且靜觀的と云へる條件に依りて能動的進取的なる實際的意識と全く本領を異にする所以を明にし第二の直覺的にして且具象的といへる條件に依りて推究的抽象的なる理論的意識と全くその境域を別にするところを標示するものなり。他言をもて之れをいへば上の美の消極的二條件に依り吾人は美の情想を人に傳へんとするが文學の目的な

らば文學の職とするところ決して教誨化導にあらず辨論啓蒙にあらざるを知るに足らん。因にいふ茲に美の消極的條件を説きて積極的條件に及ばざるは今は美論をなすが本意にあらずればなり且その必要なきが爲なり。

文學の趣意は人を樂ましむるもの(美的快感を與ふるもの)にして他を教誨化導し又は説明辨論に用ひて他を啓蒙開發するものにあらずとは吾人が信ずるところなり。されども人心は決して一處に固着しふるものにあらずれば前にも云へる如く美的心識より理論的心識に移り易きは常に免れざる所また實際的心識に墮落し去ることも理論的の境界に移り易きと同様に易きものとす。櫻花に對して櫻餅をおもひ月を眺めて團子を思ふこと往々なきにあらずるべし好しかく下卑なる感想を浮べすとも柳蔭の片割月を看て我が妻の衣の模様をせばやなど思ひ八重櫻を眺めては我が娘の髪挿の眺へなどに心を走らすと凡夫には免れ難きことならん。されば美を樂ましむるが趣意なる文學に於ても其の結果より見來たれば或は教誨化導の實効を奏することあり又啓蒙開發のはたらきを爲すこともなきにあらず。シエークスピアが劇は聖書にも増して人を教へ人を導けりとい

ふも此の結果より見て云へるなり美文(文學)が本來の趣意其所にあるが故に然りといふにはあらずるなり。且に美廣き意味之壯嚴も悲哀も含めていふなるものは自ら人の心を清淨にし擴大にする鼓吹の力を有す隨うて期せずして智徳の上に無量の裨益を與ふるものなり例へば蕙蘭室にあれば四方薫するが如し然るを期せずして然るもの元よりそが本領とするところにあらずるなり其が自然の餘徳たるに外ならず。

第六。文學は普通の人心に訴ふべきものにて、特種の派を成せる人に訴ふべきものにあらずといへるはモレルが文學とは殊なる科學および技術の専門的事柄に關係せざるあらゆる書の總躰の名稱なりと唱なへ、ボスマットは、特別の智識に訴ふるよりは寧ろ普通の智識に訴ふるものなりと云ひアノルドは、全般の人情と普通の人情とに訴ふるものなりと定義せるなどを根據として立言したるものなり。文學の重大なる一特質としてそが弘通の趣味を具ふるものたるは既に第五の條件の人心を樂ましむるにありと云へることを説きて美の快感に及べる所より推すも自然に瞭解するを得べし。何となれば文學が人を樂ましむるはそが

美の快感に依るものにして美の快感たるや共有的なる所ありはた普通のなる所ありとは前に畧ぼ述べたるが如し。文學は人が自然に得たる感想を自然の言語に表はすが故に尋常の能力を具へ尋常の讀書力あるものは弘通の趣味あるに元よりその所なり。哲學科學などに於ては特別の研究を経たる人にあらざるよりは其の書を読みて毫も趣味を感ずること能はざるのみならず科語頻出して殆ど語義だも解すること能はざるが多し。蓋し哲學科學などの語は人間が事物に對して自然に感じ我れ知らず肺腑より迸り出でたる言語にはあらで反省思索を重ねて學者が特に新造したるもの弘通の性を有せざるは數の免れざる所なり。ヘーゲルの所謂理體はヘーゲル一家の哲學に精通せざれば其の意を瞭解すること難く、カントの所謂眞實躰はカントが哲學を叩かざれば奈何なるものを指せるかを知るべからず、シヨウベンハウエルが意志の如きも亦然りとす。化學者が用ふる和合遊離飽和などいへる語も斯學を窺はざればその意殆ど解し難きが如きいづれも文學の如く弘通の性を具ふるものに非ざるを證するに足る。文學に至りては決して哲學科學に於けるが如く専門的の言語なくそのいふところのもの亦普通

通の人心に訴ふるもの特別の修業を経ざれば讀んでその趣味を感じ難きが如きことなし。されども古人の佳什名篇の中には往々その用語の險怪にして解し易すからずその思想の高遠にして窺ひ難きものなきにあらざり特に詩歌にその例多し是等のものは殆ど専門の研究を爲さなければその趣味を會得し難きものなれば之を稱して弘通の性質を有せざるものと云ふも不可なきの疑ひなき能はざるものあり。果して然らば文學をもしなべて普通の人心に訴ふべきものなりといふの説は立ち難きか文學の中にて弘通の性質を有するは唯一部分に限されるものと看做さるべからざるか否然らず。詩歌などの中には年代の古るきが爲、或は律格の束縛より出でたる結果として、或は感情激昂し心緒紛亂したる反響として、又時としては作家が險語奇字を用ひて人に銜ふなど云へる色々の事情より殆ど弘通の性を缺くものなきにあらざり。さは云へ年代に依り律格に依りはた激情に依りて弘通の性を失はんとするものは一方より見れば是れ決して弘通の性を有せざるものにあらざり。何となれば『萬葉』の如き今日より見れば殆ど弘通の性なきものなれども當時に至りては何人にも一誦して直ちにその意義もその趣味

も會得せられたるものなるや論なし。律格の束縛すなはち探韻音の弛張抑揚長短の按排などの都合より普通の語格語義とは乖離する所のもの古今の詩歌に珍しからざれど斯かる必要より一見したる所弘通し難く思はるは是れ寧ろ深く弘通の人心に訴ふるが爲に用ひたる手段の結果にして咀嚼玩味を重ねれば釋然として我が心と融合するの機あり是れ科學などの類と其の異なる所なり。又感情激昂し心緒紛亂の爲に弘通の性を失へるが如く見ゆるもの少しく意を轉じて他側より觀じ來たれば是れ尤も弘通のものたるを覺り得るものなり何となれば何人とも感情非常に燃えて心緒もつれたる際に發する言語には局外者より聽きてはその意の解し難きが如きこと往々あるべきは頗る弘通の人情に根ざせるならずや故に弘通せざるところ是れやがて弘通の趣味あり弘通の價值ある所なり。ひとり術學の爲め殊さらに險語奇字を弄びてその作物に弘通の性を缺くものに至りては是れ文學の本趣意に背くもの吾人は之れをもて文學の範圍内に置くを肯せざるべし。文學上の著作に科語をいたく嫌ひ又科學にあらざるも狹き一社會一團體のみに限りて用ひられ廣く世間には通せざる言語など用ふるを忌むは

上に云へるが如き理由あればなり即ち文學たるの特質を失ふの虞あるを以てなり。現今の小説などにも文學の著述に弘通の性の大事なるを忘れたるもの多し狹斜の事情に精通せるものは己れがその知識の豊富なるに誇らんがため漫に彼の社會にのみ通する謎言葉など赫きちちして得々たるが如き其の一例なり。勿論或社會の状態を寫して具に迫らしめんには多少その仲間の特有語を用ふるの避け難き場合なしとせざれどわざと弘通せざる語を濫用するものとはちのづから區別あり此等のもと本論に直接の關係はなけれど因あれば一言し置くのみ。さて吾人は前に第二の條件として文學は個人的性質を有するものにして普通の性質を有するものにあらずと云へりき而して今こゝに第六の條件として「文學は普通の人心に訴ふべきものにて特種の派を成せる人に訴ふべきものにあらず」と説けり此の間に矛盾なきにあらずるかの問題もそらくは讀者の胸に浮ぶならん。されども前に普通のならずといへると後に弘通の性あり普通の人心に訴ふなどいへるとは其の語の上に撞着らしく見ゆる所あれども實は然らず。前に文學を個人的にして普通のにあらずと云へるは文學は客觀的事實を機械的に説明

し辨拆する科學とは同じからずして著者の創作に係るがゆゑにその人柄が何邊にか隱約の間につき纏ふ所あるを指せるなり。後に弘通の性あり普通の趣味あり一般の人心に訴ふなど云へる時は特別の修業なき人にも會得せらるゝものなりといふを指せる也。かるが故に前に普通的にあらざると云へるは文學の體に就ていへるにて後に普通的なりと云へるはそが人心に及ぼす用の上より見たるなり。他言にて之れを云へば文學は其の成るや特質ある個人の手に出づ故に普通的にあらざされど其の讀者の心を感じしむるに於てや萬人に涉りて大差なし故に普通的なり約言すれば殊より出で、通に入り差別を源として平等の海に注ぐものとも云ひつべし。この論點より見る時には文學は特殊と普通との兩面を有し差別平等兼具せりといふも不可なからん。

第七。文學は記録となれるものたらざるべからずとは、モーレルが云々の書の總體の名稱なりと特に断はりポスチットが想像の作といふべきもの云々と説き、ノルドが云々の諸著述の總體なりといへるなどを據りどころとして立言せるものなり。歌ひもの、語りもの、其の他説教、軍談、昔譚などの類ひにて文學趣味に富

めるもの決して少なきにあらず而かも口傳のまゝにて記録せられて一定の形を備へざる間は之れもて未だ文學とは云ふべからず。こは文學の内容には無關係のことなれども一定不變の形をもて時を異にし處を異にする多數の人に影響を及ぼすには缺くべからざるの條件にして文學の勢力の消長には淺からざる關係を有することなり。

上に順序を追うて七箇條を説明したれば讀者は零ぼ文學とは奈何なるものなるやを會得せるならんと信ず。而して吾人が説明し來たれるところ大體に於て文學の本領をいひあらはし得たりとすれば之れを概括一統して文學とは何ぞやの問ひに答ふるを得べきなり即ち文學の定義を立つるを得べし。

文學は美[○]感[○]を與ふる創作的著述なり。

既に前にも云へるが如く吾人がこゝに創作的といふは科學者などが單に客觀の事物の理路を發見するに對照して云へるにて作者がその特有の才に依りて新たに造り出だせるをいふなり(勿論その材は之れを造化に仰ぐべきも)その人なくば其の作あり得べからざるもの是れ創作的なるもの、本領なり。故に吾人がこゝ

に用ひたる創作的といふ語義には自然(一)客觀の理路を冷靜に指摘するもの、對して主觀の所作に情熱を加へて客觀界につき出すといふこと(二)或一個人の主觀的所作の結果なるが故にそのものは個人的性質を具ふること(三)其の主觀的所作の客觀にあらはれて言語となるやこれ直に情感の姿にして決して單に事物の符合として言語を用ひたるものにあらざることの三つの事柄を含めり。美感を與ふるものは普通の人心に訴ふるものはた人心を樂ましむるものたるや先きに論じ置けるか如し。吾人が定義簡を離れ略ぼその精髓を捕へ得たるものと信す。

第二章 詩論

第一節 想像論

此の章にて論ぜんとする所謂詩は平仄あり押韻あり絶句といひ律といふが如き從來普通に呼び馴れたる詩にのみ限らざり之よりは更に廣き意味のものなり。古人が「一字盡らずして詩意多く一偈參せずして禪意多きものあり」など云へる詩字のこゝろ吾人がこゝろに論ぜんとするものと畧ぼ契合せるが如し。さて詩を論ずるに先だちて詩の根源なる想像を考察せざるべからず。美學または文學などにて特に用ふる想像といふ語には詩的作物をつくり出だす一種の力といふ意味あり。吾人々間の想像が或は言語文章にあらはれ或は學術技藝の上に活動し又は起業發明などの動機となり其の影響の及ぶ範圍いと廣しされば時はたゞ想像の活動に於ける機かた一斑に過ぎず。然れども詩に於ては想像が一面その表現せらるゝやいと明晰なり、はた耐久の性質を具ふ、一面物質上の齟齬を脱離し束縛を超越して自由の活動を爲す、かるが故に想像の特質、想像の至醇はこれを詩に於て始めて始めて得といふも不可なからん。詩の種類は多し

と雖もいづれもその精髓は想像に依りて成らざるなし是れ詩の何ものたるを知らんとする者必ず先づ想像が奈何に活動するか、それが全体に就いて通観するの要あり所以なり。

想像は心の中に幻象を見るの力は其の見るところの幻象を造り出だす力なり斯く見る者と見えしむる者と兩側に立つが如き趣ありと雖もその實二つの働きは根本は唯一の活動に歸す。例へば夢を見る際には心は別に物象を造り出さずして之れを観るなり、されば観ることはやがて造り出すことなり。

想像の中にて最も單純なるものは心が五官を通じて曾て得たる物象を心みづからがそを再び現れ來たるものは是れなり。吾人は航海に多年經驗ある或船長に聞けることあり常に航海し馴れたる海岸に沿うて暗夜に船を進むる時には闇ながらも一幅の大艦書を展げるが如く其の邊の景色たえずあり／＼と見得たりきと是れ肉眼の前には匿くれたれども心眼の前には露はれたるに外ならず。此の心眼に依りて海岸、丘陵、森林、市邑の配置ならびに形狀を覺り岬の突出せるさま灣のめぐる趣など都て知ることを得たりとすれば件の船長が暗夜にも安全に航海

し得たるは全く此の心の幻象を指南車と頼めるに由るなり。是れ恰も濃霧の中に馴れたる道をゆくが如し兩側の人家は眼にては見わけ難しと雖も心はよく之れを識別す故に躊躇なく進むを得るなり、此等のもの皆想像の働きなり。

曾て見たる事物の幻象を再現し來たる力は想像の中にては最も單純なるものなれども思ひの外重大なるものとす。西洋の美術學校などにては生徒に或物を示して之れを隠したる後全く記憶に依頼してそを寫し出ださしむる練習法ありとも亦想像の活用に於ける一端なり。若し吾人が或物の色彩形狀を一點漏らす所なく精確に看取することに熟練しはた其の見たる所を記憶して曾て肉眼に映じたると同様にそを心眼に再現し來たることを習練し得べしとすれば人生は爲に一新せらるゝものあらん。假に一度見しことある事物の形狀、人の容貌、山水の風景、その他繪畫彫刻など宛然目睹するばかりに心に再び現はるゝものなりとせば人間の生活が擴大せらるゝ幾許なるか知るべからず。日光山に遊ぶの旅客もし華嚴の瀧の偉觀、神橋の幽邃、靈廟の壯麗など見たる景象をそのまゝ心に著へて土産にするを得べくんば旅行の價値を増すもの幾許ぞや。教育の急務とす

るところは事實を心に填めこむにあらざりて事物を觀察し記憶し、はた考慮して心に入ら来るあらゆる材料を適宜に措置するやうに練習せしめ依りてもて人間を自主とならしめ世界の主人たらしむるにあらん果して然りとせば首見の物象を再現するといふ單純なる作用の方面より見るも想像が教育に對して重要な地位を占むるや論なし。

上に述べたるものは單に想像の作用の一小部分に過ぎず想像は目睹したるものと其のものを心の上に再現するといふに止まらず曾て見たる事物の諸原素を解離し更に新形に之を結合するの働きを爲す尙こゝにも止まらず新原素を相致し來たるなり之れが爲に曾て主官が外境に對する經驗にては知られざる所のものを心の上に創作するを得るなり。されども想像は外境の閱歷より學び得たる事實を忠實に守る所あり目睹に依りて得たるものを變造し新原素を加へはた新組織を構ふるの場合と雖も自然に對しては同感を生ず常に自然の法則に従ふ。かゝる故に想像の結果は自然の造れるものと其の軌を一にす良詩人が想像に據りて描き出だせる人物風景は造化の手に成れるものと其の性質に於て其の生命に於て讓るところなしと云ふは此の故を以てにあらざや。

吾人は想像と妄想との間に別を立つるを得べし想像は自然の法則に従ふ故にそれが造り出だせるものは造化の産めるものと同地位に立つのみならず自然の埋没せる部分を聞きあらはし、自然が完成せんとして未だ做遂げ得ざる所を補充することなり。例へば畫家が想像に依りて意匠を構へて成れる山水は却て現實に見得べきものに凌駕し而も自然を失はざるが如きこれなり。妄想は想像に比して一層放縱無規律の働きを爲すものなり自然より得たる材料を勝手に結び合せ隨意に細工を加ふるものとす。されば妄想にては人の胸に馬の頭を接ぎ合はすことを得べし馬頭牛頭の鬼の類ひは是れ妄想のつくる所觀音薩埵の如きは想像のうめるものなり孫悟空の如きは妄想のつくり出でたるものにして犬塚信乃の如きは想像の所作に成れりと云ふべし。妄想の世界は飛動無碍の境なれば怪光炫燿人を驚かすに足るものあらん偉觀人を眩するに足るものあらん然れども實世界を離れたる無何有の郷たるは免るべからず想像の世界に至ては然らず造化のつくり出でたる現實界よりも更に自然なることあり。

上に述べたるが如く想像は造化の隠微を闡明し、はた其が缺陷の填充をなすの力あるが故に科學上の研究に資くるところ尠少にあらず。チンダル氏が著「科學上に於ける想像の効用」と題する有名なる論文は能く此の想像が科學の上に重大の裨益を與ふるの事實を説明せり。俄に考ふれば科學は冷にして硬、嚴格に知識にのみ關するものゝ如く見え、はた偏へに確固たる事實の攻究にのみ立てるが如しと雖も實は然らず。科學すらも想像の指導に従うて始めて成就し得る所のもの多し。科學の最も大なる發明は實驗の境界を離れ想像の嚮導に従ひて未見の地に新進路を開き得たる際に爲さるゝを見ずや。吾人は仔細に分拆し歸納して生ずる結果を先見し、はたそが指導に任せて推究すれば竟に達すべき結論に直入する一種の洞察力をこゝには想像の語を用ひて表はせり。想像の語をかゝる意味に用ふるは必ずしも不適當にあらざるは下の事實にて知るべし。即ち現今既に開拓せられたる科學の版圖はその最初に溯れば茫漠たる想像の境界に屬せるものに過ぎざりき。換言すれば想像が指示するところ以外には一も眞實と認むべきものなかりき。且彼れが如く洞察し得たるものは要するに心の構成コンストラクティブの結果に外ならず。構

成力とは人間の心の無意識活動に具はれる或組織式に従ひて既知のものゝ未知のものゝを結合するものを云ふ。勿論この構成力が働ける結果として生ずるところのものには繪畫彫刻詩歌などいふ具象的のものもあるべく科學上の發明などいふ抽象的のものもあるべし。具象の場合に於ても抽象の場合に於ても洞察が造り出すところのものゝはそを構成力があらかじめ一完結として再現したるものに過ぎず。されば洞察と同義の想像は之れを科學の神來インスピレーションといふも可なりもし。此の想像なかりせば科學上の大進歩は到底見るを得ざりしならん。

前に云へるチンダルが論文を見る時には科學が想像の補助に依り五官の徵驗にては未だ曾て窺知し能はざりしのみならず到底窺知し難きものを推究し得たるもの甚だ尠なからざるを知る。物質界に於ける至大の發見とも云ふべき彼の瀾氣エーザーが宇宙に彌滿してよろゝの天跡、無數の世界が此の瀾氣の大洋の中に浮べりと云ふ學說の如きも全く想像の誘掖に依りて成立てるものにあらずや。而して此の無限の大洋の波搖盪して光明煥發し色彩始めて陸離たりとぞ。吾人は海岸に怒號し來たるさかまく波を想見する時には彼の瀾氣の無邊際なる大洋の運動す

るさまもはたそが結果をも殆ど目に見るやうに心裏に描き得るならずや。さて此の瀾氣洋の運動及びその結果が近世の科學に頗る重要にして且多趣味なる原素を供給したるものなれども這は全く想像に依りて始めて發見せられたるもの之れを外にしては瀾氣の奈何なるものなるかを探知するの道なし唯想像に依りてのみ獨り看得たり將來もまた之れに依りてのみ見ることを得るなり。斯く想像の教導に依りて其の殆ど無限に小なる微分子瀾氣を知り得るなり彼の天をして碧色を帯ばしめ朝暮の空に赫灼たる光彩を與ふるもの愈な此の微分子のわざなりとぞ。浩大なる天地の美觀に資する大勢力たるに拘はらずチンダルが説に據れば全宇宙の空間に滿ちたる瀾氣を悉く聚め來るも紳士が携帶する臭煙箱に收め得る程の容量に過ぎず此の極微分子は最良の顯微鏡を以てするも吾人の視覺にのぼらしむるには殆ど無限にその大きさを増さざるべからずといふ。されば此等は想像の造り出だせるものはた永久想像の版圖を出づる能はざるものたるべし。

又想像は物體と物體との關係ならびに原素と原素との關係の未だ分明とならざるものを觀破するに與りて力あり。古來の傳説を眞とすればニュートンは林檎の落つるを見て諸星運動の法則の推究を始め想像は彼れを驅りて直に宇宙を包容する大推斷に入らしめき。科學上の研究に依りてニュートンの推斷の眞否を決せんとし月などの尤も地球に近き天體に就いて試験したるに月の示すところに據ればニュートンの考は誤謬なりとせられき。然るに研究の末ニュートンの想像は眞理を洞觀し得たるものにして月は却て例外の運動をなすものたることを認められたるは漸く後年のことなりしにあらざや。科學上の發明たるや多數の人に取っては冷硬無味の事實なりされども是れ既に發明の成就せられたる後にとにして始めその發明が發明家の心に天來の想どなかりてくだるの際には是れ一箇の詩たるなり。科學上の發明は想像の所生にして想像は是れ詩的活動に外ならずされば詩の光彩と熾熱との中より出でたりと云ふべし。好し詩人の露想は奈何に天の莊嚴に新生面を開き之れに對して奈何に未曾有にして甚深なる悟入を爲し得ることありとも閃電の隱微なる意味の天啓フランクリンが心にくだれるに比せば眞詩たるの價值恐らくは譲らざるを得

ざるものあらんはた人心を鼓吹するの點に於ても此れは、彼れに優さるものあらん。されども通常世人はフランクリンを目するに米人中尤も詩人らしからぬ人物を以てするなり。吾人は彼のありふれたる雷鳴閃電の中に紙鳶を飛ばすの畫に對し宏大なる想像を抱いて熱心に黒雲を凝視する一箇の探檢家を見る毎に事實を主とする世界に於ても詩的原素想像が勝利を占むるが如くもはざるを得ず。他の例を取らんか彼の地動説の如きも今日より見れば實に乾燥無味のものなれども始め地を不動と信ぜられたる當時に方りて地は恐らくは動くものならんと天來の奇想を一旦豁然として得來たれる時には實に是れ一大詩境にあらざるなきを得んや。

人或は云はん前掲の例に見えたるが如き洞察發明の瞬間は是れ沒趣味たらさるべからす何となれば眞理の科學的研究に熱中する時なればなりと。然れども吾人は志か信ぜず其等の研究に方たりて想像が尤も主として動くものなることを肥臆せざるべからず而して想像はいづれの場合に於ても詩の熾熱と光燦とをもて充たされずといふことなし。吾人はニュートン及びフランクリンの此等の發明

を想像の造り出だせるものなりと云ふに就きては茲に肥臆すべきことあり即ちニュートン、フランクリン等は自然の默示を先見し得る程に自然に對して深く同情を有せり恰も二人の親友が互に其の言もその心も先見することを得るが如きものありき斯かる人の想像にして始めて彼れが如きの發明を爲し得たり。凡庸人の臆測はた空想家の空想は決して想像の燃えたる時にも新眞理を模索し得るが如きことなし、かゝる場合には想像は單に心の遊戯たるに過ぎず。

吾人は現今世間を見渡すに科學の領分ほど活潑に熾んに想像の働くところを見ず。常人の關知する範圍だけにて云へば科學を支配する主腦は想像なるが如し。例へば彼の進化説の如き許多の事實は之れを證するが爲に臚列せられ又廣く科學者の同意するところとなれりと雖も畢竟するに猿と狐とが談話する「エソップ物語」と等して實際吾人の心が造り出だせるものなり物論進化説が果して眞理なるか否かは別問題なり。御伽草子の類ひなる作り物語は妄想の分子多く之れに反して學說の方は想像の分子を多く含むのみ事實の直接なる説明にもあらず既に確知せられたる理路の指摘にあらず二者共に架空の作たるは一なり。學說は

想像の産めるものに云ひ得るだけの價值はこれありそが眞理なるにせよはた然らざるにせよ兎に角自然の大則と合するところありされど實際の上に根據を有せざるの點より見れば作り物語と毫も異むところなし。進化論者の説の如く現在に於て吾人は截然混ざらべからざる種類と思へるものも單に進化の程度に於ける相違に過ぎずして曾て一度は劣等より高等に單純より複雑に同一の段階を経て推移せしことありきとするも吾人は到底其の進化の實況を目撃すること能はざるにあらざるや。是れに由りて之れを觀れば進化説の如き一箇の夢想に過ぎずと云ふべしされど吾人は決して此の學説を濫用し放棄せんが爲に斯かる言をなすにあらざる此の學説の價值は眞理探求に於ける善好方便なり假定説なりとして充分に認めんとするものなり。

科學の研究に於て想像の緊要なる由を説けりと雖も吾人は決して想像を以て科學の全軀を蔽ひ得べしなどいふ意にはあらざるなり。想像は單に科學に未然を察する一種の神呪を與ふるのみ此の神呪に依りて奈何なる方面に向ひて研究の道を取るべきかを定め得べくはた此の神呪尤も驗ある時には想像は此等研究の

結果をして完成せしむるの資たるを得べし。吾人は現に見たりと思へるものにして實際は見ざるところ多く聞けりと思へるものにして實際は聞かざること多きは眞に驚くべき事實なり。吾人は讀書するに當たり誤植の文字あるも之れを覺ること稀なり而して不馴れなる文字を讀む時には吾人の眼はいたく疲るゝなり是れ後者は一々明に見ざるを得ざれど前者なる馴れし文字の場合にては單にあらましの字形を認むるに止まるが故なり。此の一例を以て見るも想像が奈何に五官の示すところの足らざるを補佐し断片より完軀をつくり出すかを知り得べし。されば想像が科學上の研究に於て發見せられたる断片の事實を一統して一箇完成の學説をつくり出だすの理も推知するに難からず。

吾人は世間の實務の上に於ても想像が重大なる地位を占むるは猶そが科學に於ける關係に譲らざるものあるを見る。所謂世間の實務家なる者は實驗の救ふる範圍に於て行動し苟もその以外には出でざるを常とすされども實務に於ても美術および科學と等しく特にこの道の天才なるものあり。さて此の天才なるものはいづれの場合を問はず意を用ひて推究せる手續に依りて働くよりは寧ろ閃電

の如き頓悟直観を爲すもの抽象的概念に依りて働くよりは寧ろ結果を先見するを生命とす直観頓悟は是れ所謂先見と同一義ならずや。然り而して直観頓悟これ想像の創作的活動に外ならず事物の新關係を觀破し新結合をつくり偶然稀有の事柄を常住のものやうに思ひ浮べ當來の事物を現在のものやうに洞察するもの皆この活動の結果ならざるなし。誠に冥想一番すれば吾人は實在の事物の間に生活しゐるよりは寧ろ前述の如き幻想の裏に生息する方遙に多きを知るべし。實務家が或事業に向つて資本をよろす際の如き全く一種の幻想の指導に依頼するにあらずや此の幻想たるや其の當時は毫も實物の形を具へざるもの唯その成就の結果に於て新財源と變ずるものなり。

此等實務の場合に於ても他の場合に於けると同様財を富まし得るが如きものは是れ修練を経たる想像の結果なり勿論この修練といふことは天才ある人には必ずしも要せざることあるべし茲には修練不修練は問ふところにあらず兎に角前掲の場合には想像の動く舞臺にして妄想の興る場所にあらず。妄想家時に空想を夢みて其の空想の指揮のまゝ金を賭するものあれども結果たるや唯失敗の記

臆と空中樓閣のみ遺こるを常とす。人は幻想の中に生活すといふ他の例を取らんか或程度の上ののばれば實業の結果たる財貨の如きも其の價値は全く想像的のところ存す何となれば人は其の資産の全部を見るものにあらずはた其の多分より直接の利益直接の愉快を得んと望むものにあらず好し望むとも遣は能はざるところなり唯想像の上に我が富の享有を思ひ浮べて満足するところ是れ大價値のある所なり。

想像が人生と相渉るところ淺からざるのみならず世界の眞價は之れに負ふところ多し。西洋の諺に世界の一例は他の一例の生活の奈何を知らずといふは眞に吾人を欺かず詩人學者などは己れが想像の境に心を托して生活するもの多きが故に冷硬無味なる實際界に於て人間が奈何にして生活に堪ふるかを怪む。想像の無碍淨光の境に心を遊ばしむることなくば此の世界は人間の棲むには堪へぬ場所なるべしと彼等が思ふは正しき考なり然れども所謂實務世界に想像の餘地なしと思ふは誤謬たるを免れず。英語の poet (詩人) の語源は作者といふことなりきとは恰く人の知るところなるが都て作者たるもの例へば繪畫彫刻を作り戯曲

小説、詩歌を作る者と金を作り貨物を作る者とは程度の上にてこそ相違はあれいづれも作者といふ語には幾分か詩人の意味を含みあるものなり換言すれば此等の者は皆想像力に依りて創作する人々なり。諸般の發明家、開基者、建設者などいはるゝ人々は都て想像力に扶掖せられて成功の途に就きしものならざるなし。吾人は兎角實際生活と云へば偏へに乾燥沒趣味の境界にて些の想像活動の餘裕なく詩人の夢想を容るゝの地なきやうに速断すれど決して然らず總べて人間の創作は想像を基礎として成らざるはなし此の點に於て諸種の創作物はよく一致す、蓋し想像は心の創作力なればなり、切に云へば想像は人心に於ける活動の命根なり之れなくんば人間は生活すること能はず。想像の勢力の及ぶところ深く且つ廣きこと如斯きものありと雖も實業の企畫に於ては未だ想像はその圓滿なる働を顯すものにあらず其の活動を傾盡するものにあらず何と云へば實業界にては只管一個人の或目的に向ひて之れを驅使し此の範圍外にそれが自在の翱翔を許さなければなり。されども右の理由あればとて決して吾人は想像が實際生活の上に趣味を加へ擴大を加ふるの効績をば没すべからず。

吾人は上來想像が科學及び實業に與ふる効用を述べたり蓋しそれが本領とはいはく隔離したる此等の部面に於てすらも或條件を許す上は指南車たるの位地にあるを示さんと欲せりき、言葉を換へて云へば俗に想像とは相容れざる世界なりと稱せらるゝ部面に於ても其の大効績は想像の援助に依らざるものなきを知らしめんと期したりき。果して其等の縁遠き版圖に於てもえかく主動の役廻りをなすものとすれば世人が認めて特にそれが本領と看做すところの詩の境界にありては更に著しきものあるは疑ふに足らじ。

吾人は想像が前の場合よりも更に不羈獨立の位地に立つところ即ちそれが本領を論するに方たり恐らくは曾て想像を巧みに用ひて効を奏せる人々の反對に遇ふことあるべし、蓋し實驗家等は思ふならん想像もし修養怠らずんば善き從僕となすの價値はあるべしと。されども想像は果して單に從僕の位地に立つべきものか從僕の地位はそれが本領なるか是れ問題なるべし。想像真に他の隸屬たるに過ぎざるものか然らば此の世界は實際何者にか屬する。科學は世界の主人なるか、はた實業諸の實際上の職務事業を合むが主人なるか。科學といひ實業といふも

のいづれも吾人が高尚なる人事の一部として尊崇するところのものなり、されども此等が各自その目的の爲に想像を驅使して隸屬の地位に蹴落すと雖も想像豈に長くその脚下にのみ屈するものならんや、それが本領に於て自家の勢力を逞うする場合他に存するなり。

再び吾人をして問を提起せしめよ、そも此の世界は何者の管領するところぞと、吾人は試みに此の問題を替査せん。吾人は思ふ、此の世界を吾人の前に創造し出せる吾人の能力これ即ち世界の主人なり他言にて云へば吾人に此の世界を興へたる吾人の能力とれ世界の宰領なりと。さて吾人の能力にも種々あることなるが奈何なる能力が斯く世界を造り出だせるならんか少しく比較討究すべし。實務的能力果してその選に當たるものならんか否然らば、此の能力は市街の上に立ちては其の勢を逞うすべけれど世界の創造には與るところなきや明けし。然らば理解力を代表する科學を取りて其の選に當たるや否やを吟味せんか。科學をしてぞがあらゆる攻究法はたあらゆる法便を用ひしめ彼の殿めしき歸納論理をも又ぞが必要とするあらゆる實驗をも爲さしめよ、更に一步を進めて科學は世界の

存在を吾人に告ぐることありとせよ。科學は證據に依りて表明し得ざるものは都て承認せざるものなれば此の立脚地より其の價値を吟味せざるべからず即ちぞが實在界の證をもて正當に世界の主人たり得るの實を指示せしめよ。科學果して斯かる要求に應じ得るか否決して能はず、何となれば科學が得て自家構成の根據たるべき材料はいづれも纔かに五官の感覺にのぼる部分たるに過ぎず。然るに吾人の心を認めてもて世界なりとするところは感覺し得ざる部分いと多し、換言すれば吾人の所謂世界は感覺界よりは非常に廣大なりされば科學は果してその本領に確立し舉證辨析の力にのみ依頼して吾人をして首肯せしむるやうに此の世界を組織し得るか。科學は竟にかゝる浩大なる要求に應ずるを得るものにあらざる。更に吾人をして想像の力果して此の要求に應じ得るか否を檢せしめよ。想像と雖もぞが感覺上より得來たる材料はぞが敵手たる科學と毫も異るところなく至て狹き範圍に限ざらる、されど之れをもて竟に不足を感ずる所なし。蓋し想像は心眼を開いて天地を觀望す故に山河、林澤、市邑、宮殿の世界を看るに止まらずして學術、技藝、實業の世界をも見るなり。斯かる浩大なる世界は何の處よ

り來れるや、奈何にして吾人の微々たる感覺が之れを組成し得たるや、いづれより
 まる圓跡たる固形を得來りしや、はた既に自足の完跡を具しながら更に全體の大
 圓滿を成ぜんとする雜多の附屬物は何の處より出で來れるか。若し出所不明と
 せば遽然として斯かる跡を現せしか、そはまた奈何にして行はれしか。吾人は此
 等の問題をば解き得ず、世界を神に歸し火雲に歸し極微分子に歸するが如きは別
 論なり、吾人は唯この世界は吾人が想像の力之れを造り出せるを知るのみ、想像は
 僅かの感覺的材料に緣りて斯かる靈動、洪大、偉麗の世界を見得たり、而して吾人の
 心は先天的信仰に由りてそが見得たるところのものを實在するものと認む。

吾人は想像のつくり出すところと造化の創造とは合致すと思ふの傾あるが果し
 て然らば之れより推して宇宙の大元と想像とは同性質を有するものなりと云ひ
 得るか、はた斯かる説を首肯すべきか、是れ恐らくは然らむ。されども吾人が存在
 すと見るところの世界は是れ想像の創作に係るものと云ひ得べし、此の事實は深
 遠なる哲理の同意するところなり、カントもヒ、テも共に知覺、感覺の世界を吾人
 のつくり與へたるものを産出的想像力プロダクティブ・イマジネーションと呼べりき。

若し果して世界は想像の所造に係るとすれば世界は想像の所屬なりといひ得べ
 く、隨うて想像はこの權勢に依りて世界の主人たるべし。想像はその力を科學に
 分與して推究分析を爲すを得しめ、之れを實務に割與しては自在に行動するを得
 しめき。想像はげに世界の全面を支配するの君主にして、能く物をつくり物を神
 益する女王たりともいひつべし。想像はそが本領に於ける探檢、査察に依りて科
 學を誘掖するもの尠少ならず、或は嚮導の任に當たりて方針を指示し、或は研究の
 端緒を尋ねて新紀元に入るの媒を爲すとあり。又實業上に想像が隱約の間に補
 助を與ふるもの多し、未發見に屬する富の伏するところを指示するが如きこと皆
 之れがわざなり。想像は斯く他を扶助するが故に従僕の地位にあるものと看做
 さるゝ傾なきにあらず、本來は主人の地位にあるものなれども却て客の爲に驅使
 せらるゝの趣あり、而して此の役廻りは永久に繼續するものなり、而も斯くして其
 の尊嚴を保ち主權を確立するところあり。

想像は其特能を單に表彰するに止まらずして左まで必要なきものなれども更に
 一步を進めて説明を爲すなり、さて亦想像がこの世界をつくり出すに當たり、故遂

十九種著者の
名が代をせん
外編一編なり

九〇
げずして殘こせる部分を完成してても其が創作力をあらはす。美術と詩とは想像が依りてもて世界の缺所を填充し圓満に至らしむる手段たり機械たりといふべし。吾人が現今目撃する人生のさまは決して完全のものにあらず、好し遣は漸々完全の方向に進み得べしと雖もその境に至るには尙遠し。世界はそが蘊蓄するところの圓満をみづから表彰すること能はず、美術家の手に依りて其の未完の邊を補充せられ始めて其の圓満の相を現するを得るなり。されば美術は醇化せる人間醇化せる自然、醇化せる人生を與ふるもの吾人之れを得て之れに對するや眞實の人間、眞實の自然、眞實の人生なりと感せざること能はず。想像はまた世界の秘密を闡明し幽玄を開展す、しかのみならず自然が至らんと欲して尙至ること能はざるところを表明し以て自然の缺陷を補ひ眞の自然を吾人に見ることを得しむ。吾人が常に目撃するところの者は決して眞の人間といふべからず、寧ろ眞の人間はホーマアが作中に之れを見るを得べし例へばアポロの如きその一例とす。げにや吾人は衆人稠坐の中尙人を見ずと云ひ得べき趣なきにあらず、何となれば吾人が周圍に見るところのものは幾に依りてもて人を表はすべき符號形

骸たるに止まる眞に人間たる生命は深く胸底に匿かれて窺ふべからず。されば眞に人間を見んと欲すれば須くシェイクスピアが劇詩を翫味せざるべからず。さて又宗教家道德家などが完全なる人生として吾人に説き示すところのものは理想の生活なり、現在より見れば一箇夢想の境界たるに外ならず、人生の極致たるのみ。蓋し斯かる理想を立て斯かる極致を夢想する所以のものは人生の煩悶苦痛が何の爲なるやの疑問に説明を與へ困憊挫折せんとするを救ふもの、之れを要するに想像の領分を離れず。若しまた理想の生活が曾て一度この世界に實際活現せしことありとすれば吾人は想像の力に依りてその斷片零碎より過去の圓満なる有様を再びつくり出さざるべからず。斯く想像がそのれの造れる世界を更に完成しててもて世界の領主たるを一層明に證す。想像が世界に於て占むるところの位地を知る他の一法は、特に想像の結果に負ふところあるものが悠久の質を具ふるを見て證とするを得べし。科學哲學の著述の類ひは時代の經ると共に陳腐に屬し去りて全く其の價值を失ふかはた當時の歴史の資料としてのみ價值を認めらるゝに至る、然るに文學美術などの想像が産

み出せるものは其の價值永久不變なり數百年以前の作も尙當時と等しく人の賞翫を得るは珍しからぬことなり。支那にて云はば彼の國風雅頌三百篇を始として離騷の如き漢魏の歌行雜賦の如き唐に入りて李杜以下の名篇佳什今も尙一讀して三歎の妙あるを覺ゆるもの尠なからず。我が國にて云はば『萬葉』に見えたる赤人、人麿等が長短歌は云ふもさらなり『古今』『新古今』の類ひ紫女が『源語』清女が『枕詞』など或は千年を上下し或は數百年を経たれども尙愛誦して措く能はざるものあるは想像の作が其の價值の長へに衰へざるを證するに足らずとせんや。歐洲に例を求むればホーマア、ダンテ、スペンサー等が作は現代の傑作にも増して美にして且長へに新たなるにても知るべし。哲學書などの中にも長くその價值を失はざるものを檢する時にはそれは全く想像の作に近きもの即ち詩歌の趣味に富めるものなることを發見すべし。プラトイが哲學の如きは想像の基礎に立てるもの其の精髓は一篇の詩とて可なり、^{アイデア}理想は現實よりも更に眞なりといへる假定觀これ氏が哲學の根據とするところなり。氏以爲へらく現實に見らるる事物はすべて不完全にして這は單に理想界の事物のまばしが程の影に過ぎず、而

して理想界は心眼のみひとり見るを得るところはた此の境界のみひとり永遠不變なりと。プラトイが書をしてその趣味古今同一轍ならしむるものは此等想像の分子のゆたかなるに由れり。

何故に斯く想像の結果に成れる作は耐久なるか何故に美は不老不死の堅實を有するか案ずるに此の境界にては其の範圍内に於て缺陷は填充せられ圓滿に至れるが故に宇宙の創造力があるは、働かざる餘地なきが故ならん。之れに反して他の場合に於てはあらゆる物すべて進歩發達の途上に彷徨す、諸の學術上の系統理論、考案相競ひて進み知識は更に他の優される知識之れを凌駕し發明は他の更に進歩したる發明之れを壓し殆ど底止するところなし。蓋し都て吾人は何事に就きてもそれが現在の状態をもて目的とすることなし或理想を圓滿に實現するをもて目的とす、かるが故に此の理想の既に實現し盡くされたるものは常に事物發達の渦中に入ることなく超然として長へに其が自足完備の躰を維持して渝ることなきなり。

吾人は論歩を一轉して想像とは全く相反する心的能力と想像とを比較討究せん

とす。想像と對立する能力とは他にあらざる理解力アンダースタンディングをいふ。理解力はそれが分析的活動アナリシスをもて心の一面を代表すること。猶想像力イマジネーションがその構成的活動コンストラクティブ・アクティビティをもて心の他面を代表するが如し。實際の上よりいへば分析は幾分か統一と聯關して離れざるものなれども今は抽象して斯かる種類の關係より分離し純然たる別箇のものとして論せん。さすれば理解力は科學の雜多なるきれくレクの材料を吾人に供給するものにして、想像力は吾人に詩詩廣義のの圓融統一を與ふ。理解力は實際的のものを吾人に與へんとし、想像力は理想的のものを提げ來らんとす。理解力は世界を微分子に分析し去るが故に吾人に零碎片々たるみすばらしきものを示すに止まれども、想像力の方は渾圓美妙の完軀を現じ來たる。二者の中果していづれか眞に近きものぞ。

試みに一面の畫を取り顯微鏡をもて之れを觀よ、必ずやそを概ね若干の諸原素に分析し油や鉛や畫布カンバスその他の物質的組成分を見出だすことなるべし。此等の原素を數へ來たりて汝が激賞措かざる畫は如斯きものたるに過ぎざるかと云はば、奈何かゝる觀察の方法は果して畫の全軀を觀取し得たるものと爲すか彼れが見

たる以外に畫の要部はあらざるか。理解力をもて分析するも逸して竟に捕へ得ざるものはなきか顯微鏡にては看わけ難き或ものはなきか。唯想像力のみひとり認むるを得る理想イデアなるもの其所に存せざりしか色彩や油や畫布や此等の如き生命なく價值なき原料を用ひて靈動しはた價值あるものをつくり出す理想そこに存せざりしか。理想は依りてもてものを表現する器具たり媒介たるところのものど離れて自家獨立の眞を有す、故に理想は自家表現に用ふる材料のあらざる前既にあり、此の材料の滅却する後も尙存す、またそれは表現の材料を變換することも難からず。例へばラファエールが名畫は之れをセント・ピーターの石壁の上に模寫するを得而して若しその理想前と同じく充分に現せられたる以上は毫も材料の變換に依りて失はるゝところなし。畫の精髓畫の眞趣は如斯く他に移動し得るものなり、而して此の場合に於て理想は用を爲さるるか。この場合には殆ど理想が主として働くにあらずや。されば吾人は理想を看落として畫を説くものをば決して畫の全軀を説き畫の眞趣を説き得たるものとは信ずること能はず。上に云へる分析的研究法の缺點は明なることなれど、現今多くは此の方法に依り

て世界を論ずるならずや。近時の形勢は都べて歸納的に下より上に漸々進みて事物の説明を爲し、實際上の事實およびその關係に重きを置いて攷究するの傾向稍著きものあり。吾人は科學上の研究ならびに學說が世界に致すところの効用を説くに吝なるものにあらず、吾人は世人と共に喝采をもてその効用を迎ふるものなり。唯吾人が反對せんとするは此等の研究、此等の學說が殆ど解かざるところの原素世界に多きことなるが此等のものを等閑に附するの點に外ならず。吾人は決して科學其の者を攻撃するものにあらず、科學が一種獨得の効用あるは明なるを知ればなり。唯吾人は物理學の研究をもて真理全體を看徹すの觀想を攻撃す、はたそをもて真理の尤も重要な原素と看做すが如き愚見をも反駁せんと欲するものなり。

吾人は植物學者が花に就いて説明するところを決して謹聽せざるものにあらず、吾人は熱心に其の剖析に矚目すべし。然れども若し植物學者にしてその剖析にて得たる知識以外に花なしと云はば吾人は春の初めに咲き出でたるうるはしき花を見て喜びの餘り手をたたく嬰兒の方遙か眞に花を見得たるものと云ふべし。

吾人は生理學者が人體に關して説く所のものを毫も疑はず、骸骨、筋肉、神經、動脈などに就いての研究が尤も驚くべき程、趣味ある事實の闡明を爲すところあるを認む。然れども生理學者にして若し生理學が教ふるところ以外に人間あるを知らずは母の手に抱かれてやすらかに眠むるゝ嬰兒の方寧ろ眞を知ること彼れに比して深しとも云ひ得べし。骸骨の上をよそうて花見かなと云ふが如き佛家觀世の眼よりすれば嫣然微笑する花顔も齒をむき出す頭蓋骨と見ゆべし、是れ甚だ妙なる見やうにあらざるのみならず亦眞相を觀取し得ざるものにあらずや。宇宙には解剖用の刀にも上らず化學用の罈、頭蓋器にても發見し得ざるものあり。全體は部分の總計たるに止まらず、其の以上に解剖しては發見し得ざる或ものを含む。されば全體は部分を悉く寄せ集めたるものよりも更に眞なり。理想は實在よりも更に眞なり、此の點に於てプラトンの説は正し、理想は宇宙に於て實在よりも遙に強大なる勢力あり。理想はみづからを満足せんが爲には現實を破却す。例へば充分生長したる樹はそが若木たる時よりは更に眞なり、蓋し若木は理想の勢力に屈伏して樹となれるものなればなり。若し進化説を眞なりと

すれば其のむかし世界は匍匐動物のみ充滿の當時はいふも更なり下りて進化して完全に近き動物之れに代りし時代などあらゆる種類の段階を通じ此等の立脚地より見んに尙その際は實現に至らざりしと雖も理想として成立ちみたる人間は彼等に比しては遙かに眞なりきと云はざるべからず何となれば其等の許多の境遇を経て雜多の形體を驅り其の理想に少しづつ似るやうに變形せしめ竟に横目隆鼻直立する高尚なる人形に推移せしめられたるなり。蓋し人間に發達するまでの劣等なる雜多の形は是れ一種の假面假裝に過ぎずして其の内部には眞の形骸及び勢力潛みみたりき。されば理想の境界は過去の人間歴史の全骸と共に現在の狀態よりも眞なりと云ふべし。

前にも既に云へるが如く人生に於てもはた人間に於ても理解力をもて剖析すれば忽ち逸し去りて知ることを得ざるもの殆ど無限あり若し之れを疑ふものあらば廣く世界を觀察せよ何の處にか此の理を證するに足るものあらざらん。試みに太平洋とは何ぞやの問を提起せんか。化學者は答ふるならん若干の鹽分および其の他の原素を含める水に外ならずとげにや分析に訴へて之れを檢すれば此の

以外に太平洋あることなかるべしされど奈何にしていづれよりそが壯嚴偉麗の觀は來りしや是れ分析が吾人に告ぐる能はざりしどころのものにあらずや。吾人は先に穹窿の碧色は瀛氣の衝突波動に由來する所以を述べ且つ想像の力に依りて吾人は宇宙の空間に瀰滿する瀛氣は之れを一箇の臭煙箱に收め盡くし得る程のものと斷じたりき。斯かる説明は實に趣味ありはた此の以上には天の碧色を理解するの道なかるべしされども之れに依りて毫も蒼天の雄渾壯大を説明するに足らざるを知る。

吾人は此の美を觀取する力と呼んで想像力といふ蓋し想像力は人心の構成的直覺力インテリゲンツに依らずして直に事物を概括的に大觀し得る力の發露せるものなればなり。美の宿れる對境その者は美にあらず唯美を觀ずるところの力と酷似せる力が物質的分子に藉りてその上に美を成ずる材料たるのみ換言すれば畫の美なるは畫その者の美なるにあらず畫裏の理想が色彩點線隱影楮布を媒として觀者の理想を融合和諧するの刹那美は忽焉として現じ來たるに外ならず。されば吾人が畫の美を樂むといふ際にはその力の應じて美術家が天來より受けて作

に寄せたる理想を我が心にて再び喚起するものなり。

美は世界の圓滿、生命、理想を現するもの、而して美は想像力のみひとり捕ふるを得るところのものなり。理解力は決して美を捕ふること能はざるもの、されば科學的剖析を以ては竟に美の三昧に入ると難し。吾人は美の勢力を認め美の存在を認めしかも偏へに理解力に依頼し之れが説明を試み竟に難境に陥る人を見る時には無限の感慨なき能はず、その一例を見んか。チンダル氏は詩人に譲らざる程に想像に富める人にして自然の景色をいたく愛し山河の間に逍遙することを楽しめるが、氏は自然が何故にまかく我れを楽しましむるかの問題を解かんとして常に難點に逢着せりき。氏は壯健なる人なるが故に山嶽を攀ぢるを苦とせざるのみならず之れを愉快と思へる人なりしが、此の愉快は單に身軀の活動より來れるものにあらざるを意圖せり即ち山嶽その者より得來る愉快なるを覺れり。此の山嶽が我が心に及ぼす爽快の趣を説明せんと欲したり、氏は本來科學者なれば理解力を信憑する重きに失する傾なきにあらざりき。氏はアルプス山の美觀が我が心を昂がらしむる魔力あるを認め此の科學にて説明し得ざる勢力を奈何にもし

て知らんと欲せり、世には之れを以て單に幼時より得たる聯想の結果かゝる快感を生ずといふ説なれども、氏が聰明はこの説の不備を觀破するに難からざりき。

氏思へらく我は稚き頃既に自然を愛せり、されば幼時の聯想といへることは以て自然の快感を説明するに足らずと。されば氏は一步を進めて遠き祖先の聯想の結果に之れを歸し吾人の感情の中にては尤も強き性質のものなるへしと斷ずるに至れり。氏は此の説に據りてハーバート、スペンサルが景色の愉快を説明せる三條件中一を排して他を探るものと云ふべし。吾人はチンダルと共に我々みづからが得たる幼時の聯想に歸するの説は服する能はざる所なり。景色を賞翫する力は年たくるに隨ふて一般に發達するとは云ふべからずチンダルが如きは幼時既に山川の美を愛せりきとは既に述べたるが如し。オルツナルス曰はく、我が心は彩蜺の天に懸るを見るたむにをどる、生まれし始めより成人となれる今まで尙まかり云々。

オルツナルスが成年となりし今までの句を加へ得たりしはまだしも至幸なりといふべし何となれば美を愛するの心は年老ゆるに従ひて衰ふるが常なればなり

オルゾオルスすらも世界の光明の年と共に消え去るがごとく覺ゆる由いへることあり。壯年に見たるナイヤガラの大瀑布の偉觀よりも幼時眺めたる小川の流れが遙か心を動す力大なるものありしように覺ゆるは一般の人の實驗するところならん。此等の例に依りて替ふるに山水が與ふる快感の要素は決して幼時の聯想より來たるものにあらざるを知るべし何となれば幼時に於て既に旺盛なる此の自然に對する快感をば右の説にては竟に其の由來を説明する能はざるべければなり。

然らばチンダルが説に従ひて自然の風景に對する快感の由來を吾人の遠き祖先の聯想に歸するとせんか奈何にして斯かることあり得べきかを解するは容易にあらず。吾人の記憶にだも存せざる遠祖の聯想といふことは今や所謂實驗哲學の中堅とも稱すべきものなり。さて此の説は單に遠祖以來の聯想が未孫なる我々の腦髓に遺傳せりといふのみならず更に人間の起源に溯りそが曾て經きたれる無限の劣等動物の段階に於ける聯想よりも影響を受くるところありと主張す。斯かるはてしなき假定に根據を托するの學説は竟に無際涯の迷路に陥るを

免れず。されどもチンダルが遺傳的聯想説を取れる場合の如きは意外にその眞偽を精細に審査し得るものあり。

吾人は右の眞偽を替ふる前に先づ科學者が物質界に對しては精緻なる攷究法を用ふれども彼等が哲學の版圖に入る時には往々粗放散漫に流るゝの弊あるを注意せざるべからず。科學者等は往々哲學の領内に於ては臆測が萬事を辨ずるに足るべしと想像するらしく見ゆるものあり是れ尤も誤れるものなり。例へば科學者等が常に排斥する接續をもて因果とする一種の推理法世にあり詳しく云へば或事件に接續して起これる他の事件をもて前者の結果なりとする一種の論法あり。こゝに一人あり藥を服用せり而して健康に復せりかるが故に藥は我が病を癒せりと推斷す是れと等しく蠻人の中には日蝕の間聲をあげて叫ぶ習慣のものあり彼等が叫ぶ間に太陽は蝕し終りて元に復するを見て叫ぶことが蝕し終らしむる原因なりとするも強ち無理ならむ此等はいづれも接續をもて直に因果と同視する一種の似而非推論に過ぎず。かゝる推理法を科學者は決して正しき判斷を與ふるものとせずされば此の誤謬に陥るを防禦せんが爲に差異法といへる

を用ふ即ち現に問題となりある事柄がその原因と假定せられたる事柄と離れて起ころの場合ありや否を精査するなり若し離れて起ころことあれば二者因果の假定の誤謬はちのづから明白となるべし。この差異法は科學者が得意に用ふる所のものなるが彼等は少しく哲理的問題に入るに當りてや往々之れを適用することを怠るの非を免れざるものあり。吾人が前に引ける彼のスペンサル之れを唱へチンダル主として之れに和したる遺傳的聯想論の如き其の一例として見るを得べし。何となればオルゾオルスは自然の風光に對して神興つねに動きぬ是れ氏が遠祖野蠻の域を脱せざりし頃山野に獵し河海に漁して獲物を喜べる聯想の影響なりといふは是れ正しく前後相ついで起これるを直に因果と誤想する似而非推論なればなり。チンダルがこの遺傳的聯想説を採るに至れる事情はこの説の應用上尤も注目するの價值あり。氏はアルプス山嶺に立ち瀟目體々たる氷雪の世界を眺めて無限の美を感じ得たりき。而してこの美感の説明として右の説を取れるは前に既に云へるが如し。一鳥飛びつくして萬里一色の莊嚴なる冬景色の色は我が邦人の如きは概ね感じ得ざる者なし駒とめて袖うちにはらふ蔭も

かしの一首を誦すれば佐野のわたりの黄昏の冬景色思ひ出だされて滯氣骨に入るものあるにあらざや。自然の美が人心を動かすの理を論ずるものにして上の如き方面をも含めて見ざる時は之れを不完全といふとも詭言にはあらじ。然るに吾人が先きに引用したるスペンサルが遺傳的聯想説には此の方面を遺却せるの趣あり。未開時代に於ける吾人の遠祖は寂光無色の氷雪の世界に對して快感を起さすが如きと萬なかりしや必せりさすれば吾人が萬里一白の景色より得來たる快感は之れを奈何に遠き時代の祖先の聯想に由來を求むるも竟に得べからず。古代の人民中には北方の寒國をもて惡魔の住める場所と思へるもある程にて一般に之れを嫌へるの風ありしを見れば思ひ半ばに過ぐる者あらん。生物自然發生の試験法を見て聯想論の吟味に及ぶは面白きところあれば一言せん。最下等の生物が全く自發し得るか否の問題を決するが爲に液鉢を盛れる一箇の箱を密閉し外部の空氣に觸れて他より或原素の入り來たらざるやうになし且この液鉢中に既に存したる原素を殺了する程に熱し斯くして後その中に發したる生物をば全く獨立して自然に發したるものと推定す。吾人は此等の試験法の結果を

よびそが確否の問題と毫も關係するところなれど雖も按ずるに雲中の景美より得る快感の場合に於ては冷氣が先きの液牀試験にて熱の倣途げ得たる役廻りを充たすに似たりスペインサルが唱ふる歴史的聯想の説は竟に爲に氷結して生命を失へりとも云ひつべし。

他の例を取りて更に祖先の聯想が吾人の自然美を愛することに關係するところなきを證せんか。天懸海を渡りて浪立つ雄渾の觀が自然美の中にて尤なるものたるは人の既に知るところなりされど野蠻時代に於ける我々の祖先は穩波靜水の上にてこそ遊びもしたれ働きもしたれ峯巒順夷に起り且倒るといふが如きわれにある、海面に或は航し或は漁し或は遊べりきとは想像だもする能はず。然るに一方には現今我々が美とする自然の景色を野蠻時代の我々の祖先も等しく樂み得しものあり彩虹の天に懸る海邊に棹さし星華の燦たる林下に憩ひて自然のうるはしさに恍惚として見とれしことありしは疑ふべからず。

吾人が野蠻時代の祖先すでに自然の美を樂みしを見れば好し聯想の作用は多少ありきとするも之れをもてそが全牀の説明とはならず。祖先が曾て生活せる土

地境遇と相似たるところに身を置く時には愉快に思ふこと或は是れあらん而も之れに依りて自然の美自然の莊嚴に於ける精髓、神來活力を説明するに足らず。山嶽の雄大なる風景に就いてチンダルみづから謂へらく此の場合に於ける趣味の半ばは心理的なり吾人の四圍の風景は單に一箇の材料に過ぎず之れを得て雄渾の趣味を成するものは我が靈能に外ならずと説き得て甚だよし。斯かる心理的神興を單に動物が感受し得る如き物質上の悅樂より來れる遺傳的聯想に歸するは竟にその當を見ず。若し此等の美感をもて遺傳に成ると云はば吾人の祖先は既に物質的生活と共に精神的生活をも爲しめたるもの換言すれば美を解し得るものなりきと看做さるべからず。げにや史を按ずるに太古に於て既に業に人間が美に感じて抒情の詩歌をもつせるなどの例いと多しオルゾオルスが稱き頃より壯年の後までも等しく虹蜺の美を樂めりきと云へる語は之れを移して全人間が觀美識の史を説明するに足らん。泰西にて云はば東雲の神に獻げたるア
ーリヤン種族の讚美歌は現今歐洲人と少くも同等の觀美眼ありしを示すに足る其の他例を和漢の古詩歌の類に求めなば多く得ること難からじ。各國に行はる

神代誌開闢説の類ひ若くは種々の宗教など概ね人間観美譚の所産にあらざるなし。古代の民は蒼穹無邊際の高を仰ぎ森林の蒼鬱幽邃なる趣に對し無限の美感を得て驚歎、怪訝、興奮せるの結果この不可思議なる自然の勢力を神と呼ぶもの出づるに至れり。

吾人は論じて茲に至れば想像の問題を解いて既に頂巔に達せりとも云ふべし今まで述べたるところを約言すれば(一)單に經驗したる所のものを再び心に描き出す力として想像を論じ次に(二)科學及び實際生活に於ける洞觀力なり指南車なりとして想像を論じ進んで(三)吾人の諸能力中この世界をかく見得るやうに造れるものは想像の力なるを考定し其れより想像がそが本領に於ける自由の活動に及び自然を想化(渣滓を去り缺所を填充して理想的に化すること)する力を説けり。按ずるに想像が自然の中に發見しはた發揮する所の理想的原素はこれ自然の最も真なるものなり此の真相は之れを美に於て始めて現じ來たるなり是れ既に詳述したる所のものとす。是れより一步を進めて理想的原素が宗教の上に發現するの點を論ぜざるべからず。

今までの所までは吾人の論述に同情を表したる讀者と雖も以下に説かんとする宗教と想像との關係を論ずるの一段に至りては恐らく反對するものもあるべし。想像の語を自然のうちに神靈の顯在を直觀するの眼識といふに適用するを首肯し難しと思ふもあるべし蓋し此等の人は云ふならん神靈顯在の場合にありては毫も想像と云はるべき状態なし即ち形象を描き出だすなどの性質あることなしと。直觀の意義は之れを精確に云ふ時には元來不可見にしてあらゆる形體を超越したるものが或形體に賴りて現はれたるを直接に觀取するを云ふ、さすれば神靈の靈在を直觀する眼識を想像の語にて掩ふは憚焉たらざと云ふ必ずしも故なきにあらず。斯かる考の人々は「想像」の語に換ふるに「心の想化する力」といふ言葉を以てせんとするなるべし、されど字義通りの意味に解する間は此の交換は毫もその効なかるべし。言語學上にては「想」とは「或見得べきもの」を意味すか、れば彼等が排斥する想像の語と同様に形象の意を含めり。斯くは云ふものゝ吾人は此等の縁遠き言語學上の解などを據りどころとして吾人が想像の語の用ひ方の正しきを辨じ得たりとは信せず。按ずるに「想の語は今や殆ど原義を失ひて全く抽

象的の意味をあらはすものとなりたれば吾人は之れをもて想像の語に代用するを好まず。何人も知るならん世にはひとり心眼のみに依る一種の見やうありはた一定の形をもて束縛せざる一種の想像あり世界に神靈の顯在するを觀取するの眼識はこの種の見やうなり雜駁なる自然の中に斷片として散在せる神靈の顯在を收拾し之れを融合して莊嚴なる一體に結ぶものは此の種の想像の力に外ならず。植物學者が分析し去る原素に緣り想化統一して一箇の花をつくり且斯くして始めて現はれたる美を樂しむは最れ想像の力にあらずや此の方はやがて宇宙の理想的統一アイデアルユニティを構成しこの統一に依りて發揮せらるゝ神々しき偉觀を崇拜するところのものと同類にあらざるなきを得んや。

想像と宗教との關係に就いて有益なる例は之れをダーギンが傳の中に見ることを得。氏が科學上の研究に餘りに趣味を置き過ぎたる爲そが觀美識と宗教心とを薄弱ならしめたることありと云ふ。而して宗教上の信仰および熱心全く衰へ去りしと共に詩歌、繪畫、音樂などに對して趣味を感せざるやうになりしと傳ふ。

此の例に就きて吾人は宗教の精髓は美の好尚なりといふことを含めりと解釋せんと欲するものにあらず。されども若し斯くの如きことあらば世界に取りては不幸なることなるべし勿論完全なる宗教にありては美の好尚と關係するところ淺からざるなり。そも美の好尚は尤も自然に尤も尋常に想像の發現せる者なり而して既に云へるが如く想像は人間をして神靈の顯在を直觀するを得しむる力と同一物なり即ち零碎片々たる世界の雜多なる現象を渾融鑄成して一箇の大威權ある神影をつくり出すものは想像に外ならず。ダーギンの場合は單に宗教心鈍くなれりきといふのみなれども世には宗教心の全く價值なき證據を事實上に認め得たりと思ふ人もあるべし此等の人々は宗教を以て迷信となし科學が悉く此の領分を便奪し盡せりと思へるが如し。又奈何なる境界にありても觀美の好尚を滅却するは直に是れ實際上の損失なりといふ事實を認識せざる一部少數の人あるを免れず。美を樂むことは人間の靈魂の正當なる働きの一部にして之れを棄つるは人生の圓滿を破る所以なるを知らざるもの甚なからず。ダーギンが美の悅樂を失ひしと共に相連關して宗教上の信仰滅却せりきと云ふ事實が吾人が宗教心の衰弱は直に實際生活の利益の損耗なりと云ふことを覺らしむる

のみならず宗教的感想も亦人心に缺くべからざる一箇の活動なるを知らしむるに足るべし。

神と云へる思想を中心として吾人が至高の諸理想をその上に調和一統するの趣あり蓋し吾人は宇宙に神靈顯在の一端を窺ふことを得と雖も單に一端に過ぎずこの一端を捕へて理想をその上に携ふれば竟に神に達するなり。天文學者は望遠鏡を以て天を至らぬ限なく見渡すと雖も竟に神を見ずといふ遣はさもあるべきことなり唯靈妙なる能力のみひとり之れを見ることを得すなほち想像のみ吾人をして神の存在を知るを得しむ想像は是れ心の眼なり心的諸能力の至高至妙なるものなり。吾人は恰も世界の表面を想像に依りて觀取するが如く亦想像に依りて神を觀ずといふて可なり。宗教は信仰せられたる一箇の詩たるは猶世界が信仰せられたる一箇の詩たること選むどころなし而して詩の眞なるものはあらゆる他の萬物より更に眞なるものなり。想像は最初には開鑿者の役廻りをなすに次いで詩人の地位に立ち終に先見家、豫言者、宗教家たる趣ありといふべし。吾人の諸官能は單に錯雜したる感覺を與ふるのみ理解力は唯生命なく統一なき斷片

としての知識を與ふるに過ぎずひとり想像力のみは宇宙の全體を示しことを直に神靈の面影として觀ずるを得しむ。

架述してこゝに至れば吾人は想像論の終を告げざるべからず今まで説けるところにて畧ぼ想像が實際社會に影響するもの尠少にあらざる所以を知り得べし。想像が實際上の効用果して前に續陳せるか如しとすれば教育の完備を願ふもの

想像が特に人心の修練開發上淺からざる誘掖をなす所以を研究せざるべからず蓋し科學上の修養は大切なれども此れのみにては不完全なるを免かれざればなり。想像が教育界に科學以外の方面より大に援助するのみにあらず先きにも屢々云へる如く科學の進歩にも非常の裨益を與ふ強ひて云へば科學の領内殆ど想像の備加ざる所なきの趣あり。科學上の發明を爲すには想像の力をからざるべからず、はた其の發明せる理を領得するにも想像に訴ふる所なかるべからず。科學上種々の發明たるや始め發明家の上にあはるゝ際には詩の形をもて出で來たるも雖も一旦發明が成されて世人また之れに同ずる時は一箇の定論として非詩的のものとなる。是れに依りて吾人は想像の効用の更に明且大なるを見るの

まよふこゝに
たゞ想像のみ

思ひあり。想像が幾多の發達をなす由はすでに云へる如くなるが若し想像にして此等の至要なる發達を棄つることあらんか直接に想像に依頼する美術宗教などいへる諸眞理は爲に明確なる能はざるに至らん或は遂に消滅するもあらん尙こゝに止まらずして科學の進歩を促す大動機も爲に破却せらるべし。吾人がこれまで比較討究し來れる跡に就ひて或は現今の科學上の研究法ならびにそが結果に論及するところ甚だ多からず隨うて此の方面に對して頗る冷淡なりと思ふ人もあるべし。然れども吾人をもて科學の研究に冷淡なるが如く思ふは吾人が言を誤解せるものならざるべからず此の點に就き今結論するに當たり少しく辨するところあるべし。現在に於て尤も吾人が尊崇するものは何ぞと問ふものあらば躊躇なく科學的研鑽の精神なりと答ふべし而して科學が發揮し來るところの眞理には喜んで同意を表せんとす。然りと雖も科學上の研究法およびそが結果は宇宙の眞理を曲盡するに足ると云ふものあらんか吾人は之れを難じて科學の立脚地は借物なり獨立にあらずと云ふを憚らじ又そが限界の甚だ狭きを指摘せざるを得ず而して宇宙を大觀せんとすれば靈魂に依頼せざるべからずと云は

ん詳言すれば信仰を有し理想を有し熱情を有しはた造化の創成力と類を同うする創成力を有する靈魂に訴ふるの他に宇宙を大觀するの道なし。現今、科學社會を代表するに足るといふ程の人物にして科學の版圖よりも更に擴大なる或實在の存するを承認せざるもの殆どなし勿論承認するに斷乎としてその意を表するも多少あたり見がちに首肯するとの別はあり。換言すれば科學の大家は概ね科學界以外に或想像の世界の存在を承認せざるものなきなり。ハアバアト、スベンサルは可知の世界は不可知の世界に包含せられ對待は絶對の中に浮べりと觀じき。スベンサルが此の世界觀は如何にして得たりしものぞ其の不可知界その絶對どもに是れ五官の能く知らしめ得べき境のものにあらず唯ひとり想像の力氏をして之れを洞察するを得しめたらん。スベンサルは想像に充分の信任を置きその力に依頼して此の狭き實在界以外にひろがる無限の世界を造らしめき勿論氏は想像の働きをこの上に出づることを許さず。されば其の絶對不可知の大世界には毫も形狀色彩をもて擬することを爲さざりき全く無邊際の暗黒に止め置けり若し一點星を加ふるとあるも氏は之れを信ずること能はざる

がゆゑに之れを排斥せるなり。スペインナルは斯く現實界以上の大部面に向つては想像に信任を置きながら何故に氏は之れよりは小なる場合に於て想像を信憑せざりしやは解し得ず。

狭義に所謂科學的研究の結果以外のあらゆるものを若し科學者等が否認するとあらば吾人は想像の翼を断ちてそが翺翔を禁ぜざるべからざるか科學の進歩を阻礙するも尙その説に服せざるべからざるか。唯ひとへに科學に依頼しそが剖析の結果この生氣あふるる宇宙を冷なる原素に碎き去れるを見て忍ばざるべからざるか吾人は科學が此のうるはしき世界を打破せるの趣あるを歎ぜざるべからざるか。否然らず寧ろ吾人は科學がそが本分を盡くすに於て勢ひ志からざるべからざるを知れば之れに對して憾みとする所なし。唯一方に於て想像を驅りてそが特有の創造兼判斷の力を充分に用ひしめざるべからず想像はあのれの活氣を移して剖析の結果冷になれる原素をして生命ある者とならしめ得べし。ラスキンは畫家が解剖學を知るは宜しからず何となれば骸骨など研究したる結果は畫家をして奥に入つて人物をうるはしく書くことを妨ぐべければと信ぜりき。

按ずるにこれ恐らくは杞憂に過ぎし若し解剖學の知識殆ど我が心と融和一體となる程に熟し且この知識を自由に役して而も之れが爲に縛されざる程に想像の力強大ならんには美と眞と兼ね備はれる畫を得べし。是れに由て之れを觀るに想像は科學上の研究にて得たる結果を自在に用ふされば尤も想像とは相容れざるが如く見ゆる此の科學が莫大の利益を想像の領分に與へたりとも謂ひつべし。科學熾んにして詩歌の領分日々之れが爲に蠶食せらるゝが如く思ふは淺薄の見なり機械ます／＼發達して天才活動の餘地日々に縮小するを歎ずるは皮相の考に過ぎず想像はよく科學を包容して己れが用となし天才は機械を驅使して更にその超凡の技倆を發揮すると難からず。小供が細き笛を弄ひて面白き音色を吹き出たすは頗る趣味あるもの也然るに樂器製造家出で一切機械づくめに俗了し竟に樂器の構造宏大を極むるものに至ては或は蒸氣力に依りて運轉するが如きもの必ずしもなきにあらざ一見せるところ豈に殺風景の極なりと思はざるを得んや。吾人は鳥渡考へたるところにては彼の小兒が吹きて樂む面白き笛の音はかゝる機械の爲に壓倒せられたるを歎ずるなるべし。然れども眞の音樂家

出で来たりて其の技倆を試みざる間は笛と新樂器との交換の得失は之れを俄に
斷ずべからず。詩人も亦歎ずるならん科學は萬象森然、靈あり生命ある大宇宙を
一變して一箇の冷硬なる機械となせり是れ何たる没趣味のことぞと。されども
輕忽にかゝる斷案をば下すべからず大詩才の出づるまで徐ろに之れを待て或は
その冷硬なる機械を驅使して靈動至妙の一大詩篇と化しせしめんも未だ必ずし
も豫期すべからざるにあらず。

第二章 詩論

第二節 詩の原理

前節にて論じたるが如く想像は殆ど人生の全部にその影響を及ぼすと雖も特に
美術の版圖に於ては何人も能くそが活動を認め得るなり蓋しそが此の個分に發
顯するや尤も明著なるものあればなり。詩は美術の中にて最も大なるものと云
ひ得ずとするも最も多趣味のものとは取て云ふを得べし。詩に於てはそが傑作
を殆ど一般の人が蓄へ置くことを得べし先づこの點に於て詩が他の美術に優ま
るところあり。ラファエールが畫ミカエル、アンゼローが彫刻を見んと欲せば吾人

は遠く他國に旅行せざれば能はず然るにホーマー、シエークスピア等が傑作は坐
しながら之れに接するを得。非常に雜多なる材料を用ふるの點に於ても他の美
術は詩に及ぶものなし斯く材料豊富なれば隨うて之れに與へられたる從來幾多
の定義も殆ど吾人を満足せしむるほどに精確なるものなきも怪むに足らず。英
國の學者間に詩の定義として常に反覆引用せらるゝは「感情もしくは想像の律格
に適へる言葉なり」といふ語なり。此の定義はオレール、ハヅリットに依りて與へ
られたるものなれども之れを以て未だ眞に詩の定義とはなすべからざるや明け
し何となれば一見直に調和を缺き破綻蔽はれかねたる痕の歴々たるにても知ら
るべし。按ずるに右の定義には想像の詩及び感情の詩といふ二種のものを含め
り而も二者の間を統一するものなし唯律格を具ふるといふことのみ緩かに二者
を繋ぐ趣あれども這は充分に調和の媒たるに堪ふるものにあらず。
「都て詩は模倣なり」と殆ど斷言せんと欲したるものはアリストートルなり而も氏
はこれを當時の諺なりとして用ひたる所もあれば直に氏が説斯くの如しといふ
べからずされど之れに近しと斷ずるは妨げなからん。然るにミルトンは詩は昂

がれる情を表はすものならざるべからずと主張す、その言に曰はく、詩は簡淨ならざるべからず活現ならざるべからず熾情の發展ならざるべからずと。ミルトンが定義は頗る穩當にして感すべきものあり吾人は此の定義の前二箇條をば他の場合に於て用ふること或は是れあらんも今は唯第三の熾情の發展といへるを主として説くところあらんとす。ミルトンが主張するところアリストートルに關係ある前の説とは極めて見易き相違の點あり、されば二者の對照いと著し前者は詩をして情熱の塊となさんと欲し後者は詩をして模倣たらしめんと欲す。模倣もし現實に於ける一定の或ものを材料としてそが以外に一步も出づる能はずとすれば是れ非實の部分を含めるもの而して情熱の所産却て實を合むところ多しと云ふべし。吾人は茲に模倣に依りて詩を成すの説と情熱の發展を詩なりといふ説とを有す、此の二者は果して全く相背くものか、はた調和し得るものか、更に譬ふるところなかるべからず。最初に掲げたる詩の定義には想像および感情の言葉なる文字ありて文の容易に相合し難き此の二つのものを漫に並立せしめたりしが今上に云へる模倣と情熱と云ふもの恰も彼れに應ずる反對の二原素なるが

如し。

吾人は上に二つの定義を掲げて聊か述ぶるところありし所以は二者ともに取るべきところあればなり。此の二定義を更だ説明し若し調和し得べきものならんには之れを調和せしめんとす。

詩を論ずるもの往々之れを全く一箇獨立のもの、細く看做すの趣あれども決して然らず詩は美術の一部に外ならず。唯他の美術と異るところは材料の性質即ち繪畫の絹楮、彫刻の金石とは異にして之れを言語に採るところにあり又此の言語に依りて表はすところのもの他美術と同じからざる者あるのみ。詩は美術の一に分たるのみならず美術もまた最高地に立つものにあらず等しく這も亦他の一分なり即ち宇宙の美は雑多の形體に宿りて發現するものなるが美術は此の形體のたゞ一つなり。されば吾人は詩を論ずる前に先づ一般に自然界の美を研究し取少わけ美術の美を稽査して此等の中より原理を發見し之れを詩に應用し得るの地を成さざるべからず。かるが故に吾人は詩論の基礎をつくるが爲に暫く問題外のところに論及せざるを得ず。吾人がこの美の原理を説くもの此の章の多

分を占むるが如きことなき能はず蓋し原理にして一度立たば之れを時に適用するは極めて容易にきはめて簡短にて事足るべければなり。

先づ第一に美に普通なる原理を立てざるべからず而して美の第一原理を定むるは是れ直にその内容に關係を及ぼすところあり。換言すれば吾人が美なりと呼ぶところのものは果して奈何なる性質のものあるやを吟味せざるべからず。

都て事物が明晰に吾人の前に現れ來たる時には美なり此の點より見れば寫實主義の云ふところ正しされど此の世界を通觀するに眞に明晰にその形を露はすも實に少數に止まる。こゝに或一物ありと假定せよ這は全く他の物と無關係にて存在することは甚だ稀なり故にその關係する他の物の爲に幾分かそれが本來の真相を蔽はれ又は損傷せられ或は壓縮せられ或は捻ぢゆがらるゝことあるべし。かゝるが故に實在物の眞の有様を明晰に寫さんとする寫實主義の人も自家の立脚地を正しく守るの結果其の實をいへば知らず理想主義の領分に踏み込まんとするに至るべし。是れに由て之れを觀ればプラトニーの所謂理想の表はれたるものの中に美存すとの説は頗る卓見なりと云ふを得べし。更に一層普通の語

をもて云へば美は理想の表彰せられたるもの極致の發現せるものなりと云ひ得べし。

美は理想の表彰せられたるものなりとの理は之れを音樂が人を恍惚たらしむること依りて説明するを得べし吾人は音樂を聞くの際は是れ理想の音を樂むものと云うて可なり。斯かる美妙の響に尋常の場合に於ては風や水や草や木やその他の物の偶然の關係的作用より偶然に起ることあるに過ぎず多くの場合は單に或響を成すのみに止まる。音樂の場合には諸和微美の音を得んとして樂器の備へあり樂器は音の法則に従ひて稀有なるものをして隨意に不斷に發せしむるものなり。されば音樂は響を變じて調子ある音を成すもの而して此の調子ある音これ理想の聲なり。吾人がこゝに理想の聲といふの意は外ならず調子ある音の場合に於ては聲の源なる空氣の波動が連續を成し得るやうに屬せらるゝを以てなり若し又同時に異なる多數の波動を起す時には此等は複雑なれども而も井然統一せられ一箇の諧音の洋々たるを聞くを以てなり蓋し二者いづれの場合にてもそれが結果はつねに統一といふことに歸す即ち前者にては同じ調子の音の

連続に於ける統一なり後者にては連続を保てる數多の音の結合に於ける統一に外ならず。聲は單に響たるに止まる場合には連続を缺き統一を缺き全く不調和にして且零碎片々たるものたるべし。都て人をして深く其の事物の特質を感銘せしめんとすれば必ずや或統一せる形式を具ふるは必要缺くべからざるものなり。かるが故に人心は統一せる形式を具へたる音樂の調子によりて始めて聲と深く關係するところあるを得べきなり隨うて彼の断片の響には吾人は耳を傾けて聞くこといと稀なり。吾人がこゝにて云へるは勿論單に音樂の物質的原素(音色調子など)都て直接に耳を喜ばすものより來たる満足に關してのみなり此の物質的原素に緣りて表はさるゝところの理想に就いては今は暫く云はじ。右の音樂の例に依りて常に唱へらるゝ美の特質は變化の中に統一あることなりと云ふ説の意味を解すること難からじ。單に變化の中に統一ある知覺が美の感と與ふるものにあらずされども若し變化を缺けば奈何なる物質も竟に何等の感覺をも吾人に與ふること能はず又數多の原素統一せられて一團となれる反應を起すにあらざるよりは吾人は其等の事物の特質を感銘すること能はず。例へ

ばあらゆる美に變化の中の統一なかるべからざるは地球の兩極を知るに磁石を要するが如し磁石なければ兩極は知るに易からず變化と統一とは美を感ぜしむる基礎として決してなかるべからざるもの而も重に美を現するの準備なり美を感ぜしむるの媒介なりとしてのみ價值あり。

有機物世界の美は充分に活氣の現れたる所にあり言葉を換へて云へば尤も能く生氣の見えたるものが尤も美なるものと認めらる。されば活氣のおぼるにのみ認めらるゝものは醜と看做されざるを得ず。ソレア曾て「吾人は鹿を屠りつくして之れに代ふるに豚をもてすと云ひて歎息せるとありしが此の場合に於ては美の醜と對するが如く鹿と豚と照織せらるゝを看る二者は吾人が今述べんとする問題の説明を資くるに足るものあり。野猪はその性たけくその状も亦畫趣あり然るに肥たる家豚には此の畫趣を缺く吾人は豚をもて痴愚なる狀貌を具へたるものと做す所以は肥滿の肉體が活氣を埋没し去りておぼろげにしたるを以てにあらずや。吾人の目より見れば豚は殆ど活動ある有機體と云はんよりは寧ろ小児が戯れに造る小刀細工の木偶に似て殆ど生氣を認め得ざるの趣あり胴は桶の

如く屍は臼の如くその頭も亦不恰好にふくれあがりて目や口も殆ど爲めに活動の氣を現らはすに足らざるの風あり。其の狀貌に現るゝ所のものは動物とは云ひ得ざるが如きものあり唯著く見ゆるものは食をむさぼる肉慾の熾んなるところのみ。此の肉慾も我々の方より解釋してかく云ふのみ豚みづからに取りては殆ど機械的に食をあさるのみなるべし。之れに反して鹿はいろくの點に於て活氣充分に現れるならずやそが體格の組織なども都て機械的ならず細工物めけるところなし。この場合に於ては造化の創造に成るの趣著く全軀をして靈動せしむる生命活氣躍々として溢るゝを見るなり。

活氣の横溢する點に於ても人軀はあらゆる他の物より完全に近く隨うて美なるの點に於ても他に遠く優さるものあり。四足動物の立つや機械的作用に支へらるゝところ多し、されば馬の如きは直立して睡ること猶横臥してねむると毫も異なるところを見ず。人間に至りては大に其の趣を異にし機械的作用に依りて立つよりも寧ろ活力ライヴネスに頼りて立つなり。全身の筋肉悉く働いて始めてそが體の權衡を程よく保ち得るが如く人間直立の場合にはその趣、他の四足動物などに比して

遙に微妙なるを見るべし。

通常の場合には見にくき動物も時としては吾人をして其の美に駭かしむることあり。麩鼠カザネを見る毎に我等はその形を不恰好不釣合なりと思はざるを得ず然るにそが驚ける際などは恰も鹿を見るが如くうるはしく見ゆることあり、そが頭及び耳なども活動の趣を顯はし姿勢も至極釣合よく見ゆる也。水師提督ボルタアの言に依るにリンホルン氏が或時非常に情を昂めしことありしが其の際に彼れが容貌著く高雅を加へきとなり。此等の或は情激し或は驚駭するが如き場合には新たなる活氣の注入し來たるありて體の全面に透徹しもろくの部分に發露するが故に一層美に見ゆるに外ならざるなり。

個々の物體に於ける活氣及び生命の美を成ずるに大切なるは既に之れを云へるが更に重要なるは全軀の生命活氣これなり。自然はあらゆる個々の存在物の背景バックグラウンドと成りて此等の四圍にあらはるゝのみならず此等個々物の中に發現することあり。自然の諸勢力が眞によくあらはれし時には常に吾人に美感を與ふされば時としては彼れ是れ相異なる數種の美の間に衝突を起すこともあるべし然り而

して自然の諸勢力たるやそが結果に依りて始めて認めらるゝ也。風及び波の活動は有機體的圓滿を破りたるところに生ずかるが故に不圓滿は往々圓滿より一層美なることありと云ひ得るなり、自然の美はすべて之れと對抗して立つ物が超然として餘りにそれと不調和なれば爲に破らるゝに至るべし。是れに由て之れを觀れば屢唱へらるゝ美は完全なるものゝ上にあらはると云ふ説は場合によりては適宜に動かさるゝところありと知るべし。破壁斷柱、蘿月荒涼の趣は寧ろ大厦新に成りて輪奐の美目を驚かす完全なる構造よりも更に美なるものあり。思ふに廢墟はすでに自然界と融和してそが一分となれるもの故に著くそこに美として見らるべき趣そなはる吾人が石造の巍然たる家屋よりも自然木の柱、藁葺の田舎家を更に雅致あり風韻ありと見るも此の自然に近寄るをめづるに外ならず。築山の石に苔むせる金燈籠の錆たるなど喜ぶも皆この心に外ならず。吾人もし廢墟を訪ふことあらば其所には自然に對抗して屹立自主の勢を張れりし昔の建築崩壊し造化と力を競ひたる往時の傲然たる面影消えうせたるを見ん。されば纒かに過ぎし世の名匠が技術の妙をしのばしむる希臘羅馬の廢寺古城の殘礎斷

柱あるはかたばかり立てる弓狀門などはそのむかし新築の當時よりも美の感を一ひくもの深し蓋しこの場合にては吾人はもはや古き人工を見ると云はんよりは直に自然を見るといふべし。さすれば粗樸のものが却て彫琢刻鏤せるものにも増して人を悦ばしむるとあるの理も覺り得べしはた榭榭參差たるものが平明滑腴のものよりも詩趣あり雅致ありとの理由も察するに難からじ。航海に適するやうに巧みに造られたる風帆船はその趣殆ど風濤を意のままに支配せんとするが如く見ゆ恰も波濤と對抗せんとするものに似たり語を換へて云へば全く異類の或者來りて波濤を壓倒しはた之れを制御せんとするの趣なき能はず。之れに反してデนมアルクの船は航海者の見地よりすれば尤も拙劣を極め殆ど桶に乗るほどの不便なるものなれども畫趣あるの點より云へば艦の鋭く彎形をなせる進歩せる風帆船の到底及ぶべきものにあらず。此等の例に依りて譬ふるに事物が自然と調和し自然と融合して自然の勢力をあらはす一部分となるに當たりてや其所に美の成立つ理はいとよく知らる。さればその物のみ引き離して見る時には看ぐるしく恐ろしきものにて自然の環象に對して調和する場合には美と

觀ぜらるゝことあり例へば熱帯地方の森林などにて長蛇が樹の枝にかゝるさまなど一種の景美を成すの要素となることあり又脚を煙管のむさぐろしき百姓なども遙に見ゆる富士の遠景そこらあたりの麥綠菜黄是れ彼れ一眸となして眺むる時には其のむさきもの却て美の要素と變ずるなり故に醜も自然と融合して美と化すを得べしと云ふて可也。

上に述べたる音、色、形などの美の頂上に戴かるべきものは精神の美なり。精神の世界は前に云へるものに比し全く新版圖を吾人の前に開けるの趣あり、されども自然界(こゝにては山水などの狹義の自然なり)及び活物界(こゝは動物などを重に形體の方面より見たる意なり)に於て吾人の心を動かせしと其の關係は同一なれども唯此の關係が更に一段高き地にて行はるゝのみ。自然界及び活物界に於けると同様に精神界にも等しく陰霽あり晴雨あり温雅あり奇峭あり。精神界の一面として情感の境ありこゝの變化多きは決して自然、活物、雨界の多趣に譲らざるのみならず大に優さるところあり悲喜哀歡の交、去來する驟雲覆雨、冷熱忽ち地を易ふるなど中々に端倪し易からぬもの多しと知るべし。

情感の境の上に思想の世界あり這はこれのみをひき離しては美とならず所謂思想なるものは雑多の事物より抽象して得來たれるもの之れをして美たらしむるには形象を藉りて活現せしめざるべからず。他言もて之れを云へば通例用ふる言葉にて所謂觀念の境地あり之れを美の領分に入らしめんには何等かの方法に依りて美的變形を施さざるべからず即ちミルトンの所謂靈活にして手もて觸れ得べきが如きものたらしめざるべからず。

吾人は上來美が依りてもて發揮せらるべき原素を指摘せり而して此等の原素は自然、活物及び精神の三版圖に遍在するものなるを見たり且又この美の要原と相對して少くも幾分か美なるものと美ならざるものとの別を立つるの標準を得たりといふべし。その原由の何たるを問はず他の壓迫を受け他の妨礙を蒙むるとこの物體は美ならずといへる原則を得たるにあらざるや若し活物が美として現ぜられんとするには自由圓滿の域に入らざるべからず又精神界の美を發揮するには獸心的の所はた缺陷の邊の挿入を許すべからず若し此等の不完全の點を現すことあらばそれは或標準に憑據し對照に依りて愈々完全なるものを明にするが爲

たらざるべからず。

上に述べたるところは是れ吾人が宇宙の森羅万象の美を律する原理を解きたるものなり若し宇宙を靜に大觀するを得べくんば宇宙その者の美を律することも此の原理に依りて爲し得べし。此の原理はその應用に至りても美その者と同様に微妙にして且普通のなり。この原理は實驗が示す如く美の原理よりも寧ろ美が依りて成立つを得る種々の條件の説明なりと云ふ方正當なるべし。

吾人は更に一步を進め依りても美が成立つを得る條件以上に超出し此等の條件の下に美の快感を生じ來たるところの外界と我れとの間に於ける心的關係奈何を問ふに至りては吾人は我々を圍む此の世界と殆ど同一躰たりと云はざるべからず蓋し自由の境界に處しては自由を感じ地球の生活の中に生活を爲しおれはなり。

美はもし理想の表彰なりとすれば這は單に靜觀 (It is for contemplation alone) せしむる爲の表彰なりと云はざるべからず。美は靜觀以外に出づ可らずとは見識を具へたる學者等の殆ど異論なきところなり。果して美は單に靜觀すべきものとす

れば都て他に目的あるべからずはた他に利用すべきものにあらず美は美みづからの爲に存在するの價値ありと云ふべし。吾人は美の内容は理想の表彰なりと論じたるの結果、自然に美の形式に及び美は靜觀に止まらざるべからずと云へり、蓋し内容は形式と聯關密にして之れを叩けばおのづから彼れに響かざれば止まざるものなればなり。

されば美は他に目的あるにあらずして美その者みづからの上に目的存す故に美はそが自足圓滿なるところやがて宇宙の圓滿を縮寫せる面影ありと云ひ得べし。若し事物が單に他の目的の爲に用ふる手段なり道具なりとして目さるゝ間は竟に美となると能はず勿論等しく手段なり道具なりとは云へ更に深大の美を發揮する準備として用ひらるゝものは例外なり這は美の要素となるものなれば。軌道の上を疾驅する蒸氣機關を見る時にはそが迅速にして勢の強大なるところ美なりと思ふことありされど斯く美とする場合は決して之れを運搬に供する實用の機械なり手段なりとして見るにあらず單に偉大なる勢力の一物躰として眺むるのみ。されば美は實質的性質を超越するものなり試に思へ物質世界にありて

はあらゆるものは皆原動及び反動の關係に束縛せらるゝを免れず是れ特に物質界に於ける殊相ならずや。吾人は事物に就いて一面それが究極の原因(目的)なるものあるを認め他面に於て現實の原因なるもの、存するを知る、例へば桃の木の發育する究極の原因はそれが實を結ぶことにありて現實の原因は之れが要する地中の滋養分および日光などの供給宜しきを得るにあり。後者なる現實的因果の關係は是れ吾人に物理の世界を與ふるもの前者なる究極的因果の關係即ち希望又は目的はこれ吾人に生命の世界を與ふるもの、更に高き着眼點より云へば宗教及び哲學の世界を與ふるものなりとも云ひつべし。然るに美のみは上に掲げたる二種の關係を超越して其の支配を受けず是れ吾人が美をもて非實質的なりと云ふ所以なり美は充分精確には名狀し得べきものにあらずと雖も一種の靈光として世界に瀰瀰するものなりとも云ふを得べし。

吾人は前節にて一般に美とは奈何なるものなりやの問題に極めて概略極めて漠然ながらも答へたりと信ず是れよりは一步を進めて美の一部體として美術に關し替ふるところあらんとす。吾人は此の美術論に入るに先立ち美術の二體なる

再現的美術と直現的美術との差別を明にせざるべからず。再現的美術の尤も著きものは繪畫彫刻にして直現的美術の中に建築及び音樂などを含まるゝと知るべし。勿論建築はその各部分の細かなるところは再現的なり又音樂も稀れに再現的となり摸擬的となることあれば一概には論じ難けれど本來は如斯し。

繪畫彫刻などの創作にありては自然をその儘に利用するにあらず一度美術家の心に收め之れを美化醇化し若干の變形を爲し全く異なる材を藉りて再び現じ來たるものなり故に再現的美術は自然界と對立して相下らず。音樂及び建築製作物に至りては直に自然界に立脚地を求む詳言すれば音樂の聲調、家屋殿堂の素材は自然の物をその儘に用ふ。されば再現的美術の方は現實を離れたる或形象を含むが故に虚實二元より成れども直現的美術は風の音、森林の莊嚴などいふものとその性質を同うするが故に單純なり。吾人が今こゝに詳論せんとするものは再現的美術の方のみなりと知るべし。

美術品を一方より市價を有する一個の貨物として看ると他方より之れを再現的性質の方面即ち美術の本領より看るとの區別を立てざるべからずと云ふ論あれ

ども按ずるに美術の性質を大躰より見來たる時には斯かる議論は竟に無用なるを知ることを難からじ。勿論美術に市價あるが故に俗客も之れを得るを欲し又之れを得て他に誇る所以なれども這は美術の眞價とは全く同じからず。美術と雖も吾人が初め瞥見の當時は之れを尋常の物品と同視せざること能はず而して觀者も亦通俗の私見をもて之れに對せざること難し。さりながら斯かる見やうは是れ美術の美術たるところを觀じ得たるものにあらず換言すればそれが再現的眞價を窺ひ得たるものにあらず。眞に美術を樂むの三昧地は純然たる靜觀の境界ならざるべからず都て私慾の考を脱離しあらゆる衝動の念の起らざること必要す。

再現的美術の眞價値は姑く措き往々起こり得べき且二の町に位する効用に就いて少しく注意するところなかるべからず。蓋し此の附屬的働きの中に美術が自然に對して奈何の位地にあるかを明にするに足るものあれば吾人は聊かこゝに之れを説明するの要あり。美術は此の片手業なる働きの第一歩に於て自然と同列に立ち自然に於て吾人が見るところのものを更に自然よりも圓滿に做遂ぐる

なり。吾人が既に云へるが如く美は一個獨立して而も統一を保てるものならざるべからず他言もて之れを云へば自足圓滿ならざるべからず。されば美といはるべきものは其の者みづからが完全せる状態を具足せりと見ゆるを要す然るに自然界に於ては此の完全の状態に達するはいと稀れにしてはた困難を極む。例へば山水の景色に就いて云はんか種々の山嶽丘陵又は森林湖河亂雜に配列され亂雜に聯絡す而して遠近互に相關係して殆どその際涯するところを見ざるもの多し。今畫工が形管を捉りて描くに當りてや一箇の圓躰として他の關係より之れを切り放ち而して實際の場合にては此所かしこに散在せる一水一山喬松怪巖をば畫趣あるやうに凝聚しはた配置の轉換を爲すことを得べし。かるが故に美術は自然の場合に於ては稀にのみある所の圓滿なるものを不斷に造り出だす者なりとも云ひつべし。畫家は種々なる場合種々なる物に於ける最も美なるところを拮據し來たりて之れを一箇理想の形狀に結び合はするを得べし。彫刻家の創作の如きも實際の世間には常に免れ難き缺點を拭ひ去るところにそが命脈懸るなり。されど上來掲げたる事柄は都て未だもて美術の本領を指摘し得たるも

のにあらす何となれば前に擧げたるものは往々自然みづから之れを倣
 遂ぐる事あるべければなり。美術家が想像を役して造り出でたるものと雖も
 之れを凌駕し得ざる絶美の景色實際に於てなきにあらず。又人物の容貌態度の
 如きも毫も他の美所を移して補ふべき缺點あることなく直に美術家の前に標本
 としてあらはれ得るものなきにあらず。若し美術は單に自然の不完全なること
 ろを填充して完全にし自然が圓滿に成就し得たるものをば之れを永遠に保存す
 るのみが本分なりとすれば是れ美術は自然の奴隸たるにあらずと云ふを得んや。
 山水畫の妙味は實際の山水に對して得難きものあるは少しく思慮ある人の能く
 知る所ならん而して此の山水畫特有の妙味は前陳の説明にては未だ解釋し得べ
 きに非ず。吾人が山水畫に特有の妙味ありといふは決して實際の山水よりも趣
 味多しとの意にあらざ畫の方その分量より云はれ劣ることもあるべし唯吾人は
 美術は自然以上の或妙味あるを疑はず此問題は更に絮説するの要あり。
 再現的美術が附屬として有する力は吾人をして美術家の眼を藉りて萬象を見る
 を得しむるにあり詳言すれば美術家の眼には萬象は現實と異なる一種の異彩を帶

びて現じ來たる吾人は美術に對して此の玄妙なる觀察眼を得るなり。此の點決
 して輕々觀過すべからざるものなり這は吾人が今まで遺漏したるところ而も美
 術が人をひきつける特有の魔力なり。吾人は畫は美術家の眼に映じたる自然を
 あらはせしもの復言すれば美術家の眼を借りて萬象を覗ふの道なりと云へり。
 然らば美術家が美術を見る時には平準に復して常人が自然を直に見ると異ると
 ころなきにあらざるか即ち美術家自らには美術は美術たる勢力を失ふべきかと
 の疑ひ起ころべし。奈何に詩眼高く感納性鋭き美術家にては優れたる繪畫に對
 すれば自然の風景に接して得來たる感よりは一種異なる愉快を感ずべし。思ふに
 美術家が眞に美術製作の力なるものは或意味にては常住不斷のものにあらず故
 に美術家と雖も繪畫に對しては自然以上のものを見ざること能はず此の場合に
 於ては畫の方に仔細なくして觀者なる美術家の方に超凡の位地にあがるいと瞬
 間なりといふ理由あるなり。
 繪畫が與ふるところの快感を單に美術家の技藝の熟練を歎稱するに因ると解釋
 するは未だ至らざるの説なり。美術の悦樂を如斯く作家の技藝の妙を歎美する

より起こると爲すものは是れ正しく美術をもて手品などの遊藝と同列に衝き落とすものなり。吾人は都て天才の手に成れるものに接する時には其が技藝上の熟練の跡を認識して一種の愉快を感ぜざるにあらず、されど這は美術が吾人に與ふる快感の中にては第二等に位するものたるを忘るべからず。吾人もし美術上の創作に對しそが本來の美よりも技術の熟練を感ずること深からんか美術が正當に與ふべき効果はよし全分を失はざるまでも頗る多分は爲に失はるゝに至るべし。

再現的美術品が特に吾人に與ふる妙味の性質奈何の問題を再び提起して論ずるの必要あり、此の妙味たるや再現的美術品獨得の性質に由來するものなれば其の根源は明にそが再現的特質に存せざるべからず。再現的美術品は一旦天才の心に沈みて再び神興に乗じてあらはれ出でたるもの現實その者とは自ら異なればそが微妙の味も亦他の匹儔なきところのものなり。何故に如斯きかとの問題は少しく考慮を費す時にはそが理由を得て解釋するに難からじ。吾人は既に美に美は單に靜觀すべきものなりと云ふことを説けり此の靜觀の境界に異如たるが

故に美なるものは現在及び未來の因果律の大牢獄を脱却し得るの理も前に既に云へりき。されば靜觀の地に立ちて美を樂むもの即ち美の本領より美を觀ずる者はその間は暫らく争鬭、欲望、煩悶の俗世界を超絶し唯靜觀の悅樂に恍惚として立つなり。さて現實の世界に於ては一面、美の力に依り一面、抽象の力に依り始めて成るところのものを美術の形に於ける場合は美術家が之れを爲すなり。此所に形といへるは實質と相分ちて之れに對せしむるものと知るべし。例へば陽炎の春の野に見ゆるが如く見えざるが如く立ちのぼるは正しく一種の美なり都て美は殆ど此の陽炎の如く萬象の周圍にまぼろに漂ふ吾人は之れを其のままに眺めて樂むべきのみ其の實質の奈何は之れを問ふを用ひず。美を樂むものは唯美を觀じて樂まざるべからず唯觀ずるをもて足れりとせざるべからず。美を觀ずるの境界には我れといふ考あるべきものにあらざり隨うて我に益あり害ありなどの思想の侵入を許さずされば又美を宿せる物に對し欲求も希望も嫌惡も恐怖も起こることなきなり。斯く全く利己の心を離れ物欲の念を去りて眞に美を樂むの境界に入るは實に易々たり若し普通の觀美識を具ふるものならば其の境に入

るは殆ど必然避くべからずといふも可なり。上述の理論を實例にて證するを得べし吾人は繪畫陳列場などに入りて戶外に出でたる瞬間は殆ど四方の景色を現實のものと思はれざるが如き感想あるの事實を知らずや。是れ美術の境と現實界との岐頭なり又雲烟縹緲の遠山また暮色蒼然たる孤村漁火明滅たる浦景色などすべて畫趣を具ふるものなれど吾人はその風光を靜に眺むるうち自然に現實の感想に墮落してありのまゝなる俗世界の中に歩することゝなるなり。

美術と自然との異なる點は右の俗想到墮落せしむると否とを以ては未だ充分に明ならずと云ひ得べし。眞に美術家たり詩人たらん者は自然の美に對して我れ知らず靜觀を縱にするを得べく隨うて靜觀を倣遂ぐる爲に美術の助力を仰ぐの要なからんと主張するを得べし。實に然り是れのみにては未だ自然と美術の効果を甄別することかたし。されど二者の異なる點は他にあり自然の美を樂むの際には瞬間現實なることを忘るゝに過ぎされども美術に對しては非實の意識を胸底に藏する是れ彼此の差別とす。美の本領の一部として吾人は手に取らんと

して取り得ざる微妙の原素は竟に現實の世界には求むべからざるを知る。

既に述べたる概略の説明に依りて繪畫および彫刻の完全なるものは果して奈何の性質を具ふべきやといふ問題を幾分か解くことを得べし。此等のものはそれが再現せる原物の僅に一面をあらはし依りてもて其の非實模寫の性質を明にし決して錯誤の誤なからしむ。さればこそあれ彫刻は彩色を除ける實體的形ソリッド・フォームをあらはし繪畫は實體的形を除却せる色彩をあらはす。かるが故に繪畫彫刻の場合に於ては再現せられたるものなること一目瞭然なれば之れを現實のものと錯誤するが如き傾向毫もなし。現實と錯誤せしめずと云ふ點は是れ繪畫彫刻の特質には相違なきも未だ之れをもて長所として誇るに足らず繪畫彫刻の繪畫彫刻たる本領はそれが特有の快感を吾人に興ふるところにあり。繪畫彫刻のあらはすところのもの眞なりと云ひ得べしされど這は都て再現的美術に具はる眞にして現實とは同じからず。繪畫彫刻の本分はそれが特所として明に認めらるゝ再現的性質に依りて盡くすことを得べし。此等のものと等しく美術に屬するところの戯曲小説の類ひが實際の事柄をそのまゝに傳ふる歴史と異なるの點も亦それが再現的特

質にあるを知るべし。勿論歴史を見るに戯曲小説を研究するが如き方法をもて對することはありされど這は既に歴史として之れを見るものにはあらず。吾人は曾て或劇場にて妹背山の狂言を見たり既にしてお三輪狂亂の場となりしに吾人が前に居たる二人の少女は同感の涙にくれぬたり。さて甲は「あれは眞實のことではなく唯芝居なり」と云ひて暫時心のどかげに見ぬたり。然るに乙は「尤も芝居には相違なけれどあれは眞實の事柄にて昔にありしとなり」とて更に兩人は潸然たりき。本來演劇の如きは純然たる美術の一分にして之れを現實と錯誤し得ざる性質を具へたれど上の例の如きは正しく美術に對する感と現實に對する心との間に迷ひて紛悶せるものにあらざるなきを得んや。かゝる演劇は年若き婦人の心を惹くことはいと強かるべく隨うて所謂實感に墮落せしめ易かるべけれど而も尙美術が竟にそが特見の効果をあらはすものあるを見る。若し劇にあらずして實際に於ても三輪が如き憫むべき境遇に彷徨する少女を看なば誰か黙して之れを傍觀し得んや。劇中の事柄は吾人の心を動かすに足る而も吾人が心の根柢をば動かすに至らず。劇が吾人の心に幻象イリュージョンを喚び起こして殆ど其の處に臨

んで其の事に開賭するの感あらしむと雖も尙幻象の幻象たるを忘れしむるに至らず。若し瞬間なりとも吾人が眞にその見るところのものに幻象たることを忘れんには靜坐して傍觀者たることは難かるべし。劇に熱せざる田舎漢の中などには往々劇中の人物が他の奸計に陥りて奇禍に罹らんとする際などに警戒の呼び聲をかくるものあり。ドンキホテは人形芝居にて其の看るところの幻象イリュージョンたるを忘れ罪なき者の困むを救はんとして拔劍せりき。吾人もし瞬間たりとも美術の幻象と現實とを混ざるに至らば此等の例に於けるが如き失態を免れざるべし。美術の再現レプレゼンテーション的特質を認識することが少くも美術が吾人に與ふる快感の原因の一部となるべし。吾人は演劇を看はた淨瑠璃を聞きて愁歎の場に至れば思はず袖をぬらすことありされどこの悲みは決して眞の悲と同一には見るべからず。吾人は恰も俳優が舞臺の上にて或意味にて遊戯三昧に云爲する如く觀者として遊戯三昧に悲歎する趣つねに胸底に潜む。悲哀より生ずる快感は疑ひもなく一部は實地の場合に於ては吾人は之れに對して悚然として畏縮せざるべからざるもの苦痛を人に與ふる怖るべきものと靜に遊び仲間となれる氣味あるの

邊に存す何となれば美術の境に於いては暫く此等恐るべきもの、鋭鋒は裏まればなり譬へば猛獸を馴養して之れを樂むはその本來怖るべきもの、怖るゝに足らざるやうになりし邊にあるが如し。現實を模倣してもて美術の範圍に入らしむるを得るものはそれが再現的特質の力に因るなり現實にして若し此の再現的特質を缺かんか美術の版圖に入り難きもの多かるべし。人間形體の美は之れを冷硬雪白の大理石にあらはして愈著く又人間が煩悶苦痛の狀態は本來觀る者をして目を蔽はしむべきものなれど之れを美術としてあらはす時には高尚なる一種の快感を吾人に與ふ蓋し煩悶苦痛の中に於てのみ不撓不折の人間正大の氣を見るなり彼れに對して高潔なる快感を覺ゆるは隱然之れを思ふが故なり。

吾人は既に業に自然の美に對して快感を覺ゆる原因の一はこの自然の美に依りて宇宙に存在する生命活氣が表彰せらるゝところにあると説けりき。今まで論述せる繪畫彫刻の類ひは概ねこれ死せる美術なり語を換へて云へば生命なき楮布金石の上に宿れるものたらざる能はず。此等の美術のみにては植物動物人間および自然界の全般に吾人が見るところの所謂生命^{ライフ}其の者とは全然同じきものをば竟に認め得ず。若し美術は果して眞に再現的のものなりとせば宇宙に彌滿

遍在する生命(大靈即ち絶對の精神)も亦再現せられざるべからずされども此の絶對の生命の模倣をば吾人いかで企及し得べけん。美術が或實質的材料を探りて倣遂げ得るところのものはそれが製作をして死物の形象たるを免れしむるを頂上とすべし。この死物の模寫たる觀を脱して能く靈動の妙あらしむるは繪畫彫刻に於いても自然にはあり得る缺點を填充してもて醇化圓滿の地に進ましむるに依りて成功を見るべし。さは云へ繪畫彫刻はその醇化圓滿の邊に因りて活動の數を得といふは是れ幾に一面に於て實を傳へたるを見たるもの他面に之れを缺くところあるは忘るべからず。石像の類ひは全く賦色闕如たるもの繪畫はまた實質的形體を具へざるもの共に此の方面より見て實と相距る遠し。此の實に反る點は不完全とも云はれ云ふべけれどやがて是れ美術の生命の懸るところなり。されば美術は一方より云へば實物に缺くところを補充すれども他方より云へば實物には具足せるを缺くものあり約言すれば美術はその美化醇化するの點にては實物より大に實物より圓滿なり然れども一側の実を傳へて全部の實をあらは

し得ざる點より見れば實よりは小に實物より不完全なり。思ふに彫像に色彩なく繪畫に實質的形なきは吾人をして一種異様の別天地に遊ぶの思ひあらしむの要諦やかてこれ暫く塵寰を脱して美の境界に入るを得しむる捷徑なり。吾人は彫刻繪畫の逸品に對しては活物を直に見るとは自ら異れども而も死物に接するの感は起こらす此の死活の間こそは美術獨得の妙趣の宿るところなるべけれ。試に淺草奥山などの所謂活人形を看よ最初一瞥見の間は活物らしく見ゆされども忽ちにして生命なく活氣なきものたることを認めざらんとするも得ず。吾人は此の種のものに對しては殆ど小兒の玩弄物視せんとするの傾なき能はず勿論活人形の如き一種厭ふべきすぢみあるが故に之れを玩弄物とは思はざれ眞美術たるの品位なきは實を摸し盡くさんとして顔料を用ひ衣服を看け毛髪を植ゑなごせしが爲なり。美術の威嚴は前に云へる一面に不完全のところあるより來る即ち非實の趣あきらかなる所に存す。

説を爲すものあり繪畫彫刻に必然に具はる不完全が吾人に快感を與ふるは是れ觀者が想像を役して假に色なき彫像に傳色し實質的の形を缺く繪畫に之れを與へ此等の作物を完成せんとして心の興奮するに因ると、這は恐らく膚淺の見ならん。かゝる説は決して當を得たるものにあらず誰れか大理石の彫像に對して其が傳色を思ふものあらんや若しかすることを思ふものあらば是れ高尚なる美術品をして活氣なき見世物の人形たらしめんとするもの然らざれば實際の活物をもて之れに換へんとするもの要するに美術が獨得の威嚴と高潔とを侮蔑し捨てんとするものなり。大理石の彫像全たく色彩を超越して純白なるは之れに由りて二つの功果を生ずる缺くべからざる要件也。蓋し純白なる彫像は活物の狀貌を離るゝと共に死物の狀貌をも亦脱するなり故に約めて之れを云へば死活を超越せる別天地に吾人を遊ばしむと云ふべし。さて今は重に彫刻の方に就きて云へるが繪畫の方にては其の實にあらざる非實にもあらぬ所にそが生命の懸ることば彫刻に云へると理は同一なり餘は詳述せずとも類推にて知らるべし。既に吾人は美の汎論は試みそれより其の一分として美術に及ぼし今や美術の一例をも略ぼ窺ひたれば是れより此の章の目的なる詩に應用すべき若干の原理を説かん。前に云へる如く美は其が内容より見れば理想に適へる者其が形より

見れば偏に靜觀すべきものなりとす是れ美の原理として第一に認めざるべからず。次に再現的美術を論ぜし條にそが獨得の妙味は其の再現的特質にありと云へるは美術の原則として深く注意を要すべき者なり。美に關する一般の原理は直に我が詩の研究に應用するを得べし何となれば美の領分にはいつれの場所をも律すべきもの其の間に別なし。然れども詩を美術の一部として論ずる時には一般に美の原理を應用するの傍ら特に之れが他の美術と異なる所以のものなくんばならず。美術には再現的と直現的との二種の別あるは既に云へるが如くなるか詩は繪畫彫刻と共に再現的美術に屬すべきかはた建築音樂の類ひと共に直現的美術に屬すべきものか先づ之を決せざるべからず。

美術が依りて立つ素材の上より云へば繪畫は色彩を用ひ彫刻は竹木金石を用ひ音樂は聲を用ふ而して詩は言語を相ふるものなり。都て美術は外部より内部まで上部より下部まで徹頭徹尾美なるを要す換言すればあらゆる美術的製作物は表面を瞥見したるのみにても美ならざるべからず而して觀者の眼光漸々そが骨隨に入るに隨うて層一層新に美を加へ來らざるべからず例へば優ぐれたる繪畫

はそが賦彩傳色の奈何をのみ瞥見するのみにても既に美にして更に色彩に依りて描き出せるのを見るに至りて美愈美なりかるが故に詩は其の真味の解せられざる者をも其の聲調の妙のみに依りても先づ樂ましめ得る者たらざるべからず。されば詩の真意味は暫く措き誦するもの先づ其の聲調のめでたきを悦ぶが如く或度までは音樂的ならざるべからず句拍子の長短抑揚はた類似の音を繰返して耳をよろこばしむる押韻など輕からぬ價值あるは此の故なり。

詩こゝは狹義に韻および長短抑揚の特質あるは前に云へる耳を樂ましむるをいふのみにあらず他の點に於ても尙幾多の妙味を詩に添ふる要素となるなり。先づ第一に韻および抑揚長短などいふ詩の律格はあらゆる美術品に缺くべからざる統一といふことをつくるに加効するもの甚なからず。律格の約束によりて各行各解ごとに一定の長短を具へていづれも一箇團圓の態ありこの箇々團圓の形をそなへたるものを更に一大團圓の形に合括してこゝに一詩篇成る。詩は此等の方法に依りて人生の功利に齟齬たる塵寰の齷齪を脱離したゞ靜觀の一境をつくり出だし得るなり。

右の如く律格の約束に依りて成ずる統一の著き効果はいろくあれど先づ各部
分いづれも一箇圓をなして始めて生し得べき勢力を蓄へざるはなきこと是れ
なりされば一方より云へば各行各解各章各篇みな一完局をなすの趣あり。此の
効果を比喩にていへば亂雜に入り亂れて馳せちがふ群衆よりも整然たる行列を
なせる群衆の方そが全躰の感情の喜憂いづれにても比較的著く表現せらるる
を見ても知り得べし。特に音楽が諧和抑揚して洋々の響を爲すや萬人に共通す
る感動を喚び起こす是れ音律の統一が各部分いづれも全躰を代表するを得しむ
るに足ればなり。詩に於ては規律ありて統一力即ち調整力オクティンゲン、バロいづれの部分にも能
くゆき渉るが故に散文プロザよりは言葉も句も一段その意味を強めうるはしさを増
す所あり。詩の句は他の部分よりひき離して抄出せる際と雖も圓圓を成せる上
に具はる律格の約束は尙一部の上にも通徹して離れざるか故に特に之れが爲に
散文とは異に一種の力あり。

律格あり統一ある詩躰の効果は尙他に是れあり即ち散文に於ては辭句は單に達
意の用を主とする所甚だ多し然るに有律格の躰にては此の實用の圓圓を或度ま

で脱するの自由あり。されば此の場合には最も効果あるべき辭句を最も効果あ
るべき方法に従ひて排列するを得べし。散文にては過巧虚飾の嫌ひある辭句及
び其の屬ぬ方も詩に於ては斯く厭はしく感せらるゝとなし蓋し詩は美の世界に
して散文は實用の世界なればなり。律格ある詩の辭句を屬するは譬へば儀式あ
る折の行列の如し華美にして寛濶悠長なる禮服の手足まどひなるをも着して見
にくからず勿躰ぶりて足なみ揃へたるも重々しくて悪ろからぬものなり。され
ども平常實務を取る場合に社衾もしくは大禮服など着しなば其の不便いふばか
りなからん又日常の用向にて他と往來する際に足なみ揃へ勿躰ぶりて歩行しな
ば這は殆ど滑稽となるべし散文と律語との相違これにて思ひ合すべし。

詩の韻および長短抑揚などいふ律格の用は右にいへるに盡きず繪畫彫刻にあり
ては之れが材として用ふる絹楮金石が能く其の創作物が現實リアリテのものにあらずし
て假象フィクシヤンたるに過ぎぬを明にすど雖も詩に於ては此の用を充たすものは律格な
りとす。眞に美術の要諦を解せざる輩に往々演劇の臺辭中に七五調の流暢なる
つらぬを云ふを罵して背理なり不自然なりと論じ或は所謂ふりごとなどを全然

排してあり得べからざる虚偽なる身ぶりとなすあり特にチヨボをつかふ如きは愚の極といふあり。案ずるに此の論者の如くならば大理石の彫像の白色なるをも繪畫の平面にして奥ゆきなきをも背理不自然として擯げざるべからざるにあらずや是れ甚しき僻見なり。美術はすべて各特有の材料を用て成る而して此の材料に依り美術にして現實にあらぬとを示す。古雅なる言葉を用ひたる詩歌は或意味より云へば現代の通俗語にてつくれるものよりは趣味多く思はるゝも此の現實界のものにあらぬことを示し易き邊に關係するところ多し。韻および抑揚、長短などの律格は自然に美術たる特質をあらはし現在界と隔離せる別天地はこゝなりと示すの力あり擬古文學などは態となる細工に依りて美術たるを強ひて知らしむる趣あり。繪畫は色彩を材料として成り彫刻は金石をもて質として成る詩は律格を躰として成るがゆゑに是れに依りて其の美術たることを明にするも當然の理なり。

獨逸の大詩人ゲーテは韻および抑揚長短の律格が詩に描き出せるものに脱實の趣を興ふるの効能を深く認めたるものゝ如し。其のシルレルに興ふる書中に彼れの傑作『ファウスト』の第一篇末段の散文なるを律語にかき改むる由をいへり其の理由は律格を用ふれば語義とのつから藤を隔てゝ美人を見るの風致を添ふるの趣あれば之れに依りて怖ろしき場面の讀者に及ぼす影響を緩和するを得べしと云ふにあり。

吾人は今までの所にては未だ詩をもて美術の二大別なる直現的美術なるか、はた再現的美術なるか、いづれとも決せざりしが今や明に再現的美術に屬するものたるを知り得たりといひ得べし。抒情躰シヤル、フキムの詩といへども決して直接に感懐を呈露するものにあらず一度夢の意識に沈めるが興に乗じて醗酵し來るなり故に其の趣は當初のものとは自ら同じからず。或意味にて云へば抒情詩これ一幅の畫のみこれ決して現實のものにあらず試に思へ人非常に悲喜哀歎の情を昂め心これに掩はれたる際にはその實情を直に技巧を要する有律格詩にあらはすが如きことは殆ど望むべからず。律格に従へる表情と雖も自然の態を保たざるにあらずと雖も各行の長短を定め聲調の昂低を整へ韻を探ぐりてものするが如きは之れを自家の肺肝を直ちに吐露する自然の法なりとは云ふべからず。吾人は既に繪

畫彫刻などの再現的美術に就いて替へたるどころより推して詩に及ばば詩の本領は決して直ちに現實リアリテスに據りて立つものにあらずして其の命脈の繋るところ其の再現的特質にあるや疑ふべからず而して詩の律格が明にそが再現的たる所以を標示するものなり。されば吾人は詩をもて再現的美術なりと斷言することを得べしと信ず。

右云へるところにては詩は再現的美術にして現實とは相距る遠きものあるが如しされど他の一面に於ては斯く論ずるは恐らく背理にはあらざるなきかどの疑ひを生ずる所必ずしもなきにあらず何となれば吾人は詩が現實と相渉るところ甚深なるものあるを感ぜずんはあらず。例へば吾人は水滸傳三國志などを讀みて道は自然が産めるものとは見え全く細工物の痕歴々たりと評すいづれにせよ技巧に過ぎて斧鑿の痕のあらはなるをば眞の詩にあらずとして之れを排斥す。此の立脚地より考ふれば眞の詩は技術たるべからずして自然たるべしと云はざるべからずされど要は詩は實を再現せざるべからざるが故に此の點に於て實と相渉る所深しと見ば可ならん。詩人が天地の美を歌ひ人情世態の委曲を描破せ

んには自ら之れに感して徹底するところなかるべからず而も脱我の情をもて之れに接せざるべからず詳しくいへば其の物をよき程に離れて靜に觀じ而して之れを探りて律語にのぼせ詞華文彩を施して煥發せしめざるべからず。詩はあくまでも再現的美術たるは争ふべからずと雖も之れが再現するところのものは現實に材を求む故に現實に待つ所あるは何人も拒む能はず。

詩は一面實現リアライゼーションにして一面假象イデオロギイなることは吾人既に之れを見たり而して二者相混和するの理は説明するに難からず吾人の感想が一度詩にうたひ出ださるゝに當たりてや自家一個の情想にあらずして道は一般普通の情想と化すすと云ふ説は能く此の間の消息を傳ふるに足るものなり。美術はすべて吾人が極致カクシとするところを趨うてこゝに生ずる所以は既に之れを云へり換言すれば理想イデオロギイとするところに據りて立つの理は前に明にせられき詩に於ても此の理は毫も他の美術と異るところなし。されば詩人一個の感想にのぼれる神祇、釋教、戀、無常といふが如きあらゆるものをば唯私の情として歌はず之れを一般の人の感想にも協ひ得る如く云ひあらはす所がやて美術の眞諦を存するところ極致に適ふと云ふ理想化す

といふものいづれも此所を第一の發途點とす。詩人万象に感じて詩を成すや先づ自己の私に屬する感想をば抛ち去り一般普通に適する表情の路を求む茲に於てや彼れが一個の私感も忽焉姿を變じて自家專屬の面影を失ひ人間に共通する或物として靜觀の對境に彷彿として現れ來るを得。かるが故に眞の詩を讀むものは一個の某詩人の情想の表現として同情を傾くるよりも寧ろ人間の通情の或は傷むべき或は喜ぶべきものを見て感歎するなり。詩が世途の艱難に疲れはてたる心に慰藉を與ふるといふの理も上に述べたる事情あればなり。吾人が悲み極りて聲を放ちて慟哭すれば自ら幾分か心慰められて爽快を覺ゆるは内に鬱結する情の放散するところあればなり。詩が吾人に慰藉を與ふるも理は殆ど同一轍なり詩を讀みて種々の感情に打たるゝやその瞬間は恰も此等の情感は我れに對して對境の位地にあるが如く我れは其の以外より靜に之れを眺むるの趣あり是れ慰藉せらるゝ所以なり悲感を歌へる名高き詩篇を取りて讀まば此の理を解することは自ら易かるべし。ミルトン及びシエレー等が最も深き悲感をうたへるものは彼等が實際に同情の涙を流ける親友などを題目にせるにはあらで全く

の見知らぬ人の上にある例へばリシダス及びアドニスなどを題目に取れるは一例とすべし案ずるに是れ詩人の詩人たるどころならん從等が歌へる悲感には彼等一個の悲感にあらずして世界弘通の悲感なり。エマソンも稍此の意に近き語を彼れが『哀悼歌』の中に吐けり「我れのにあらず我がものとは呼ばじそは造化の嫡嗣なれば云々。

吾人は此の論の冒頭に於て相容れざるか如く見ゆる詩に對する二の定義あることを云へるか今や二者は全く融和せられたるを見たり而して奈何に融和せるかといふに詩は一面摸倣的美術たると共に他の一面詩に情火の必要なる是れなり。情火の詩に於けるや決して直接に發表せらるゝものにあらずと雖も其の中に含蓄せらるゝや疑なし。果して詩は再現的美術なりとすれば再現せらるべき實物なかるべからず吾人が春水種彦等か作を不自然なりとして撥くるは技術の所産たるを譏るにあらず其の技術の拙劣なるを厭ふなり彼等の作は再現するらしく見せかくる所のものを眞に再現するものにあらず非難は全くこゝにあり。詩に最もあらはれ易き一種の感情あり這を發露するには寧ろ間接の手段を用ふる方

そか自然と實とを損するの患なきものとす此の一種の感情とは他にあらず直に理想に對して起る情感これなり此の感情は誠心よりの歎美となり愛となり或は敬虔の念となるなり。崇拜家は我が信仰する神の像を綿密なる注意をもつくり又之れか爲に意匠を凝らして殿堂を營む蓋し斯くの如くせざれば敬愛の念をあらはすに足らざるべければなり。自然の戀人とも云ひつべき彼の畫工のやからは周到なる用意をもて一點一線をも最も貴重なりとして之れを描くに力む其の苦心經營の至れると着筆賦彩の微妙なるとを見るも奈何に自然を愛するの深きかを見るべし。理想を熱愛するの情はあらゆる美術の根本なれば詩の基礎を成すも異むに足らずされど此の情は決して激越なる形容詞を用ひてあらはすを要すべきものにあらず真に此の情を露はすの道は唯熱誠をもて描くにあり作るにあるのみ詩篇畫面のづから之れを人に語りて餘蘊なかるべし。

詩は感情の直接なる發露にあらずといふと詩は單に感情の影象の發露なりといふこととは一見せるところ些細の差別なるやうなれど實はこの區別は頗る重大の關係を有す。上の區別は詩論に關係する幾多の難問を氷解するに足りまた詩

論に就いて起これる諸種の問題に答ふるところ多し。吾人は詩は感情の影象の發露に過ぎずといふ原則を應用して幾多の問題を解くに先だち前にいへる詩は直接なる感情の發露にあらずとあるものとの區別を充分明に替ふるの必要あり。情の發露は本來自然にして他の促すを待たずその極端の場合に至りては抑制すべからざるものあり。不平、罵詈、讚歎、喜悅など色のものとなりては情は發露するものとす。此等の情の發表は一旦技術にのぼりて製作物たることを觀取せらるるに至りていたく和げられこゝに之れを一變して非實となすされど情の影象即ち再現は是れ意識して成る技術の恃につくり出だすところ此の一例に於いて美術の眞價值存す詩の命脈の繋るところ亦此の外に出でず。されば吾人は其の影象即ち再現を産むところの技術が極めて圓満ならざるべからずと信す。さてかく圓満なる再現には散文も或方面、或程度に於て用をなさるにあらざると雖も有律格の詩は特にこの目的に適す其の理由の如きは既に述べ來たれる所より推知するに難からじ。

さて己れの感情を外に抒らすは其の意我れに他の注意をひきつけんが爲めなる

が如し切に云へば他の援助を求むるの意に出づ少くも同情を得んとするものなり勿論情の發現にはかゝる意識して或目的を越ふものゝみにはあらず。同情を求むることは人心に於て輕からぬ動機なり胸裡に懊惱あれば他の同情を切望するは自然にして之れを得て慰めらるゝ所あり。之れに反して詩歌などいふ感情の再現せられたるものには此等の一個人に係る目的などあることなし。此の場合には同情を求むるが目的にあらずして美と見ゆるものを創作せんとするが目的なり。若し感情を再現する作詩の境界に於て自分一個の目的なるもの混ざることありとせんか這は名譽を博せんとの考に外ならざるべし。詩人が作に臨んで其の情の高く昂がるや世界の寶藏に更に不朽の悅樂を與ふる新美術を貢獻せんと欲す勿論美術が與ふる悅樂の中には悲哀の快感の如きも自ら含めりと知るべし。されば其の讀者に及ぼす結果の方より見るも他の私情を直露するものと美術的再現せるものとの區別あつづから明なり誰れかテニソンが『インメモリアム』を讀む間に其の天才の異常を歎稱する外彼れが一身上に就いて考ふるものあらんや誰れか此の作にもせざる親友に永別せることに關してテニソンを憫むも

のあらんやはた誰れかテニソンが此の著あるは讀者の同情を求めんが爲なりなど夢想だもするものあらんや。吾人は詩の妙を歎美して恍惚として之れを讀み畢り一轉この詩の想髓となれる實奈何と反省するに方たりてや寧ろテニソン一個の上を思はずして一般人生の上と思ひ到らざること能はず。吾人はテニソンが『インメモリアム』讀む時には「全く愛せることなきに比しては愛してさて別れたるはまさされり」との感なき能はずされど這は決して作者が一個の愁思に同情せるものにはあらず。

詩の再現的美術たること及び再現と直現との甚大の相違あることなど今や今瞭になりぬ吾人は一步を進めて既に説ける原理をもて詩の特質を解くに應用せざるべからず。

博士ホルムスがエマルソンを論ぜる中に云へることあり散文にては餘りに自家一個の私見とのみ思はるゝものも一旦律格ある詩にてあらはす時には頗る趣味に富めるものとなる云々何故に然るか今吾人が論せんとする原理に照して之れが説明を求めざるべからず。按ふに詩は現實のものを吾人にあらはすにあらず

唯一箇の幻象を見えしむるのみ故に詩を讀むに方たりてや著者の一身上に關して思ひ及ぼさずして單にそが歌ふところのものを思ふのみ若し著者に關して思議することありとも這は詩の上に係るものたらんのみ。

前に立てたる原理に照して何故に或人々が詩に對して毫も趣味を感ぜざるかを解き得べし斯かる人々は非詩的精神を有するものすなはち想像界の美を樂み得ざるものなり詩の版圖は幻象の境界なるに此等の人々は現實の桎梏を脱し得ず詩は普通弘通の感情を謠ふものなるに此等の人々は個人的思想に羈纏せらるゝを免れず。かゝる唯物的の傾向つよき人々は實を離れたる幻象即ち單に形式的再現をみて其の處に何の價值ありとも考ふる能はず而して其の再現せられたるものを靜觀すること能はずして直に其の現はされたる事實を問はんとす。かゝる人々をば通常想像の缺乏せるものと云ふが習ひなれど吾人は斯くは斷言するを敢てせず。彼等は詩中の光景に對し之れを現實なるが如くに想像するは明白なり唯その難すべきの點は想像の闕内に靜觀すること能はずして想像の背後に突入して事實を捉へんとするにあり。

上に絮述せる理由に問うて詩には或題目の不適當なることを説明するに難からざるなり。

詩は再現的のものにして決して感情を直露するものにあらずされば或種類の感情は詩の材に用ふべからざるや明白なり換言すれば詩人が私心の執着を斷絶し得ざる程に強盛なる情感をば靜に幻象として之れを模寫すること困難なり。非常に悲歡の情に堪へざるものは之れを詩に上らしむるを得ず唯言語にあらはし得る程の稍々輕き悲哀のみ始めて詩題に入ることを得べし。

かるが故に詩は他の繪畫彫刻などの美術と共に唯ひとへに靜觀すべきものなりとの結論より一步を進めて詩は勿論他の諸美術に於てもそが特質として靜に讀者、聽者、觀者等の心をそが幻象に對して動かざらしめざるべからずと云ふを得べし。例へば恰も現實の事柄に對すると同様に欲望、嫌惡、恐怖などの念を惹起すが如き幻象は美術の樂土を汚すものなり。されど一方より云へば此の論は幾分か當時の習慣に因りて異なる趣なきにあらず古代の佛蘭西劇には吾人が今日主張

するが如き靜觀の効果を興ふべきものを除けりされど深く考ふるに吾人が上に云へるものは決して一時の習慣の支配すべきものにやらずして千古不易の眞理の存するを疑はず。

更に詩の恰好なる材料とすべきものは他の諸美術に於けると同様に理想の表現に適するものたらざるべからず這も亦詩材に於ける一の制限なり。

理想主義と寫實主義との間の關係に就きては世間つねに議論絶えず按ふに此等の議論の雜錯を極めて解きばぐし難きは理想主義と寫實主義との岐頭を分明にせざるに因由す然らざれば稍々分明なるものありとするも其の區畫が正しからぬに職由するものゝ如し。既に述べたる如く理想の義には本來極致と特相との意をも蘊藏す而して美はこの理想の表顯に外ならず再現的美術は此の理想の再現せるものたるのみ。こゝに用ふる理想および再現的美術などの語義解釋は前に零ぼ見えたれば今は云はむ。さて理想の義を吾人が正當なる意味なりと信ずる所に依りて解すれば理想家これ即ち寫實家たるなり。換言すればその美術の本領に嚴に立脚する以上は竟に理想と寫實は二にして二ならぬものとなるなり。

是れに由りて之れを観るに所謂寫實主義の人々が單に實際的なるが故にどの理由をもて人生の一面を直ちに詩歌繪畫などの題目に恰好なりとするの謬見なるを覺るに難からじ。試みに思へ人間は本來動物なれば一面動物的性質を具ふ然れども人間の人間たる特徴は決して此の動物的のところにあらず隨うて此の側は眞に詩材として採るべきものにあらず。詩に對して少くも極致に適ふ人間即ち理想的人間の面影だにあらはるゝことを要望するものは是れを眞正の理想主義となす。斯く云へばとて詩は常に天女のごとき人物聖人君子の如き類ひのみを主題とせざるべからずと主張するものにあらず。人は天女にあらずはた聖人君子たるべき高潔の性質のみにて成るものにあらず要するに自然に協ふことを眼目として要求するに外ならず。人生の最下等の状態と雖も或度までは他の高尚なるものゝ餘光に浴するかた照繳の作用にて高尚なるものを愈々美だらしむる場合には詩の領分に入るを得。嘲罵諷刺の文も或度までは上の理由にて詩の版圖に命脈を保ち得べしされど精確に所謂美術として詩を見る時には嘲罵諷刺の文これを詩の範圍に屬せしむること難し。詩題に關して茲に不思議なる別

あり別とは何ぞや酒を左のみ好まぬ人も酒に關しては詩歌をものすれど奈何に大食家と雖も餅や團子や蕎麥などいふを主題して詩歌をつくれるはなし是れ一考するの價值あるところなり。冠婚葬祭など云ふ儀式正しき場合には酒は用ふれども餅などの類ひは主なるものとしては用ひられず。西洋にては酒の神はあれども肉汁などの神はあらず穀物の女神も酒を飲みある姿は繪にもあれど飯をくひあるところは見ず。支那日本などにも神仙人などいふ類のものに酒を呑むが多けれど食物に縁あるが稀なり。吾人々間が心の所産なる此等の禮式といひ神などいふものいづれも詩歌と共に酒に對する關係の深くして食物に對して淺きは何ぞや。按ずるに食物は日常の生活に缺き難き實用品なるに酒は然らず二者の關係は恰も實際的の考が想像と相對立するの趣あり。想像が吾人をして暫く無我有の郷に翱翔するを得しむる如く酒も亦人生の趣味なき境界を脱離して自由の天地に閑遊するを得しむ。酒は果敢なき一時の價值もなき幻影を與ふるものなれども而も此の幻影は比較的に高雅自由なる精神の活動に屬するものなり。

今まで縷陳し來れる原理に照して何故に單に物の目錄のみを誌せるもの、詩たる能はざるかを解するに易かるべし。さて奈何にして詩たるを得るかを見んか。詩は他の再現的美術と同様にイメヂ コンストラクシヨン 幻象の結成をもて始めて存す而して單に物の名を志るせるは是れ幻象をあらはすものにあらず。詩はつねに幾分の理想化せる原素を含蓄す即ち美なるものに幻象は其の物の本來の特相をおのづから見えしむ。されば吾人は小兒が繪をもつて其の傍らに「此れは馬である」と誌るすを見ては之れを美術に於ける最下の段階と呼ぶべし而して斯かる解釋を附するは自然にその物を見えしむる幻象心に浮ばざる際に始めて起るべきとなり。此の如き場合に於ては吾人は未だ一箇の詩をもたぬ美術をも見得ざるべし。幼稚なる詩に於ては實に繪はかくとなくして「這は馬なり」といふ類のもの多し。此等よりは稍と進歩せるもの例へばホイットマンが作の如き我が邦にて云は「在來の稗史小説脚本などの一部には單に人物の目錄たるに止まらず多少形の整ひたる畫像をも與へたるもの尠なからず。されど此等は恰も夢にて瞬間現はれて程なく消ゆる人の影の如きもの更に比喩を換へて云へば急流に捲き去らるゝ物象が暫時

あらはれて忽ち波間に没するが如し未だ真に詩とはいふべからず詩は靜觀するを得せしめざればその本分を盡くせるものにあらず。伊太利を漫遊する人は往々彫刻の斷片が他の石と混じて造られたる石垣など見るとあり斯かる石垣を見るは趣味あるものなれど之れを直に美術品なりとは云ふべからず。吾人が既に立てたる原理が一方に於て詩の起點のいづれにあるかを示すと共に他方に於ては詩の盡頭の何邊に存するかをも説明す約めて云へば詩非詩の境域は前の原理より推して自ら明なるべし。詩は再現的美術の一分にして言語にあらはしたる幻想の發展なり繼續なり。本來詩には必ず辨拆の語をもてあらばすこと難き極めて微妙なる幻象なかるべからず又最も鋭敏なる觀察眼のみひとり認め得る幻影なかるべからず而して此等箇々の要素は統合融和せられて分つべからざる一完體をなすを要す。單に理智的に訴ふる文字はた數學的若くは哲學的問題は到底詩たる能はず蓋し此等の場合には詩を成すに足る幻象幻影の活現あらざればなり。ミルトンが詩は手もて觸れ得べきが如きものならざるべからずと云へるは上の如き事實を思ひ合せての言ならんと察せらる。

論じて茲に至れば詩の大體の性質および範圍を知り得しなるべし。されば詩には人をして歎美せしむるに足るあらゆるものを再現するを得べし又現在の我れ以外に我れを超出せしめて一層擴大なる生活に入るの端緒を開くことを得べき都ての情緒感想を活描するも可なり。或は想像の翼のつゝかん限り高く思ひを馳するも妙ならざるにあらず或は假に人體となりて現れたる我が理想こゝにありと思ふ戀する人の熱情を歌ふも可なり或はオルゾオルスと共に自然に對する熱愛の情を抒らすもあしからず又エマルソンと共に自然と人生とのあらゆる麗しきものゝ上に發現せる美の絶對理想に對する讚歎の心を歌ふも興あるべし。エマルソン等が理想に對し情火を燃せるを見て世人或は之れを智力上の意識に歸するありと雖も然らず這は情の歎喜の爲に昂がれるもの單に考察に依りて認識せるものとは同日の論にあらず。

吾人は此の章の筆を擱く前に詩の道德に關する一側に就いて一言せざるべからず。詩はその本領に確立する方面より見れば毫も倫理的性質を蘊藏せず。世に訓誡詩(Didactic Poetry)と稱するものあり卑近なる例を取れば淨土和讃の如き秘歌

數へ頃などの或部分勸善懲惡の意を主とせるものゝ如き是れなりされども此等の多少律格に協ひて其の形詩に似たるのみ之れを詩とは云ふべからず。道德上の箴言の如きものは數學及び哲學の命題と共に竟に詩たると能はず。然れども道德上の眞理を想像に溶化して之れに尋常訓誡の辭とは全く異なる美術的製作の形を與へてもて詩となすと難からずこの場合と雖も其の實は單に道德上の事實は他の諸般の事實と共に美化して詩材に用ふべしと云ふに過ぎず。テニソンが『美術の宮殿』の中にひとり美のみを愛せず美と善と智とは涕なくして離ち難き姉妹の如くなれば云々といへるものは眞善美の相關する甚だ深きを歌へるものなり詩歌小説の中にもそが優れたるものには求めざるも自らに道德の趣味ゆたかなるものあるは之れが爲なり。

悲劇は決して架空のものにあらず實際の世間に常あることなり這は見るものをして悚然たらしむと雖も詩人の眼には美と觀ぜらるゝ面相ありて讀者また喜びて之れを迎ふ而して悲劇は他の材を用ひたる詩と等しく人間に許多の教訓を授くるものなり。

茲に注意すべきものあり前に吾人がテニソンの句を引けるは美術は美をあらはす以外に尙他の目的ありや否の問題には關せざりき。唯人間の靈魂は偏へに美のみを愛するに因りて罪に陥るの意を諷せるのみ決して此の趣意を敷衍するも美術に道德上の目的なかるべからずとの結論を得ることなし單に人間の靈魂には道德上の目的なかるべからずといふのみ美術の世界は靈魂に圓滿なる圓外物を供給するものにあらざるを教ふ。

唯美主義派と道德論者との相争ふ點に對しては吾人は前者が奉ずる原理には同意を表すると共に後者が主張するところのものは其の結果に就いて見るれば往正當なりと認めざるべからずと云はんとす。道德論者が道德上の立脚地より見て撥けんとする美術上の或材料は吾人は美術上の立脚地より見て等しく之れを排斥せんとす故に其の本來の趣意より云へば前者は道德の爲に美術を犠牲にするも顧ざるところあるが故に美術の原理に照して美は美として獨立の價値ありといふ點より云へば非道德的材料を斥くるを難ぜざる能はず。然れども正當に道德上より非難せらるべき材料は美術の美をあるのつから損ずるところあり故

に美術家も亦之れを棄つるに吝ならず茲に於てか其の結果より見來れば道德論者の主張するところは偶然に審美上の理にも合して正しと認めらるゝなり。理想派と寫實派とが詩材を論ずるを見てもおのづから隱約の間に一種破るべからざる境界線ありて此の以外に出づれば審美的再現に恰好なる材料を求め得ざるに似たり。さて此の境界線以外の材料は美術の爲に美術を製作するものと雖も撥けざるべからざるものなり。清淨なる心の人にはあらゆる物清淨なり蓋し清淨なる心の人には造化の隱匿するところを許いしても直となさず秘密をば秘密として黙過するに満足すればなり。然るに此の秘密を打破して自然を直寫することを誇るものは却て造化本來の目的に悖るが故に這は寧ろ不自然なり隨うてかゝる趣意にてつくれる美術は偽美術なり。

前のは美術の立地より汚穢を厭離せるものなるが道德の方より見て潔癖なる人もよく美術をして純潔ならしむべし此の種の人には造化の意の何邊にあるかを問ふにもあらずはた自然の本義奈何と考ふるもあらず唯ひとへに塵垢のむさきを厭ひて之れを去るのみ其の結果より見れば前者と等しく塵網を脱するに於てはよく成功するを得べし。

一方より考ふる時には詩も他の諸美術と同様に人間至高の生活に對しては往々有害なる影響を與ふることもあるべし。前に引けるテニソンが句の意にも見えたる如く美術は吾人の精神が或目的に熱中するをひき離ち之れをひとへに靜觀するの地に置くが爲に害を蒙らしむる所なしとせず。自然を愛するが如きは最も無害なるに似たれども苟も美より生ずる愉快は皆同一の結果を生ずることを免れず。且又詩は餘韻餘情または絃外の響などいへるもの讀者の聯想を驅りて劣等の快感を喚び起こすことあり這は美術の本領を逸出せる製作物ならざるも往々與ふる結果なり。されど他方より云へば詩は自然に善に導く力あるを見ること相難からず人間の精神を穢れたる淺ましきはた憂きこと繁き人生の牢獄より暫く救ひ出すの効力あり。又詩は劣等なる快感の塵垢を洗滌し去るの力あり之れに加ふるに人間の精神は詩の導くがまゝに従ふが故に絶対の實なる最高の理想に對する靜觀の方の誘はるゝの趣あり。之れを要するに詩は人生を縮寫

しはた之れを美化淨化するものなり實際の世界にてはその區域廣漠たるが故に因果の理路も一端を見て全局を窺ひ難きことあり縱令全躰を得と雖も關係餘りは複雑を極め紆餘曲折またはてしなく爲に明にそが真相を認め得ざること多し。然るに詩に於ては實際界の状態を縮圖となし必要ならぬものを淘汰して理路の疏通に力むかるが故に造化の活書を読むの妙法はこの以外に求むべからざる便利あり。造化よく無盡の教訓を黙々の間に與ふ世相の活現の期する若し詩の本領とすればそが間接に世道人心に裨益するものあるは擧げて算ふべからず。

第三章 詩と自然と

詩が採りて材となすもの之れを大別して二となす第一は自然界なり第二は人間生活の状態なり。この中の前者に關して論ぜんとするものは此の章の主眼なり後者に就いては更に章を改めて詳述せんと欲す。

先きに詩の原理を講ぜる際に既に外境が奈何なる事情の下に美と見ゆるかの問題に軽く觸れたりき且自然美の快感の本源なる自然と人間との關係をも多少窺へりき。吾人は前の問題を繼續して一段深く研究すると雖も自然の微妙なる快

感をば竟に何故なりとは理解し得べからず此の快感は大詩篇を成すの神來を與ふるものはた多少の詩興を有する人はいづれも容易に感得べきものなり。世には一種の勢力ある世界觀ありて此の見やうに従へば自然に對する快感は竟に成立たざることとなるべし按ずるに此の見必しも根據なきにあらず。

歐洲近代の文壇に於て雙龍玉を争ふが如き對照の一偉觀をあらはせしはマヨンシチエアトミル著「自然」とエマルソンがこれと同標題の論文との比較に如くものなし。二者ともに同一の現實界を道破せんとせる者而も前者のいふところを聞けば吾人は惡魔の面前に立つの心地し後者の描き出せる自然を見れば神靈に接するの思ひあり按ずるに二者ともに多少誇張せるところなくんばあらず。ミルは確に此の自然問題に重大なる或原素を見落とせるが如し。ミル曰はく人間相互の間に起こらしむれば禁錮死刑にも處せらるべき種々の事を自然がつねに人間に向つて爲すを見るなりと。而して氏は自然が人間を死地に排する幾多の慘狀を叙述し之れを恰も銃砲を守るものが通行の人を殺傷するに讓らざる罪ありとやうに痛論せり。是れ少しく誣妄の説なりと云はざるべからず。人間相互

の間に起これることにも避くべからざる禍災に遭ひて自衛の必要より他を殺傷するの結果を生ずるものは深く之れが罪を問はるゝことなし。國家に於ても公法は一個人の爲に狂ぐるを許さざるが如く宇宙の安穩なるは自然の法則の確固不動の結果なれば時に一私人を犠牲にすることあるは免れず。彼の火災の如き海嘯の如き地震の如きいづれも人類を害し實に慘を極むるものありと雖も這は自由の法則の不拔なる結果にして若し少數人の禍害を救はんが爲にこの自然の大法が隨時枉げらるゝものならんか之れが爲に宇宙の綱紀全く破れて竟に瓦解するを免れざらん。是れに由りて之れを見るにミルが自然に對する批評の全軀を輕々しく信ずるは更に再考を要すべきものあり。

エマルソンが主張するところミルと共に其言誇張せるものありや否は別問題とするも確にその説には感情の分子混ざるものある如し。詩人的洞觀の力なきものはエマルソンが情熱的所説に充分同感して其の趣意を會得しつくすこと得ざることあるべし。案ずるに情熱は或程度までは特立獨造の所觀を立し亦他と異なる條理を顯彰す。少くも情熱的自然觀の起る根本には確に不動の眞理あり。

エマルソンがいふところのもの俄に考ふれば奈何にも奇矯にして飄逸に過ぐるが如しと雖も何人も一生涯の中にはそを尋常の見なりと思ふ時期あるべし。エマルソンの主張するところは詩人的觀察より得來たれるもの詩人は由來かゝる言を爲すもの毫も異むに足らず。現今米國詩人の多數は殆どその根本に於てエマルソンと類似の自然觀を有するものにあらざるなし。吾人はかゝる説の趣味の津々たるを愛し且これには眞理の蘊藏藪からざるを信ず。エマルソンの説は極めて明白にして且樂觀的なり而して他の説よりもミルの言と對照して著き相違を認むるの便あり。エマルソンの自然論は散文をもて詩人の感想を露はしたるものなれば論理家たるミルが所説とは其の趣著く異なるを看得べし。

エマルソンとミルとの論文は兩者ともに相下らざる程に眞理を含蓄するが故に二者對照の奇觀をして彌々奇ならしむ。ミルの論旨は縱令幾分の誇張を含むとするも何人も常に見ざること能はざる自然の一面面をあらはす。げにや自然の勢力の活動は毫も人間を待待するところなし此の意味より云へば自然は人倫に協ふものにあらず寧ろ之れを非倫理的アンモラルと云はざるべからず。自然界の各段階を

通じて廣く必然の利己的活動流行す、何故に利己的活動ありといふか一般に動物植物は其のれを維持し我が需要欲求を充たすが爲に無意識の間にすらも侵害の勢を取りて止まざるが故也。何故に必然の利己的活動といふか蓋し生物には決して缺くべからざる普通の需要を充たす上に係ればなり。此等の需要の熾んなる欲求は高尚なる情感もはた思想も之れを抑制するに足らず。例へば象はその體格の龐大にして重々しき其の性質の柔和にして慧敏なるところ他の獸類に比して高尚なるところあり吾人は取ていふ此等の諸點に於ては殆ど嵩高莊嚴に近きものありと。されども一方より見れば卑むべきと云はんより寧ろ憫むべきものあり何となれば此の獸が生姜餅落花生などを哀求するの状を見れば吾人をしてかゝる情を起さしむるに足る。又馬に就いても稍々同じきものあるを見る馬の精神活動する動物なることは人の知悉するのみならず殆ど一種の天才に類するものあるを認め得ざる能はず。乗馬家はつねにその愛馬をもて我が感情の同伴者なりと想像せざらんとするも得ず縱令自家の高尚なる思想の同伴者として之れを目することは得ずとするも。かゝる尊き點あるに拘らず一片の林檎、小

量の砂糖は此等の靈性を全く没了せしむるに足る而して馬が此等のものを得んとする熱心とそを得て喜ぶの狀の實に存外のことなり。象及び馬などいふ此等の例は是れ下級に屬する活物界の實況なり。吾人はこゝには自然を個々分ちたる上に就きて論ぜり自然は此等個々のものに集合せるをもてそが全體とす而して生存の必要より此の劣等の目的(他に高き目的あれども)を遂ぐる爲に或度までは魂を奪はるゝが如きとあり。人の目につかざるやうに造くられたる鳥獸虫魚などの形狀、他をして耳を蔽はしむるが如き木材を斫る時の鋭き響音、花卉の艶美樹木の壯麗等みな最下級の目的(即ち生存の目的)の爲に他と競争しはた勝利せるの徴候を認めしむるものにあらざるなし。科學が吾人を啓發して智識を豊富ならしむるもの藝からずと雖も其の結果たるや宇宙の詩味を滅殺し之れに對する人間の歎美の情を冷却せしむるの傾向なきにあらず。天文學の進歩せざる際は蒼雲に懸る無數の星辰はこれ各々一個の大世界我々の住する此の世界と殆ど同様なるものとしてなりとし我々の棲息する現世界に如何に勝る高尚優美なる社會が遠きかなたの諸天體の上に成立し如何に愉快なる社交の行はれあるか

を想像せしめき、甚しきに至りては光明赫耀たる太陽の上にすらも一種の動物が社會をつくりあはるならんとの想像も亦必ずしもなきにあらざりき。然れども科學の進歩は此等のうるはしき想像界を粉塵し悉くせり。宏大無邊なる無數の天體には人間の住むに堪ふる組織の成立しあはるや否は吾人之れを明言する能はず然れども彼の火炎を發する所の諸天體に於ては如何なる種類にせよ人類といはるべきものゝ住處の存し難きことは確實となりぬ。近時歐洲に於て太陽をもて多幸なる靈物の棲息する場所なることを證せんとして著はされたる論文ありしと雖も吾人は之れを信せず縱令いかなる靈物の住ふことあらんも猛烈なる火焰の中に住ふとせば恐くは多幸なるものにはあらじ。科學の進歩は更に花の色及び香をも趣味索然たらしむ蓋し此等のものは蜜蜂の注意を充分に惹く爲に花をして美ならしむ一種の手段に過ぎざるものとせらるれば。

右に述べたる所に據りてミルが自然に對する見解の要點を窺ふを得べし。げに自然は個々に分ちて仔細に看來たれば必然に或度までは利己的活動を爲すものなるは争ふべからざる事實なり。更に自然の全軀を合括し之れを一團として見

る時には無心なり無執着なり。生存競争の大活劇に於て全軀としての自然は無私公平なる審判者たり。自然法の前には蛇蝎の如き憎むべきものも鳩の如く愛すべきものもはた悪魔も人間も總て一樣に勝者のみひとり存在して敗者は滅亡に歸せざるべからずとの裁決を受く。果して然らばエマルソンが情熱的詩歌的に見たるところのものは自然の何の邊にか之れを求めん。ミルが見たるが如き冷硬なる自然の中に人の心胸に觸れ人の情感を昂がらしむるものあるは異むべし是れ果して奈何なるものぞ。

右の問題を提起すると同時に否寧ろこれに先立ちて吾人は自然の一例にエマルソンが唱ふる如き趣あるは眞なりといふことを認めざらんとするも得ず。吾人は自然に關して冷硬無趣味の事實を述ぶる間にも其の述ぶるところの物名とその物の形狀とがものづから其れに見はる美の力を感ぜしむ。吾人は諸星が實際見ゆるが如く單に個々の大火球ファイヤボールとして説けりきと雖も斯くいふ間にもこの考が直に無際涯の大空に高く懸るといふ觀念を喚び來たりて思はず吾人をして肅然として容をあらためしむるものあり。吾人は花の色彩香氣の存する由來を冷かに

説きある間にも色彩、香氣に聯關する記憶は吾人を驅りて忽ち美感を覺えしむるものあり。例へば我が戀人の過失を責めんとして憤懣の語氣をもてかたり始むる中に何時しか其の愛する人の美にうたれて心やはらぎ果ては莞爾として微笑するに至るが如し。

されば自然の一面には無趣味、醜惡なる事實あるに拘はらず亦一面には人心を鼓舞し人心を恍惚たらしむるに足る微妙の側あることの眞理なるを拒む能はず。シヨン、スチユア、ミルカ、グからも冷硬なる物質的、利己的方面より自然を評論するに止まる能はずして一步を進めて前にいへる如く天地に不可思議なる力あることを證するものなり。ミル青年の頃曾て深く憂鬱に沈み一度はいたく心を喜ばせしものも全くその趣味を失ひ元氣悉く衰へてしことありき。然るに彼れが生活の初期を蔽へる暗愴たるこの黒雲はオルゾオルスが詩集を讀むの快に依りて掃蕩することを得たりきとぞ恰も是れ昔ダギッドが琴歌に依りソオルが心の紛悶を排せるにも似たり。さてオルゾオルスが謠へるところのものは單に自然より得たる感興の謳歌に外ならず自然は詩人の筆にのぼりて聲あり茲に始

めてその眞味を呈露し來たる。さればミルは後年に至りては自然をいとも冷硬、無味に解釋すれども彼れが憂鬱症を癒せしは自然の力なりしとは疑ふべからず。自然に具はる撫慰排悶の力をうるはしく描き出せるものゲオテが『ハウスト』の第二篇の發端に於て見るを得べし。

かるが故に自然をもて人間に對し人間に立ち勝さる壯嚴のものとなすエマルソンが説に躊躇なく傾聽するを得べし。エマルソン謂へらく我れは荒野に對して街衢村落を見るより更に愛すべくはた同情を寄すべきものあるを信す穩なる景色特に遙かなる地平線を見て人は一裡の美感を得べしと。エマルソンの考は茲に止まらず英邁卓犖の士と雖も自然より産まれ出でたるものゝ中にて價值高からぬものゝ如く見ゆるものゝ如し。旭日暈々として光山川にあまねき所月蒼穹に懸りて萩の葉末に珠まろぶ所清泉流れて涓涓たるあたり一朶の姫百合の水鏡せる或は黒風白雨電閃雷轟して奇岸林立す七月の天はた白體々として千里一と目の冬野の景色いづれか觀る者の心を爽快ならしめざる。此等自然の美は單に排悶遣鬱の料として人を樂ましむるのみならず非常に偉大壯嚴なる勢力を感せ

しむ。斯かる悦樂かゝる勢力を自然に認むるは是れ吾人が心の情感の側なり此の立脚地より見ては總て其等のものは眞理に協へるものと云はざるべからず。されども智慮の着眼點よりいふ時には狹義に所謂自然界の日月の如き無機物の機械的運動又は草木の如き無意識無生命の狀態はた單に感覺的に動く鳥獸などは之れを人間の意識的思想戀愛熱情などいへるものゝ表現に比すれば其の價値の劣等なること殆ど無限なり。あらゆる有機物界の大元なる根源の大勢力の純粹のあらはれたるものは是れ人間にあらざやと思はるゝなり。右にいふところのものに根本に於いて相矛盾せるが如く見ゆる趣なきにあらず。即ち一方より看れば狹義の所謂自然の狀態は生命なきものにして活動の最下級に屬す自然は本來無意識にして非倫理的といひ得ずとも確に倫理的にあらず。地方より看れば人生の尤も趣味あることも最高の精神的活動の有様も之れを自然は比しては殆ど價値なきものゝ如く思はる。前掲の難問を解くに足るもの件の矛盾の中心點に於て其の影を認め得るに似たり換言すれば相背ける彼の兩側の間に既に二者調和の端緒あるが如し。ミルが

所謂自然は倫理的ならずといへる點はやがて自然に於ける妙趣やどる所ならずと斷言すべからず。人間の實際生活に於ては常に我々につき纏ひて離れざる二個の厄介者あり即ち爲さざるべからざる義務と爲すべからざる義務と是れなり。若し厄介者といふが穩當ならずば到るところ意識的制馭の桎梏吾人を離れずとは云ふことを得べし。吾人他と交際するに方たりはた世事を處理するに及びて常に義務の羈纏を脱することなし都て我が願ふところに任せず無理の大法に遵據して一舉手一投足と雖もみな律せられざること難し。

吾人一度自然に對すれば倫理的囹圄を暫く脱するを得閑寂の地に就けば俗世界の鐵鎖のづから解け一箇の別天地に逍遙す。斯く自然に對して私意の飛騰自在を圖るは決して卑陋のことにあらず心の安慰を求むる是れ懶惰を喜ぶとは同じからず神を靜に遊ばしむる是れ放逸耽樂と等しからず。自然の美をたのしむの境界に於ては時間の徒費といふべき者はた節用といふべきものなし又此の境界にては爲さざるべからざることなし故に亦爲すべからざるもの存せず。此の立脚地にある間は何人も他の規律に制裁せられず自家の上に自家の法則存す而

して生活は全然これ優遊の爲に供せられたるが如き觀あり。
 チャールスラムは一時行はれたる道德全能主義の餘波前代の喜劇をも非倫理的
 として排斥せんとする説に反對していへらく劇に於ては吾人倫理的法の應用
 せられざる別天地に入るものにあらざやと。劇中の人物は都て現世の道德的標
 準に依りて褒貶せらるべきものにあらざラムは劇に於ける美術的製作の妙味を
 一部分この超俗の事實に歸せりき。かゝる説の結果としてラムを目するに倫理
 的規律を脱却せる世界に住むことを欲するものと斷すべからず又氏は道德上の
 束縛を厭へるものとも解すべからずはた劇中の人物の如く勝手なる言行をなさ
 んとするものなりとは尙更見做すべきものにあらざ唯氏は實際上よりは好まざ
 れど劇中の自由の世界を靜觀すれば一種の愉快を覺ゆといふに過ぎず。
 自然界に對する時には觀劇の愉快と相似たるものを感ずることあり。自然は演
 劇界よりも更に深遠浩大微妙なるものありと雖も俗世界の桎梏を超絶し座網を
 脱離せる自由の存する點は酷似するものあり。
 既にいへるものは自然の妙力と人間の生活との甚深なる關係の一斑に過ぎず。

道德上の規律はこれ人生を束縛する羈絆の一例に過ぎずこの以外にも夥多あり
 と知るべし。個人性の如き自意識の如きいづれも或意味に於て羈絆なり壁柵な
 り。自意識は我靈性をして周圍の活物の生命と截然相分かれしめ宇宙普遍の生
 命と隔絶するに至らしむ。人間社會に關係するところのものは何物を問はず都
 て或廣さの牢獄に閉ぢられざるものなし。一方より考ふる時には文明進歩の結
 果として人間の所産に係るものは動植物の所産と等しく之れを自然的なりとい
 ふことを得べし。例へば或種の人天稟の技能に依りて鳥の巢を營むが如く家
 屋の建築をなす。諸市邑は自然が基礎を置かしめたる場所に於て漸々擴張せら
 るること植物などの生長に異ならず唯稀れにのみ人間の出來心が市邑の位置を
 定むる自然の大法と抵觸することあり。人間の製造事業の自然の所産なるは猶
 蜜蜂の蜜をつくり蟻の塔を建つるにひとし政治的組織の自然なるは是れ亦蜂群
 蟻族に行はるゝものと異なるなし文明の進歩通商貿易の潮流此等も亦その自然
 に出でたる點は水の流れの自然なると選むところなし。果して斯くの如く人間
 の造くる所のものは都て森林河海に生ずるものと等しく自然のものなりとすれ

ば吾人は此等に對して同一なる快感を得ざるべからず、然るに事實は之れに應ぜざるは奈何。たゞひ雅致あり風韻ある建築のためつらぬたる市街にても之れを通行するの感と森林の間に杖を曳き山路をめぐる際の感とはちのづから異なり。人間の手に成る物はすべて人界に必然離れたる一種の制限一種の特色を脱すること能はず勿論下に擧ぐる如き例外はあり。縱令人間の製作物にあらざるも彼の家畜の如きものは人間に親接するが爲め一種の束縛を脱し得ざる痕跡あり。牛馬は好しうるはしきものにては麋鹿に比しては到底其の雅致を競ふこと能はず又犬猫は栗鼠山羊などの趣多きに如かず比較的猫は他の家畜よりは人間に離れざる制限 (human imitation) の痕跡甚きが如し何となれば猫は人の飼養を受け人の寵撫をば甘じて受けながらも隠然そのれの特色を嚴守して移らず恰も人工をもて飾り成せる花園の中を一條の溪流の走るが如く彫琢練磨せる人間の生活に立ち交りながら依然其の自然の特質を保つ。

此の制限なるものは一時偶然に存するにはあらず人間進化の必然の條件として殆ど人事の一般を蔽ふものなり。人間の智力は本來その特質とするところ分別

にあり而して事物の瞭解力と云ふは分類するものに外ならず。されば智力の進歩は直に是れ事物を辨析解剖することの進歩にして瞭解力の無限の發達は即ち是れ無限の分類をなすことに外ならず。人は瞭解力に依りて自他の別を立て國外物と我れとの限界を明に定む而して己れの箇々の目的を分ちて之れを明晰に自家の前に懸く。是れに由て之れを觀れば瞭解力の發達にはあつから無限の制限といふことを含むものと云はざるべからず。他言もて之れを云へば瞭解力とは事物を斷定するものにあらずや而して斷定は是れ都て制限にあらざるなし。されば總て人爲に成る事物は他の生活物の境界と意識して分離せる孤立の人間が表現せるものなり否此の孤立せる人生も其の全部が表現せらるるにあらず唯或場合に於ける一時の單獨なる觀念目的を故意に寓したるものに過ぎず。さて斯かる絶對の制限は高き審美的感納を破壊するものなり蓋し審美的感納は本來自由の感納なり此の理はラスキンが唱へたる如く美術の中に再現せられたる者は内部に於て無限絶對と通ずる門戸を有すとの説にて解くことを得べきなり。

吾人は既に人爲に成れる事物には一種の制限附隨して離れざるの理を明にし且是れには若干の例外あることを論ぜりき。人爲に成りて而も制限の束縛を脱却するものは至高なる美術の創作物のみなり吾人が例外と云へるは之れを指さす。勿論高き美術と雖も自然がつくり出でたるものゝ如く吾人を感動せしむることは難し吾人は茲に二者を比較討究することを爲さむ何となれば這は目下の問題にあらざれば。吾人は至妙なる美術より得來たる感興は或人に取りては自然より得來たる感興よりも強大なることあるは疑はずされど二者感興の性質を異にするを知らざるべからず。美術にして全く技巧の痕ありとの感を超絶せしめ得るものは甚だ稀有のことなり万一全く此の感を脱却せしむる美術ありとするも這は宗教上の建築物などに限らるべし。自然の美は極致に適へる殿堂の美とは密接の關係を有する由は森林の細道を逍遙する際などに寺院の細き廻廊などをおほるに聯想すれば一段その景色の美感深くなる事實に徴して知らるべし。然るに宗教に無關係なる建築物その他の美術と自然の關係は斯くの如きとなし。寺院殿堂などいふ以外の美術にても自然の美に類似せるものなきにあらざれど

此等は眞に類似せるにあらざ。斯かる別種なる類似のものにも往々趣味あり且吾人の心を喜ばしむるに足るものなきにあらねど此等は審美的快感の圏外に逸するものなるを奈何にせん。

吾人は今迄自然と詩との關係を消極的方面より論じたり。而して吾人は自然界の活氣に對すれば人生の羈絆も人工の制限をも脱離する所あるを見たり。斯く消極的の方面のみを説きて未だ充分なりとは云ふべからず何となれば伴の脱離は鬱鬱たる森林に於てもはた草木なき砂漠に於ても同様に起こり得ざるにあらざればなり。されば充分に説明するには積極的方面を見ることを要す。吾人が自然界より得來たる悦樂は單に人生の羈絆人工の制限の脱離に止まらず一面に會合する所あり心を空虚にするより來たる快感のみならず一方には心を充實する所の原素あり即ち積極的方面を具ふ。

吾人は自然に對すれば圓滿なる生命 (a fulness of life) に接するの思ひあり茲に圓滿なる生命とは斷ちて無數の斷片となされざる生命即ち一團をなせるものを云ふ吾人が自然を轉じて人工の範圍に入るゝに當りてや雜多の思想目的に應じて此